

青少年ツーリズム 交流国際セミナー

報告書

日 時：2008年11月10日（月）9：30～18：00
[交流会・意見交換会（18：10～19：30）]

場 所：大阪国際会議場 12F「特別会議室」

主 催：観光庁、世界観光機関（UNWTO）

後 援：大阪府、日本政府観光局（JNTO）

協 力：国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP）、
立命館アジア太平洋大学（APU）、阪南大学

使用言語：英語、日本語（同時通訳）

青少年ツーリズム交流国際セミナー



会場風景

パネルディスカッション



パネルディスカッション

集 合



スタディツアー



プログラム

9 : 3 0 開会挨拶 P.3

各務 正人 国土交通省近畿運輸局長
本田 勇一郎 世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センター代表
橋下 徹 大阪府知事（代読 大阪府にぎわい創造部長 正木 裕）

1 0 : 0 0 基調講演「アジア・太平洋地域における
青少年ツーリズム交流の現状と課題」 P.7

山川 隆司 UNESCAP ツーリズムユニットチーフ

★アジア・太平洋各国の青少年ツーリズム交流の取り組みと課題★

1 0 : 2 5 講演「香港・日本 青少年ツーリズム交流」 P.14

ケイ チョン 香港理工大学 ホテル&観光業管理学院 筆頭教授 兼
学院長

1 0 : 5 0 講演「韓国・日本 青少年ツーリズム交流」 P.18

イム サンテク アジア太平洋観光学会（APTA）会長
ドンア大学 国際観光学部教授 兼 観光研究機関所長

1 1 : 1 5 コーヒーブレイク

1 1 : 3 0 講演「タイ・日本 青少年ツーリズム交流」 P.21

スワット・ジュタコーン タイ観光庁（TAT）政策・計画局
市場データベースグループ部長

1 1 : 5 5 講演「オーストラリア・日本 青少年ツーリズム交流」 P.25

マルコム・クーパー 立命館アジア太平洋大学副学長

1 2 : 2 0 昼食休憩

★日本の青少年ツーリズム交流の取組みと課題★

13:20 講演 「日本（関西）の青少年が求めるアジア・太平洋各国理解のためのツーリズム交流の形態」 P.28

前田 弘 阪南大学教授

13:45 講演 「訪日教育旅行における学校交流の現状」 P.32

湯浅 勝史 財団法人大阪観光コンベンション協会
学校交流コーディネーター（特命顧問）

14:10 講演 「旅行業界から見た日本の青少年ツーリズム交流の現状と課題」 P.36

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

14:35 コーヒーブレイク

★パネルディスカッションとQ & A★

14:50 パネルディスカッションと Q & A
「日本とアジア・太平洋各国の青少年相互理解に資するツーリズム交流の形態はどのようなものか」 P.45

司会：高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長
パネリスト：阪南大学学生4名、APU留学生4名
コメンテーター：各講演者

17:30 結論 P.65

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

★セミナー総括★

17:45 総括 P.66

山川 隆司 UNESCAP ツーリズムユニットチーフ

18:00 終了

★交流会・意見交換会（18:10～19:30）★ 12F「グラントック」にて

11日 スタディーツアー P.67

開会挨拶

国土交通省近畿運輸局
世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センター
大阪府

開会挨拶

国土交通省近畿運輸局長 各務 正人



ただいまご紹介いただきました、国土交通省近畿運輸局長の各務でございます。UNWTO青少年ツーリズム交流国際セミナーの開会にあたりまして、ひとことご挨拶申し上げます。

本セミナーに多数の方々にご参加いただきましたことに対しまして、心から御礼申し上げます。

さて、本セミナーは、豊かな感性と強い感受性を持ち合わせた青少年のツーリズム交流のあり方について、議論を深め、共通認識を得ることを目的としております。

最近の流出入動向を申し上げますと、日本に來訪する若年層は年々増加傾向にあり日本への関心度が高まっている中、日本の若年層の渡航は減少傾向が続いており、その原因については明確にされていない状況であります。青少年のツーリズム交流の拡大は、単に双方向の旅行者が数の上で増加することにとどまらず、持続的な国際間の相互理解の促進と友好関係の強化を促進し、ひいては国際平和にも貢献することが期待されるものです。これまで青少年をターゲットとしたテーマによるセミナーの開催は多くないので、今回、未来を担う若年層の視線に立って状況やニーズを論じる青少年のツーリズム交流発展に向けたセミナーは大変時宜を捉えた有意義なものになると認識しております。

申すまでもなく、このテーマによるセミナーは、我が国の観光立国に向けた施策の上でも、大きな意義を有しております。

観光立国は、21世紀における、より魅力的でより美しい日本の発展に向けた、政府の重要政策です。その推進のため、2007年6月には「観光立国推進基

本計画」を閣議決定し、2010年に訪日外国人旅行者数を1,000万人にする、2010年に日本人の海外旅行者数を2,000万人にするなど、具体的な目標や施策を定め、そのための様々な取組みを進めているところです。さらに、それらをより一層強力に推進するため、本年10月には、国土交通省内に観光庁を設置したところです。

「観光は平和へのパスポート」という言葉がありますが、青少年の皆さんによるツーリズム交流拡大は、まさにその言葉を体現するものであり、そのことが、我が国の観光立国実現にも大きく貢献していただくことになると認識しております。

本セミナーが、青少年の皆さんによる相互交流活発化の契機となるとともに、観光立国実現に向けた重要なステップとなることを切に願っています。

最後になりましたが、本シンポジウムの準備を主体的に進めてくださった、財団法人アジア太平洋観光交流センター、大阪府、日本政府観光局、さらには、国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP）、立命館アジア太平洋大学（APU）、阪南大学、並びにその他関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

どうもありがとうございました。

開会挨拶

世界観光機関 (UNWTO) アジア太平洋センター代表 **本田 勇一郎**



皆様、おはようございます。

国連世界観光機関 (UNWTO) アジア太平洋センター代表を務めております本田でございます。

本日は国交省近畿運輸局各務局長様、大阪府正木にぎわい創造部長様、またご会場にお集まりの皆様、ご多忙にもかかわらず、おいで頂きまして誠にありがとうございます。

次世代を担う世界、日本の青少年のツーリズムがどのようなになっているのか、実態を数字で捉えることは、かなりの困難を伴いますが、これは私ども UNWTO としても非常に関心のあるテーマです。

UNWTO による 2005 年段階の調査では、全世界的には、青少年、つまりユースツーリズムは非常に伸びているのではないかと報告が一応出ています。

一方、日本の青少年ツーリズムの近年の傾向はどうなのでしょう。教育旅行、修学旅行を別として、青少年が個人ベースでは積極的に海外に従来のようには出て行かなくなったのではないかと声も聞こえて参ります。1970 年代から日本の青少年は、果敢に海外に飛び出していったのですが、現代は、ひょっとして、例えば大学卒業旅行も団体旅行、パッケージ旅行を利用するといった方向に大きくシフトしているかもしれせん。

我が国は国、地方自治体の皆様、また、観光業界関係者の皆様のご努力もあり、近隣諸国とのツーリズム交流そのものは活発化してきています。本日はそれをアジア太平洋、あるいは世界一般の青少年自身のツーリズム交流に焦点をあてて、国連アジア太平洋社会経

済委員会 (UNESCAP) から、そして香港、韓国、タイからの非常に著名な専門家の皆様から講演をして頂きます。また、本日のセミナーは UNWTO 本部と観光学術関係で提携をしている立命館アジア太平洋大学の先生方、留学生の皆様、更には関西の阪南大学の先生方、観光を専攻している学生の皆様から全面協力を頂き、参加頂いております。

皆様のお力によって、青少年ツーリズムの実態を解明し、それにあわせた国、地域の受け入れ態勢はどのようにしていけばいいのか、また青少年自身のツーリズムの価値観、あり方はどのようなものかなどを青少年の皆さん自身も交え、論じて頂くことになっていきます。

本日の講演、パネルディスカッションの結果が、日本、関西の海外からの青少年の受け入れ促進のヒントとなり、また、日本の若者によるアジア太平洋をはじめとする世界各国への雄飛の一助となって、ツーリズム交流をとおして、お互いの理解がますます深まることを祈念して、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

開会挨拶



大阪府知事 橋下 徹

(代読 大阪府にぎわい創造部長 正木 裕)

開催地の地元自治体を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。

国際観光交流を推進する世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センターは、大阪府が平成7年に関西国際空港のお膝元、りんくうタウンへの誘致に成功したときからの深い関係もあり、本日の「世界観光機関（UNWTO）青少年ツーリズム交流国際セミナー」のご盛会を心より喜び申し上げます。

世界の国際化がますます進展する中において、日本の国際化を進展させるためには、次代を担う青少年が、早い時期に世界中の青少年と交流を通じて相互理解を深めておく必要があると感じています。

また、一般的に教育旅行と呼ばれる青少年ツーリズムを通じた交流は、情操教育上の効果だけでなく、将来の世界平和に大きく寄与するものと確信しています。

このセミナーは、アジア太平洋地域における「青少年ツーリズムの現状把握」、「青少年達の求めている相互理解のためのツーリズム交流の探求」、「交流を推進するための受入体制の整備について」など、幅広い視点で充実したプログラムが組まれており、有意義なセミナーになると期待しております。

大阪府においては、府の独自交流事業に加え、内閣府の「青少年国際交流事業」や外務省の「21世紀東アジア青少年大交流事業」なども活用しながら、積極的に、東アジア地域における青少年ツーリズム交流に取り組んでいます。

その青少年交流の現場において一番難しいのが学校

間のマッチングです。

大阪府では、財団法人大阪観光コンベンション協会に学校交流コーディネーターを設置し、コーディネーターを通じて、東アジア地域の各国学校が求めるスポーツ交流や文化交流など様々なオーダーに対し、各校の得意分野、特徴的な取組みなどを迅速にマッチングさせています。

1校ずつの丁寧な草の根的な交流を重ねた結果、昨年度は、1万1千人以上交流を実現しました。交流した多くの参加校からは、満足したという声をいただいています。

本日も、学校交流コーディネーターの講演を予定しておりますので、楽しみにしておいてください。

最後に、この会議を通じ、積極的な交流、意見交換を実現され、その成果が広く世界に発信されますとともに、参加者の皆様が有意義な時間を過ごされますよう祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

平成20年11月10日

大阪府知事 橋下 徹
(代 読)

基調講演

「アジア・太平洋地域における 青少年ツーリズム交流の現状と課題」

国連アジア太平洋経済社会委員会 (UNESCAP)

ツーリズムユニットチーフ

山川 隆司

「アジア・太平洋地域における青少年ツーリズム交流の現状と課題」

国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP） ツーリズムユニットチーフ

山川 隆司



テーマに、アジア・太平洋地域における青少年の観光の振興ということをつけ加え、より広い観点からの話にします。青少年観光の実態を把握する数字はなかなか出てきません。それほど統計的なデータの調査もないので、トレンドの話ということになります。

青少年観光とは一体何であるのかということ、まず取り上げ、続いてアジア・太平洋の青少年ツーリズムの現状と今後、また、UNESCAPの話をしていきます。この話が社会、経済の観点から青少年ツーリズムにどのようにかかわっていくのかという背景説明にもなると思います。また青少年ツーリズムを振興する際に考えなくてはならない課題、私の推奨にも触れます。

青少年ツーリズムの定義については、世界青年学生教育旅行連盟（WYSE）は個人としての独立した旅行が入り、その期間は1年未満、年齢層は16歳から29歳としています。1年を超えると青少年ツーリズムとはなりません。親が見つからないインディペンデントであり、また学習のチャンスがあるというのが青少年ツーリズムの根幹にある特徴だと言えます。

青少年ツーリズムは非常に重要な市場でもありますが、政府、民間双方によって十分に認識されていません。世界観光機関によれば、青少年の旅行が、国際的な観光客の20%以上を占めていて、1年間で国際的に旅行をする青少年の数は1億6,000万人以上、そして1,360億ドル以上の収入がもたらされていると推定されています。では、どういう動機で1億6,000万人の人が海外旅行をするのでしょうか。81%の人たちが、自分たちの知識を広め文化を探索したい、その地の人と友情を高め、交流を深めたい、その地の日常生活を経験したいと、そうしたことが挙げられています。また、若い人たちはより長く滞在するという傾向があります。そして、お金を直接的に使って、そこで生活をします。その支出額はそれほど大きいものでは

ないかもしれませんが、全額で計算をすると、その地域の経済に大きな貢献をする可能性があるということです。

いろいろなところに若い人たちが行き、ツーリズムを主要な観光の拠点以外のところにも広げるのです。例えば、タイでは、バンコク、チェンマイ、プーケットなど人気のところ以外にも青少年ツーリストは行きます。コーチャン、コーサム、コーピーピーへ行ったりすることによって、主要な観光の拠点以外のところもやはりツーリズムの恩恵を受けるといえます。若い人たちは直接的にその地域の人たちとコンタクトをしたいと考え、また自分たちだけで、あるいは一人で旅行して文化との遭遇、そして社会的なインターアクションをとろうという気持ちが強いわけです。

こうした若い人たちにサービスを提供する側ですが、事業としては資本投資がそれほど高くなくてもいいのです。宿泊施設にしても、五つ星のホテルのように高いものでなくてもいい。リーズナブルな安価なホテル、あるいはユースホステルやゲストハウスに泊まる若い人たちは多いと思います。そのような宿泊施設を始めようとする場合の資本コストは、豪華なホテルを始めようとする場合と比べますと、その投資額はずっと少なく済むということです。また、若い人たちが旅行することは社会にもとても重要な役割を果たしていると思うのです。その若い人たち自身にも大きな影響を与えています。知識がふえますし、他の文化を理解することができるようになります。その人たちが旅行から帰ってきますと、自分たちは一層グローバルなコミュニティの一員なのだという気持ちを高め、自分たちの地平線を高めた、広めたということで、さらに心は開かれ、自信を持ちながら人を許す気持ちを持って接することができるようになると思います。

UNWTO、WYSEのレポートによれば、若い人

たちの80%がインターネットでいろいろな情報を得て、そして旅行に出かけるということです。新しい技術を使って家にいながら情報を得、50%の人たちがインターネット予約をしているということもわかりました。民間の事業としては、このマーケットにいかにかけるかということが重要になります。そして、ウェブサイトで観光関係の商品や、いろいろなプログラムを打ち出すことが必要でありましょう。そうした投資は将来に対するものです。前向きな経験を積んだ若い人たちが、今度はリピーターとなって、同じところに旅行するということが多いわけで、将来につながります。

UNESCOの定義するアジア・太平洋地域は、トルコまでの西、そしてロシアが北、またオーストラリアが南となります。太平洋の島嶼(とうしょ)諸国も入っています。この地域は人口稠密ですし、その開発の度合いがいろいろと違う53カ国と9の地域があります。ダイナミックな経済成長、経済の安定をもたらすところであります。そして、そのパワーハウスとなっているのが日本、韓国ということでしょう。オーストラリア、ニュージーランドは先進の国で、高所得の国民が住んでいます。また、経済のエンジンの役割を果たしているのが、非常に巨大な人口を抱える中国とインドです。そしてASEAN諸国がありますが、今、堅調な推移で拡大を続けている経済国です。

その一方、14の最貧国と呼ばれる国があります。国連の定義にのっとってということで、カンボジア、ミャンマー、ラオスPDR、ネパールといったところですが、さらに、17の島嶼諸国であります。フィジー、サモア、といった開発ということでは、遠隔の地というところから市場としてもハンデを負っている国です。また、8億の人たちがこの地域に住んでいて、また全世界の貧困層の67%がこの地域にあります。貧困層といえますのは、1日当たりの所得が1米ドル以下の人たちを言います。

アジア・太平洋地域は今、世界を変える力があるのだと考えます。もしアジア・太平洋の経済が今後とも繁栄を続け、そしてグローバルな経済の安定をもたらすことができれば、貢献は大きいと思います。反対に

インドとか中国がその経済の拡大がストップするということであるならば、グローバルな経済危機というものにさらに拍車がかかってしまう可能性があります。アジア・太平洋地域というのは、地域として全世界を変える、その要となる地域だと言えます。

では、アジア・太平洋のツーリズムに話を移しましょう。過去数年間、急激に伸びてきました。その伸びの度合いは、ほかの地域を超えています。巨大な潜在能力がまだあって、今後とも成長可能と考えます。というのも、地域の経済が非常に強いということ。そして輸送であるとか、航空路線などの整備が進んだ。さらにまた、ローコストの航空会社もふえています。多くの国々、地域においてツーリズムを優先課題としています。そして、その進展を目指して査証なども円滑ということでもいろいろと努力をしています。さらにASEAN諸国同士での協力というものも態勢として強まっています。

では青少年のツーリズムが今後拡大の可能性が大きいのだということをご紹介しましょう。それは航空路線の整備ということでもありますし、ローコストのエアラインが台頭してきたということなのです。さらに重要なのは、この地域は自然の景観が美しく、文化遺産にも恵まれていて、それが魅力となっているのです。54カ国ぐらいユニークな文化・伝統がある。そしてまた、もてなす伝統がありますし、また自然の景観が美しいということとあいまって、すべての国が若い観光客を受け入れる素地があるということなのです。さて、市場を考えてみますと、このようなユースツーリズムを送り出す側の国ですが、それは経済力の強い国に限られます。また、スチューデントツアーが今ふえています。オーストラリア、そしてニュージーランド、日本、タイ、マレーシア、シンガポール、韓国といったところですが、学生のツアーは今重要になってきています。例えば、日本の場合には、大学ですと、100を超えるようなエキストラカリキュラムのクラブ活動を盛んにしています。そうした大学からツアーをするということなのです。二、三十年前であるならば、日本国内に限られていたのですが、今ですと、テニス

クラブがタイに行って、クラブ活動をするということです。タイにはテニスとかゴルフの施設があるので、そこを使うことができます。ですから、そうした領域でも今後、交流をする可能性はとて高いと言えます。

ワーキングホリデーも一つの重要なやり方です。特に若い人たちがより長く滞在するオーストラリア、ニュージーランド、そして韓国、日本などがそれをオファーしています。スポーツや文化の交流イベントというのも、非常に可能性は高いと考えます。第24回ユニバーシアードですが、これは第2の大きなスポーツイベントということで、オリンピックに次ぐものであります。そして、それが昨年バンコクで開かれ、152カ国9,000人のアスリートの参加がありました。スポーツ、文化のイベントは、非常に大きなインパクトを持っています。国内のツーリズムにも話を進めたいと思いますが、これも重要なのです。

国内旅行

青少年の国内旅行は、国内の富の再分配・経済発展に寄与する。

海外旅行と国内旅行の比較
アジア・太平洋諸国より抜粋

| | 基準年 | 国際観光客 到着数 (100万人) | 国内旅行者数 (推定) (100万人) | 国際観光 対 国内旅行 |
|--------|------|-------------------------|---------------------------|-------------------|
| 中国 | 2005 | 46.8 | 1,212.0 | 1:26 |
| インド | 2003 | 2.8 | 309.0 | 1:110 |
| インドネシア | 2005 | 5.0 | 31.3 | 1:6 |
| タイ | 2005 | 11.6 | 79.5 | 1:7 |
| ベトナム | 2003 | 2.4 | 13.0 | 1:5 |

この表にあるように、中国を見てください。右側に、海外と国内というふうに、その比率を示しています。国内のほうが26倍になっています。そして、インドは、さらにそれが大きくて、110倍です。ということは、これは到着でありまして、国内に入ってくるツーリストの数であります。UNWTOのスタディーがあり、その20%が青少年ツーリズムのカテゴリーに入る人たちだということです。ですから、国内のツーリズムに、若い人たちが参加するものにもっと注目していいと思います。それも経済の進展をその国内で推進するのに大きな役割を果たしているということ。さらにまた、意識喚起ということにもなりましょう。自分

の国の文化・伝統を学ぶということが出来るわけです。国内旅行はまた、海外への旅行に比べまして、経済変動などに対しても余り見舞われにくい、安定して行われるということが知られています。

次にツーリズムをより若い人たちに対して振興する際に何を考えるべきなのかということです。

まず、青少年ツーリズムは効果的に国連の掲げる目標を推進する力があるということです。社会経済的な進展、開発、貧困の撲滅、そして環境の保護といったことであります。経済的に見ますと、海外旅行は外貨獲得ということで非常に重要なソースになる場合が多いわけです。

**ラオス人民民主共和国の観光業
各産業の収益および順位
(収益の単位：100万米ドル)**

| | 2001 | | 2002 | | 2003 | | 2004 | | 2005 | |
|------|-------|----|-------|----|------|----|-------|----|-------|----|
| | 収益 | 順位 | 収益 | 順位 | 収益 | 順位 | 収益 | 順位 | 収益 | 順位 |
| 旅行 | 113.8 | 1 | 113.4 | 1 | 87.3 | 2 | 118.9 | 1 | 146.7 | 1 |
| 衣料品 | 100.1 | 2 | 99.9 | 2 | 87.1 | 3 | 99.1 | 2 | 107.5 | 3 |
| 電力 | 91.3 | 3 | 92.7 | 3 | 97.3 | 1 | 86.2 | 3 | 94.6 | 4 |
| 木製品 | 80.2 | 4 | 77.8 | 4 | 69.9 | 4 | 72.4 | 4 | 74.0 | 5 |
| コーヒー | 15.3 | 5 | 9.8 | 7 | 10.9 | 9 | 13.0 | 8 | 9.5 | 8 |
| 農産品 | 5.7 | 6 | 25.6 | 5 | 11.1 | 8 | 20.5 | 6 | 26.6 | 6 |
| 鉱物 | 4.9 | 7 | 3.9 | 8 | 46.5 | 5 | 67.4 | 5 | 128.3 | 2 |
| 工芸品 | 3.8 | 8 | 2.7 | 9 | 12.4 | 7 | 1.9 | 9 | 2.7 | 9 |
| その他 | - | - | 19.9 | 6 | 17.1 | 6 | 13.4 | 7 | 11.9 | 7 |

ラオスのデータがあります。最貧国の一つになるわけですが、観光がナンバーワンの外貨獲得の産業だということです。電力がありますが、ラオスはタイから電力を買っているのです。そして、ツーリズムがありますが、将来を考えるならば、ラオスはやはりそこに依存するということが見えます。

多くの最貧国に入る国々は、ツーリズムから多くの便益を得ることができるわけで、その例がここで描かれています。さらにまた、社会の開発にも寄与することができるのが、このようなツーリズムであります。ツーリズムのセクターがどのような形で貢献しているのか、GDPの31%であるということがわかっています。そしてまた、外貨獲得の重要なソースであり、また税収源ともなっています。さらに政府は財政的な資源をそこに投入するということで、教育あるいは健康状態、保健状態を改善しようと努めます。そうした

ことによって、モルディブでは、今 100%の識字率になったということで、大きな社会的な進展があったということです。そしてまた、乳幼児の死亡率ですが、1977年には人口 1,000 人当たり 121 死亡あったものが、2004年には 1,000 人当たり 38 死亡になっています。また、寿命も長くなっている。47年から67年ということです。そして、これが可能になったのは、ツーリズムが繁栄したからです。これがなくては達成することは不可能であったと考えます。

さて、アジア・太平洋地域の重要な課題は、いろいろな意味で貧困だと思います。国連は「ミレニアム宣言」を発表しました。そして、加盟国が1日当たりの所得が1ドルを切るような、そうした所得の人たちの数を2015年までに半減するというコミットをしています。貧困との戦い、そしてその関係でツーリズムの産業を考えるということになりますと、やはりいろいろなポテンシャルの力が結集して、社会経済的な進展という形で実を結ぶ可能性が高いということがわかんと思います。

さらにまた、貧困の撲滅につきましては、物を買うということ、また地元からサービスを購入することによって、直接的に貢献できるわけです。自分がどこに行くのか、どういうふうに行きようか、何を買いようかというふうなことを考えるときに、その国々の便益も考えて決断をしてもらえるようになればと希望します。そして、環境とか文化遺産というものに対しても認識が高まるでしょう。地元の文化、自然環境といったものを慈しむ心が生まれると思います。青少年旅行者が尊敬の念を持って地元の文化を尊び、自然を愛し、そうすることによって文化と自然の環境の保全に努める、それに貢献できるようにと願っています。

若い人たちが世界平和の構築に貢献できると思いますが、ツーリズムはその意味で異文化間の理解、違う国同士の間での理解の深まりであると思います。それは世界全体の平和の高まりということに帰結すると思います。地元の人と交流すること、そして文化を学ぶということ、そうすることによって平和を促進し、全世界の平和の環境に貢献しているのだということが

認識されるべきだと思います。

青少年のツーリズムにおいては、非常に重要なアジアチブでプログラムを実行している国があります。オーストラリアはワーキングホリデーを持っています。そしてまた、日本、シンガポールもそうです。インドですが、ユースツーリズムパッケージという施策で臨んでいます。これは、第9次5カ年計画の中に盛り込まれているものであります。そしてまた、フィリピンのほうでも、ユースツーリズムポリシーがつくられていて、そのマーケティングで努力をしています。タイは、スポーツ・文化のイベントを促進しようということで力を入れています。

一つの地域間の連帯、その協力ということで学生交流の話をして。ネットワークをしようということ。アジア・太平洋が観光部門の人材育成ということで、UNESCOが1997年につくったものがあります。アペティットと呼ばれていますが、45カ国、252の参加の機関があります。そして、学生の交流プログラムがありまして、オーストラリア、マレーシア、香港、マカオ、韓国、タイ、イランが入っています。どの国がどれぐらいのメンバー機関を持っているのかということですが、インドが38、ベトナムが39、そして日本は立教大学と立命館大学、そして埼玉大学、そして日航財団となっています。非常に有用な情報、データ、そしてネットワークのチャンスにつながるようなものが提供されていますので、そのホームページを見ていただければと思います。アペティットのネットワークがこのような協力を進化、そしてまた拡大しようということで、教育を目標として、いろいろなところに展開していくと思います。それにより、有用な情報をさらに分かち合えるようにということを目指しています。

さて、ユースツーリズム振興のために何が重要なことかということ、あるいはどのような課題、困難性があるのかということを考えています。

大きな問題は、統計データがないということです。その規模がどうであるのか、インパクトがどうかということ。どのようなプロフィールの、何歳ぐらい

の人ということが、統計的なデータがほとんどの場合ないのです。また、その人たちがどれぐらいお金を使うのかというデータも余りありません。

2つ目ですが、1つ目の問題に関係していますが、データがないということから、そのユースツーリズムが政府のほうでプライオリティーを与えていない、優先順位としては高くないということです。若い人たちは余りお金を使わないのだというふうに産業界のほうでも考えてしまうということです。したがって、政府も民間も認識が薄いということが言えましょう。

3つ目ですが、したがって社会経済の観点から、きちんと調整されたポリシーをつくる必要があると思います。ユースツーリズムを振興させるならば、やはりハーモナイズされた形ということだと思います。ツーリズムだけではなく、教育とか文化ポリシー、また青少年に対する政策、そうしたものが全部コーディネートされる、あるいは移民政策もかかわるといった形でする必要があると思います。コーディネートされたポリシーがあって初めて、このような青少年ツーリズムが進展できると思います。多くの国々でビザ発行を単純化しようとしています、この地域におきましても、残念ながらそれほどビザの発行が容易ではないということがあります。それがやはり阻害要因になっていると考えます。

それでは、どうしたらいいのかという私の推奨事項ですが、もう少し調査が必要であると考えます。どれぐらい人々がお金を使っているのか、どういうふうなパターンで旅行しているのか、そして何を求めてといった、いろいろな局面についてのデータを集めるということです。各国の政府観光機関ですが、その数とそしてまた年齢等をつかむことによって、ユースツーリズムの数がどれぐらいであるのか、ボリュームの把握ができるように、そうした分類も必要であると考えます。そして、分析的なスタディーをするということによって、社会文化的なインパクトを把握することも必要であると考えています。

もう一つは、人々の意識の問題です。ユースツーリズムが地元のベネフィットにつながるのだというこ

と。また文化のつながり、国際的な理解の深まりに貢献できるということでもあります。そして地元の物を買って、そこからサービスを受けるということによって、その経済に貢献するということの認識も高まるべきだと思います。その意味で、やはり広報活動といったことが重要でありましょう。青少年のツーリズムが社会経済の全体的な発展に非常に重要な役割を果たしているのだということが認識されるようにしなくてはなりません。

また、青少年ツーリズムを明確に、その国の観光のマスタープランの中に取り入れていくということでありましょう。いろいろな国々のマスタープランがありますが、今のところ、そのいずれを見ましても、ユースツーリズムというものが掲げられていない。統合型のポリシーをつくるということでもあります。さまざまな省庁間のコーディネーション、連携ということも重要です。文化・スポーツの交流ということですが、姉妹都市間で行われるということがありましょう。そしてまた、二国間でとか、あるいは地域間でということがあると思います。

また、旅行に先立ってインターネットのウェブサイトで情報を得る人が多いと先ほど言いました。そうしたことに対応する努力が必要でありましょう。ヨーロッパにおきましては、ディスカウントのスキームが多いです。対象は青少年ツーリストであります。そうした形で安いホテル、そしてまたワーキングホリデーなどで迎え入れるということが必要でしょう。

青少年ツーリズムですが、我々の生活、そしてまた世界をいいものにすることができる、平和に対して貢献できる、そしてより美しい世界を発見してくれるのも彼らであると考えます。より多くの人たちがもっと旅行し、さらにほかの人たちを知り、発見し、そして自分自身を発見する旅を続けていってくれればと願うものであります。

講 演



「香港と日本の青少年ツーリズム交流について」

香港理工大学 ホテル&観光業管理学院 筆頭教授兼学院長

ケイ チョン



私は本日、青少年ツーリズムをどのように活性化するか、いわゆる教育面からお話したいと思います。

私はホテル&観光業管理学院を代表しており、この学院の学生はバランスのとれた技能の習得が必要です。3種類に分けると、まず、専門的な技能の能力が必要です。学生は卒業後、マーケティング、財務、人材、あらゆる意味での管理をしなければなりません。プラス、専門職としてこの観光業の運営、ホテル、ホスピタリティーなど、専門的な技能が必要です。さらにソフトスキル、いわゆる人間関係、コミュニケーションスキルも必要です。また、学生達はインターンシップを通じて業界での経験を実際してもらいます。国際性、そして多文化性の技能も大切です。ホテル、観光業管理にとってこれら3つの技能がとても重要です。

では、国際性、そして多文化性はどのように身につけることができるか、アプローチは3つあります。まず1点目は、国際性、そして多文化性の環境の中での勉強。3-4年、多文化の国際的な環境の中で学ぶと、自然に国際性が身についていくでしょう。2点目は、本日のセミナーの課題である海外旅行の機会を得ることです。海外に行き、多文化性の環境の中で、自分の社会だけでなく、外に出て行って仕事をする経験です。青少年にツーリズムは必要で、この旅行のための旅行、それから仕事のための旅行も必要です。

香港の場合、様々な機会、また興味もあると思います。例えば、学生が国際的な旅行ができ、オープンマインドなので、外国人恐怖症は学生の中にはない。香港は国際都市ですから、パスポートを持つ人口の割合は世界トップと言われていています。香港で赤ちゃんと生まれると、まず両親はパスポートを取ります。香港は小さいので常に旅行をしなければならない、海外に出ていくわけです。約70～80%の人達はパスポートを持っているので、国際的な経験を積むことができます

言えます。

もう一つ、英語が話せることが大きな利点だと思います。また、留学生に香港は様々ないい機会を提供します。つまり、英語で教育しているので彼らが香港で勉強しやすい。また、一般的に、旅行先として香港のイメージがとても良い、活気に溢れる街、安全だということ。しかしながら、限界や問題点も抱えています。最大の問題は、香港の教育制度です。柔軟性がなく、留学生がフルタイムで勉強できないことです。700万人の人口を抱えているのに大学が8校しかないの、制限されてしまうからです。日本では大学が220あると聞いています。比較すると香港は非常に限られ、全人口の4～8%しか留学生を受け入れられず、大学全体で4%の外国人学生しか受け入れられないのです。個別の学部では上限が8%、部門、学部によっては留学生を受け入れたくないところもあるでしょうから、こういう条件がついているのです。現在では220名の枠に3万5,000人が申請するので、倍率が約160ということになります。

この問題を解決するのに、学生交流という良い方法があります。香港の学生を受け入れて、大学レベルで交流させるのです。香港の学生が外国で学べて、外国人学生も香港にやってくる機会があるわけです。また、香港に留まる学生にとっても、外国人学生と一緒に勉強する機会が得られる。そこで、様々なアプローチを考えていて、例えば、国際的な教育、青少年の受け入れとして、まず学生交流です。

2点目は、地元でなく海外でのインターンシップです。夏期に全学生はインターンが必須なのですが、香港ではなく外国にも出しています。3点目は、研修として香港に迎え入れること。4点目は、学生を香港に連れてくること。また、「一日教授」という制度を設けています。それからもう一つ、学生の多くはインター

ネットを使っていますので「バーチャル教室」を設け、国際的な経験を可能にしています。この学生交流のプログラムですが、国際的な旅行、また香港に学生を受け入れるという意味で、青少年交流ができるのです。私どもから中国、カナダ、オーストラリア、フランス、フィンランド、韓国、ペルー、タイ、ニュージーランド、英国など、多くの国々に学生を送っています。このプログラムが7年前にスタートするまでは、海外で学ぶ学生は全くなかったのですが、現在はこれを活性化しています。この7年間に、計165名を海外に送り、172名を外国から受け入れています。この取り組みをしている国のなかでフィンランドが非常に人気で、香港の学生が55名も行っており、フィンランドからは44名受け入れています。同様に、オランダにも人気があり、その次が、英国、オーストラリアも人気があります。

日本では、立教大学と立命館アジア太平洋大学（APU）と提携しています。APUから6名受け入れ、私どもから3名を同大へ送り込んでいます。私どもの学生は、ある程度日本語を話す学生もいますが、日本語での授業は受けられないため、全コース日本語の立教大学では言語の問題があり、英語で受講できるAPUに送っているわけです。

学生交流でまず不都合な点として、始業時期の違いがあります。香港は2期制で、第1期が9月1日から、第2期が1月半ばからスタートなので、大学間の交流のためには、同じ季節、もしくは同じ期制でやらなければなりません。大学によっては8月にスタートして7月に終わるところもあり、12月から4月の間は何かもないということになってしまいます。また、カリキュラムに同等性がなければならず、うまく合わない問題もあります。

3点目は、目的地のイメージ。安全であるか、生活費はどうか。学生にはチャンスとしてヨーロッパに人気があります。ユーロバスでヨーロッパ全体を1-2カ月旅行したいと思っており、目的地としてのイメージはとても重要です。

4点目は、言語のコンパチビリティがあるか。英語が使えるかどうか、共通言語がどうかということ。

香港では中国語と英語の両方話せますので、英語で受講でき、台湾と中国ではマンダリンで受講できます。

それから、文化のコンパチビリティ。異文化の中で居心地がいいかという点。それから、海外インターンシップ、これは第2点目の方法ですが、国際的企業とパートナーシップを結び、香港に支店があるような企業へ私どもの学生を送り込み、そして外国に送って、例えば夏の間、国際的な経験を積ませて頂くといったことを行っています。このようなやり方は、青少年ツーリズム、また国際教育の一つだと考えています。学生たちは観光業や、ホテル業界の中で様々な運営を見るのですが、通常は6月～8月あたりの夏期、あるいは1年間のプログラムもあり、海外への研修旅行もカリキュラムの中にあります。多くの授業のなかで、海外に出ていくプログラム（ドバイ、エジプト、ハワイなど）を作り、いわゆる観光業（ツーリズム）のコンセプトを理解してもらうようにしています。女性グループが韓国チェジュ島に行き、約94名の学生が参加して会議運営のコースを勉強してきました。チェジュ島、プサン、ソウルなどのコンベンションセンターに行きました。また空港運営のクラス、香港では雇用の機会がある空港管理、航空管理の学科もあり、いかにベストプラクティスは何かを学べるようになっていきます。

また、文化的観光も行っています。海外旅行の費用は高いので経費の約60%は大学側で支援し、40%が学生の自費です。

それからもう一つ、政府の支援を受ける非常に面白いプログラムがあります。香港を様々な国の若者達に理解してもらうため、香港観光局（HKTB）が青少年ツーリズムを推進しています。数年前、香港観光局がウェブサイトでプロモーションし、エッセーコンテストを行いました。韓国の学生に香港のイメージについてエッセーを書いてもらい、そのうち50名のベストエッセーを書いた学生を選んで賞を与え、彼らに無料の香港旅行をプレゼントしました。その旅行には教育的な要素、文化的な紹介も入れております。一日私どもの大学にも来てもらい、1対1でうちの学生が各学生に同伴する形で、非常に効果的に交流ができた

考えています。同様に香港観光局がアレンジして、東京の私立学校でトラベルジャーナルグループのホスピタリティツーリズム専門学校から2006年に60名の学生が、2007年には62名の学生が香港にやってきました。一日私どもの大学にも来られ、全体で4-5日のプログラムで、香港の観光、文化を学んで頂きました。こういったアプローチはとても有効だと考えています。

それからもう一つ、現在模索中ですが、国際的な大学の学生達対象のフィールドトリップです。米国、韓国、日本の3カ国の学生対象で、各国の大学において単位が付く香港でのスタディープログラムを企画してもらい、約30~40名の学生に2週間来てもらうのです。また、この機会に香港理工大学の教授による授業も行いました。

私どもが展開する非常に興味深いもう一つのプログラムは「一日教授プログラム」です。国際的な側面を教育面でも促進したいと考えており、政府の高官や海外の方たちを招き「一日教授」になって頂くのです。「ゲストスピーカー」は非常によくあるので、もう1ランク上げて、一日教授としました。一日教授と呼ばれますので、非常に格のあるプログラムと考えられ、記念楯を贈呈することからもとても誇りに思っているそうです。このプログラムはとても成功しており、香港の観光大使であるジャッキー・チェンにもなって頂きました。彼のレクチャーは順番待ちでクーポンを発売したほど本当に人気があり、また日本や韓国からファンも聴講に来ました。彼には単に一日教授だけではなく、我が大学の名誉教授になって頂きました。これはいわゆる講習だけで支払いはなく、講義と、学校のスカラシップのための基金集めへの協力、これら2点を約束してもらいました。「ジャッキー・チェン教授との夕べ」というガラディナーを香港のインターコンチネンタルホテルで主催し、基金集めをしました。彼個人の持ち物をオークションに出品くださり、一晩で300万香港ドルを非常に効果的に集めることができました。いつも学生に教えていますが、創造力がとても重要だと思います。創造的であれば、様々なことが

できて新しいアイデアも生まれます。このイベント後、ジャッキー・チェンは、私を自宅での夕食に招いてくれました。贈り物として「名誉教授 ジャッキー・チェン」と書いた名刺を差し上げたら、喜んで頂きました。これまで5,000枚以上刷っており、彼にこの名刺を渡して頂くようお願いし、大学のマーケティングにもつながっています。彼は1年に一、二回しかいらっやいませんが、名誉教授のオフィスを設置しました。彼のオフィスを見たいという人がいて、観光スポットにもなっていて、彼のファンも来るので、お土産に彼の名刺を差し上げています。

他にもエピソードとして、2年前、ジャッキー・チェンをUNWTOアジア・太平洋地域の大使に任命しました。

昨年、どうすれば国際的な青少年ツーリズムを活性化できるかと、バーチャルな環境をつくっていかうと考えました。現在の若者は、我々が学生の時代とは学習方法が全く異なり、机もなく、ベッドに寝転がってiPodを聞き、テレビを見ると同時に、コンピューターを使いながら勉強しています。いかに若者とコミュニケーションをとるかを考えなければならないということで、バーチャルな環境をつくりました。その中で、日本、韓国、オランダ、アイスランドの人たちと会えて、お互いに交流でき、共同の研究課題も可能です。現在、約1,000万人が参加してこのバーチャルな環境を楽しんでいます。2011年には全てのインターネットユーザーが何らかのバーチャルな世界、セカンドライフを活用すると言われていました。香港、英国、オーストラリア、その他の国の学生たちがリゾートアイランドをつくりました。人工的な、現実には存在しない島ですが、その中にホテルと会議場をつくり、共同事業にしたのです。例えば施設の計画、設計、リゾートスパの管理や、会議運営、カスタマーリレーション、そしてマーケティング、これは非常に効果的です。実際私が高校生だった頃、ペンパルという文通相手がいて交流していたのですが、現在ではバーチャルワールドを活用することで昔のペンパルのような活動ができるわけで、そういう意味での青少年ツーリズムを活性

化することもできるでしょう。

大学としては国際的な教育や、青少年ツーリズムを活性化するために、やはりその教員陣も国際性がなければなりません。SHTM（ホテル&観光業管理学院）は18カ国から教員が60名以上いて、非常に国際性があり、私たちは恵まれていると思います。

そしてプロモーションもかけます。私どもはホテル&観光業の学校として世界でナンバー4、アジア・太平洋地域ではナンバー1です。これが新聞で報道されました。世界でナンバー1になるにはどうすればいいかとよく聞かれますが、学校所有のホテルが必要だと答えています。バーチャルホテル、実際のホテルではないですが、これを一つの土台として、教育をさらに進めていきたいと考えています。現在建築中で、2010年にキャンパスの隣にでき上がります。教室とラボ、オフィスもあり、278のデラックスな部屋、レストランは3つあります。それからハウスオブイノベーション（新しい技術を取り入れたようなショーケース）。非常に有名なバニヤントウリーのスパもつくります。バニヤントウリーが経営してくれます。会議場、ボールルーム、さらにサムソンのデジタルラボもつくる予定です。

私どもが実行していかなければならない点ですが、国際的な青少年ツーリズムは、政府あるいは大学という観点からではなく、さらに幅の広い、より国際的な教育という観点から見ていくことが必要だと思います。それを可能にするため「創造性」がカギになると思います。つまり、箱から出て考え、バーチャルなところからやっていかなければならない。そして、学生が国際的な側面をより勉強できるよう、様々なことを試さなければなりません。私どもの教員陣も、国際性をさらに促進するために国際的でなければならぬと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

「韓国と日本の青少年ツーリズム交流について」

アジア太平洋観光学会(APTA)会長、ドンア大学 国際観光学部 教授兼観光研究機関所長

イム サンテク



青少年のツーリズム交流ですが、私はYTEとしておりますが、調査をしていきますと、傾向としていわゆるプライベートベースな交流、ツーリズムというのがより活発であり、さらに、政府主導型のツーリズムがそれほど多くないのはなぜかということ調べてみました。

韓国でのYTEの定義がありますが、韓国政府は、青少年ということを15歳から24歳というくりに再定義いたしました。UNWTOは16歳から29歳で少し異なっています。

また、青少年のツーリズム交流ですが、これは非常に広範、包括的でまた複雑なエリアで、トレーニング、そして交流、文化的活動、これを若者のエリアというふうに定義づけています。すなわち、大半のこういった活動が、いわゆる観光交流ということになるわけですが、さまざまな種類のYTEが存在いたします。例えば、学校ベースのもの、学校・教育ツアー、あるいはフィールドトリップと言われるもの、そういった交流ということですが、また、国際的な組織ベースとなります国際交流プログラム、あるいは交流トレーニングプログラム、あるいは産業界と大学とのリサーチプログラム、またプライベートでいきますと、バックパックスのツアー、言語教育ツアー、ワーキングホリデーツアー。グループとなりますと、ファミリーツアーとか、スモールグループツアーといったものが考えられると。

青少年のツーリズムポリシーということで、両国間を考えてみました。

韓国の場合には、保健福祉家族省があります。また2種類の政府レベルの特別な委員会があります。それによって、青少年のツーリズムを促進しようというのですが、まず一つが、青少年保護委員会というのがあります。もう一つが、全国レベルの青少年委員会と

言われるもので、主たるタスクは、国際化また情報化時代に向けての能力を高める、開発をする。もう一つのタスクが、福祉と自己の主体性を開発するためのサポートをするということになっています。そして、このような目的を達成するために、幾つかの重要なYTEプログラムというものがつくられています。それは主に、例えば日本あるいは中国の青少年との友情を高めるための出会いですとか、もう一つ強調したい点は、すなわち、3カ国、日本、韓国、そして中国がいかに重要であるかということです。この3カ国ですが、非常に類似性があります。非常に距離的にも近いわけですから、ほとんど国内旅行と変わりません。そしてまた、我々の考え方というのも非常に似ていると思います。ですから、共通したところがこの3カ国の間にはあると思います。

そういったことが大きな理由となって、韓国の若者が日本、中国に行くという人気があるわけで、より新たな世代の一つの大きな傾向となってきています。また、韓国政府は、コリアンユース・トゥー・ザ・ワールドということで、世界に韓国の若者が出ていくようにということで、毎年全世界に若者を送り出しています。

さて、一つのケースですが、日本の高校生を韓国に招待いたしました。約150名の学生がやってきて、そして文化交流、あるいは韓国の食事をつくるというようなことを楽しみました。テレビのニュースで放映されたものでありますが、このストーリーには両面があります。一つがいい部分。もう一つが悪い面です。

いい面といいますのは、ニュースでのビデオファイルが非常によい証拠になっている。すなわち、韓国と日本の政府が青少年の交流ツーリズムを高めるために、どれだけ努力しているかということがわかります。悪い面といいますのは、ニュースに取り上げられたと

いうことは、余り頻繁に行われているイベントではないということです。そういった意味で、もっとこういった交流は広げるべきだと思います。

日本政府は非常に興味深い国際的なプログラムを進めています。2008年8月、「アジア青少年交流プログラム in 沖縄」というものが行われました。主要なこの中で活動といたすのは、環境問題、あるいはサンゴ礁の勉強をする、ディスカッションをする、科学者と会う、また研究開発施設などを訪れたり、ホームステイをするということです。言語は英語ということで、日本政府の内閣府が主催しました。これは非常によいプログラムだと思います。将来的にこういった交流を高めていくことができればいいと思います。

さて、2007年の段階で、韓国のデータですけれども、YTEという観点から見たら、どのような国際的な関係があるかということですが、トータル27カ国とMOUを韓国政府が取り交わしています。日本は受入れ、また訪問、そしてトータルにおいても一番です。1987年に日本政府とMOUを交わしました。これはYTEに関してです。20年以上たって、まだ1,300名以下しかないということで、この2カ国間の関係を考えますと、非常に数が少ない。これは政府ベースのものであって、もちろん何百万という人たちがプライベートでは動いているわけですが、正式な政府レベルでの招待、また訪問ということになりますと、1,300名以下ということになるわけです。第2番目が中国です。大体1,000名。こちらもがっかりする数字で、もっともっと数をふやさなければなりません。ロシアはもっと数が少なくなります。フランスですが、全くこれまでMOUを交わしてから、一切そういった意味での数字がありません。インドの数字も非常に小さいということで、また残りの22カ国ですが、非常に数が少ないということになっています。

さて、日本人の方が昨年200万以上の方が韓国に来られています。韓国に来られた目的ですが、4万人の方がスタディーツアーということです。将来的にこの数字がもっとふえればと願っています。

では、韓国の学生たちはどこに行くだろうかという

ことを調べてみました。まず1番が中国で44%です。そして2番目が日本で38%ということで、またここでも中国と日本が非常に大きな、関心のある国であるということがわかります。では、日本の学生はどうでしょうか。オーストラリアがまず1番、韓国が2番、そして3番目が、カナダも含めた北米です。日本の学生さんたちは、目的地を選択する上で、少しばらつきがあります。

では、なぜ韓国の学生は日本に行きたいのかということですが、まず第1番の答えは、自分たちの国際的な視野を広げたいということ。そして2番目が日本語を勉強したい、日本語を勉強するというのが、非常に韓国では今流行しています。もし韓国で流暢に日本語をしゃべれば、よりよい仕事につくことができるのか、いわゆる韓国での成功が保証されるということで、日本語を勉強するということが非常に重要なのです。

英語が一番で、日本語、そして中国語というふうに、若い韓国の世代の学生たちは、一生懸命外国語を勉強しているわけです。

日本の学生たちはなぜ韓国に来るのかということですが、1番目に国際的な視野を広めたいということ。それから、いわゆる韓国の文化を理解したいというのが2番目に大きな理由です。非常に韓国と日本では共通項がたくさんあります。

また、歴史的にも、文化的にも数多くのことを日本と韓国では分かち合っているということ。そういった意味で、韓国の文化を勉強したいという理由がありません。

韓国政府が、韓国、日本のご両親に対して、YTEについて質問をしました。何が心配ですかということ。一番心配するのは勉強のスケジュールだと、スタディースケジュールを心配する。すなわち、例えば子供たちを韓国、あるいは日本にやるということになりますと、学校の授業に出られない。それがちょっと困るということですね。例えば韓国と日本、大学に入ろうと思いますと、非常に競争が激しいわけです。ですから、そういった意味で、12年以上一生懸命勉強しないといい大学に入れない。ですから、両親として

は、子供たちに例えば一日でも終日どっかに行って遊ばれては困ると。そういった意味で海外に子供たちを送ることに對して、一番懸念するのがこれです。

2つ目が、言語の壁です。それから、やはり経費、お金がかかるということを心配している。安全性とか環境に関しては、おもしろい結果が出ています。韓国の両親というのは、日本のご両親よりも環境のことを心配している。これは私の個人的な解釈ですが、恐らく、非常に急速に日本の社会がいわゆる西洋化してきていると。子供たちが突然西洋化して、西洋文化に触れて戻ってくるのを怖がるというところがあります。それから、安全性ということに関しましては一番気にするところです。そういった意味で、非常に興味深い調査結果が出たということです。

もう一つ、非常に興味深い最近のプログラムをご紹介します。これはYTEに関するものですが、YTE以上のものだと申し上げたいと思います。

2カ月前であります、韓国政府とアメリカ政府が合意をいたしまして、いわゆるMOUを確立しました。このプログラムの名前がウエストです。Work、English、Study、Travel、それで「ウエストプログラム」といい、来年からスタートいたします。5,000名の韓国の若い大学生を選びまして、アメリカに送ります。18カ月です。6カ月英語を勉強してもらい、そして6カ月インターンシップ、そして6カ月を旅行ということです。政府がそれをサポートするというものであります。このような「ウエストプログラム」というのを日本ともできないかと考えております。非常におもしろいことになるのではないかと思います。もちろん、家族の問題があります。また、4つの問題があると思います。

1つは、システム面での問題領域。すなわち、YTEに関して体系的な管理体制が整っていないということです。それから、プログラムの面で言いますと、年齢、グループ、あるいは性別によるプログラムの差別化ができていないということ。1つのプログラムしかなくワンサイズフィットオールということで、やるか、嫌だったらやめなさいというふうに1種類のプログラム

しかないということですね。特に、若い世代においては、余り魅力を感じられないだろう。それからまた、特別な管理体制がありません。例えば、管理するところにお金がないということですね。それから、彼らは余りお金を出したくない。YTEというのは収益を上げるプロジェクトと考えていません。すなわち、YTEはいろいろ経費を支出するプロジェクトだというふうに思っているのですが、これは非常に大きな問題であります。

インフラの分野に関しましても、例えばインターネットの情報が欠如しているという問題です。特に若い世代はバーチャルな環境に関してはエキスパートであると。しかし、YTEのマネジャーレベルの人たちがコンピューターを使えないということで、大きなギャップがあります。よりバーチャルな情報を提供しなければなりません。よりインターネットに関連したマテリアルを供給しなければ、彼らは興味を失ってしまうでしょう。

最後に提言です。まず、体系的な安全な管理システムをつくる必要があります。品質と量の両方を考えなければなりません。「WJST」はどうでしょう。Work、Japanese、Study、Travelということで、「WJST」というのを提言したいと思います。これは恐らく、若い世代の両国間の方々にとっても、非常に興味深いことができるのではないかと思います。

「タイと日本の青少年ツーリズム交流について」

タイ政府観光庁（TAT）政策・計画局 市場データベースグループ部長

スワット・ジュタコーン



昨年、2007年は日タイ修好120周年でした。両国関係、そして、青少年交流に話を進めたいと思います。青少年ツーリズムのどういうことが問題なのか、全ての問題解決には何をすべきか、また、ツーリズムを通じて問題を解決できるのか。

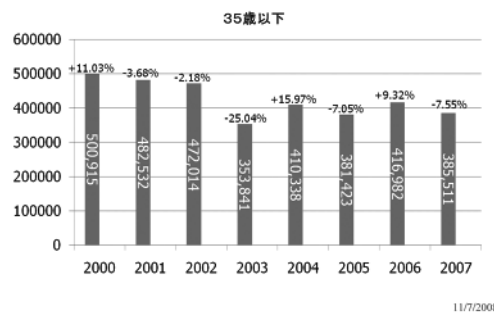
まず両国関係ですが、600年以上の歴史があり、スコタイ王朝時代からタイと沖縄の商人同士の間で交易がありました。その後、アユタヤ王朝を迎え、日本村ができました。当時の日本の傭兵長が山田長政でした。彼はタイのソントム国王から榮譽号を与え、オークヤー・セナーピムックと呼ばれる軍司令官の立場をもらいました。その後、ナコーンシータマラートプロビンスと呼ばれるタイ南部州の知事になり、現地で亡くなりました。また、ラマ5世(幼少時の名前:チュラーロンコーン)は、1868年に明治天皇と両国関係を結び、1887年に国交が始まったので、昨年は日タイ修好120周年でした。

さて、JICAを通じて両国間で様々な関係がありました。また、アユタヤの日本村には、江田五月参議院議員が昨年訪問しました。

両国間のツーリズムの状況について、国民の数、また経済の観点から分析してみました。2000年～2007年頃、様々な状況の変化や問題もありました。旅行者数の増減はありますが、両国関係が緊密であることに変わりありません。

既にプロモーションは若い世代向けのものを実施していて、タイ政府観光庁は、最初に東京、次に大阪、3番目に福岡と、日本に3つの拠点があり、若い学生たちを東京にということで、教育旅行を組織していました。今度は逆に、約500名の学生が日本からタイを訪問し、首相府を訪れたり、多くの重要な観光拠点を回ったりするプログラムを行っていました。

タイを訪れる日本人観光客



日本からタイへの35歳以下の観光客は、2000年に約11%増大し、その後下降に転じています。2004年に一度復活して15%伸びましたが、その後また落ちています。2006年に約9%増大し、昨年マイナスに再び転じ、今年も少しマイナスに転じています。日本人旅行者の74%が男性なので、プロモーションの方策を変えるべき理由になるかもしれません。もっと、ファミリーでタイを訪れてほしいと思います。35歳以下は30%を占めています。そしてリピート率は、2回以上が64%。自分たちでアレンジしたのが60%。約80%が休暇で、14%がビジネスです。また、かなり長く約1週間はタイに滞在します。観光支出は一人約130ドル/日です。

ツーリズムですが、文化ツーリズムと、それ以外にグループ分けすると、まず文化を中心にしたツーリズムですが、昨年は日タイ修好120周年を祝いました。それを記念し、上野動物園にサラタイというタイのパビリオンがつけられました。

タイの女性作家が書いた非常に有名な小説『クーカム(永遠の愛)』があります。邦題は『メナムの残照』で、第二次世界大戦中にタイ人女性と日本の軍人との間に恋が芽生えたというストーリーです。

第二次世界大戦前の1939年に「花屋」という日本

料理店が森園氏によりタイで開かれました。タイで最も古い日本料理のお店で、三代目の綿貫賀夫氏が今も経営しています。オーナーの娘だった森園康子さんと綿貫孝さんのご子息です。

また、重要なのは、日本でも120周年を祝い、その記憶を新たにしようという動きがありました。その記念に、アユタヤの日本村に日本庭園が造られました。その庭園の門は、金閣寺の門に似せています。西ノ屋形の石灯籠が建っていて、高い竹のフェンスで囲まれています。白い砂利が敷き詰められた石庭や、茶室もあり、茶室に入るための手水鉢も設けられています。また、この庭を守る守護神を表す13層から成る石塔があります。日本文化をこの庭園を通じて紹介しよう、そして、平和な世界の到来を願う気持ちを込めたものでした。シリントーン王女が8月に行われたこの庭園の開設式に御出で下さいました。

タイ政府観光庁は福岡にもオフィスがあり、タイの学生たちとアレンジして、福岡の学生がタイに行き交流も行われており、25名のタイの学生と4名の先生が福岡に来て、ホームステイをしました。逆に、2007年～2008年には、40名の福岡の学生がタイに行きました。大阪のオフィスでは、多くのセミナーやプレゼンテーションが行われました。

日本政府のサポートが非常に重要だと思います。つまり、日本へのビジットプログラムですが、2007年～2008年、トリップトゥータイランドという形で行われています。そして800名以上の学生が大阪オフィスのもとで組織されて参加しました。そして、2カ月間、船に滞在して毎日多様な活動により文化交流をする。そして、互いの生活様式を学び合う、様々な考え方を公開しようといったディスカッションもされます。船で東南アジアの各国を回っていきます。この若者たちは国の将来を担う人たちだと考えられていて、1974年から今日まで続けられている取り組みです。

また、JICAの中根敬一氏がタイ・プーケットに赴任されて、今もそこで仕事をされています。彼は剣道クラブをプーケットで設立され、そのクラブは国際剣道連盟に1991年に加盟しています。

さらに、日本政府の支援を受け、リンデンと呼ばれるバンコクの首都圏にも青年のためのスポーツセンターができました。スポーツ、アート、カルチャー、トレーニングセンター、さらにまた、ユースセンターのオフィスもそこに設立されました。柔道、空手など、多くの日本のスポーツがタイではとても人気があり、よく知られています。私が高校にいたときは、空手を勉強しました。逆に、タイボクシングは多くの日本人によく知られていると思います。また、刀剣を使つてのファイティング。タイ古来からのものですが、そのトレーニングセンターがアユタヤの寺院の一つにあります。過去アユタヤ王朝で、王に仕える騎士たちの訓練が行われたところでした。このように、既にそういった交流はされているということが言えます。

日本のゴルフをなさる方たち、タイをお好きだと思います。料金が安く、予約も簡単です。タイ全国で100以上のゴルフコース、バンコク付近だけでも約30コースあります。ゴルフコースは非常に設備が整い、日本語を話せる優れたキャディーもいます。

2010年のチャレンジということで、日本旅行業協会では「ようこそ！ジャパン」という2010年に1,000万人のインバウンドを目指すことを考えています。ターゲット市場が北米、ヨーロッパ、オセアニア、アジアです。また「ビジットワールドキャンペーン」では、2010年に2,000万のアウトバウンドを目指しています。将来のトレンドを考えてみると、20代、30代がターゲットとなっています。目的地にぜひタイを選んで頂きたい。ASEANのなかで、タイだけ9カ国中に選ばれています。関西、中部、それらの地域の再活性化という戦略にもつながります。また、メディア戦略ですが、20代、30代の若い人たちのために研究開発、ジョイントプロモーションが必要でしょう。そして欧州、米国本土でそうした戦略的な形で、ダイレクトマーケティングを展開したいと考えています。

さて、PATAでもアウトバウンドに注目しています。今、日本人は財布のひもを強く引き締めて支出に敏感になり、昔ほどお金を使いたがらなくなっている。アメリカ発端の経済危機が全世界に波及している影響で

しょう。今は景気後退の局面に入って、さらに金融、政府に多くのスキャンダル等もある状況です。従って、国内旅行の方が魅力的と言えるかもしれません。経済開発では、アジアは非常に緊密な協力関係があります。国内旅行ですが、もちろん海外旅行と比べて魅力がありますが、タイ人の場合には、国内旅行を個人とするより海外へのパッケージ旅行の方が安いので、海外の方が国内よりまだ魅力的です。

さて、若い旅行者に何が一番いいのか。交流ですが、質の高いビジターが将来増加するようにしなくてはなりません。2000年には若者の数が増えましたが、その後、下降に転じたのは、教育旅行をやめた時代があったからだと思います。ただ、今年、10年経って、また若いエグゼクティブ、指導や経営等に携わる人たちがお金を持ち、旅行するようになり、若いときに訪れた地にもう一度行こうという時代に入ったと言えるでしょう。

さらにPATAでは、各国観光庁の様々なコーディネーションを期待しています。ホテル、航空会社、特に東南アジア関係では、ジョイントプロモーションのために、互いに力を結集しようということだと思えます。

若者達のツーリズムですが、コーディネーションをより緊密にして、官民が協力することが重要だと思います。本日のセミナー講演者の方々のお話のように、両親のフルサポートを得られることも重要だと思います。さらにまた、TTIによる2010年予測で、長距離旅行の送客市場ランキングで米国が第1位、日本は2位ですが、今後の情勢を見る必要があります。山川さんのお話のように、格安航空会社の台頭で、この予測は変わってくる可能性もあると思います。

さて、マスターカードの予測によると、アジアの目的地は二桁成長するとされています。景気後退の局面があってもですが、アジアはそれほど大きな影響を受けないであろうと。金融、経済危機が米国発で世界に広がっても、何とか耐えていけるということです。今年12月までに、アウトバウンドは8,830万人に達すると予測されています。

マスターカードのランキングによると、2008年下期の日本発アウトバウンドは920万人です。タイ発は210万人（約10%増）。日本はもともと数値が大きいので、比率としての上昇値は小さく2.8%増です。我がタイ国政府観光庁は関西のマーケティングスチューデントと様々な協力活動をしています。2,754名の学生がファミリーアライゼーショントリップに参加してタイに行きました。

来たる2009年2月に、またそうしたプロジェクトを企画しています。関西大学で選ばれるミスキャンパスの勝者の方々が招待されて、タイを訪問します。そして来年7月、関西外語大で約200名の学生がビジットタイランドというプログラムを組んでいます。また、大阪教育委員会も、さらに教育的なプログラムをということで、15名の高校生、先生方がビジットタイランドのプログラムでタイを訪れる予定です。また、ミーティングやディスカッションをしたり、ボランティアによる様々な交流プログラムが日程は未定ですが組まれています。また、文化交流ですが、例えば、ナコーラーチャシマ（タイ北東地域の一つの県）でタイの生活様式、世界遺産、ホームステイ、タイらしさを実感、体感する、経験すること。また、特別なミッションとして、大阪オフィスが特に力を入れているのが、ゴルフキャンプです。若者達がタイでゴルフトレーニングを受ける。エコツーリズムもありますので、日本の若者達にぜひ参加してほしいと思います。様々な考え方の交換、あるいは活動を互いに分かち合うことで、タイの若者達と接点を持つことができます。また、ほとんどのタイの大学には国際部があり、英語を教えている、英語を話すコースがあります。チョンブリ、パタヤなどで行われています。

さて今後、将来の交流をさらに深めるため一体何をすべきか、私自身、観光に関する人材づくりのネットワークであるAPETITの設立に関わった人間なので、この交流プログラムをさらに振興させ、文化・教育・スポーツの交流をもっともっと高めたいと考えています。そしてまた、コーディネーションをもっと強力にしたいと思います。

さて、いかにそれを実行するか、タイには約 100 の大学があります。日本とタイの大学、もちろん高校も含めていいと思いますが、互いに覚書を交わして姉妹提携すれば、交流はそれに基づいてより速やかに行われるでしょう。さらに民間、公的機関、政府もバックアップしてくれると思います。また、言語学習はとても重要で、ファミリーステイも重要です。AFS（アメリカフィールドサービス）がありますが、アメリカ政府が我々のほうに学生を送って、1 学期、あるいは 1 年間、滞在させるということをしています。それを日本とタイ間で AFS のようなものとしたらどうか。まずファミリーから、そして大学教授から最初にしてはどうでしょうか。非常にやりやすいと思います。

ただ、一つ問題があるとすれば、チョン先生がおっしゃられた言語の問題だと思います。インターナショナルということで行うのであれば、第一歩はまず英語で実施し、その後に日本語、そしてタイ語を入れる形式にしてはどうでしょうか。そして、両国間のツーリズムですが、もうかなり昔から歴史があるので、若い世代のツーリズムに関わる人たち、スタッフの交流をしたらどうでしょう。観光学の学生をジョブトレーニングという形でバンコクの JTB に送って下されば、そしてまた、全世界に展開している日航ホテルのオンザジョブのトレーニングで、タイの日航ホテルに派遣できると思います。昔タイにあった日航ホテルは、その後オーナーが代わりましたが、日航ホテルのチェーンの中でコーディネーションはできると思います。

若い経営者、リーダーの人たちを両国の間で交流させたいと思います。若い経営者協会のミーティングがあり、タイと日本の若いビジネスリーダー達ですが、話し合っただけでアイデア交換をするのは重要です。ビジネスを一緒に始めるかもしれません。そうすれば経済の緊密なつながりがさらに進化すると思います。

こうしたことは非常に重要で、協力によって、あらゆる部門でとれます。特にフルサポート、若者達への家族のサポートです。場合によっては、テレビ番組の活用もあるでしょう。日本の「テレビチャンピオン」

のシリーズが、タイではとても人気が出ました。また、タイの「クンプラチュア」というシリーズ番組があります。英語で「オー・マイ・ゴッド」という意味で、昔のタイ文化を今日に伝える役割を担いました。歴史についても語り、その伝統についても人々に啓蒙するものでした。このような交流がテレビのシリーズでできたらと思います。若者達の交流がより速やかにでき、タイ人と日本人の間により深い理解が生まれると考えます。

今年は両国の修好 121 周年、皆様方に心からお礼申し上げます。130 周年を祝うときには、両国間でさらに若い世代同士の交流が高まっていますよう心から願っています。

ありがとうございました。

「オーストラリアと日本の青少年ツーリズム交流の取り組みと課題について」



立命館アジア太平洋大学副学長 マルコム・クーパー

ツーリズムの特性というのは、政府等の活動というよりは、観光者から言っても、消費的な、商業的な活動であるわけです。つまり、需要側から出てくる活動であるということが言えます。オーストラリア、ニュージーランドの例ですと、どれだけアクセスできるかということによって人数が限られる。それから、時間も限定要因として出てくるわけです。それと同時に、訪問をするというところがこれらの要因によって限定されるわけでありまして。オーストラリア、ニュージーランドでは、いわゆる魅力性ということ、そして青少年にとっての仕事を通しての魅力ということも言えるのですが、それについて話したいと思います。

ツーリズムは非常に大きなビジネスであって、目的地にとってはそれが経済的なベネフィットにもなり、社会的な貢献要因となるわけでありまして。収入源でもあるわけですが、強調したい点は、いわゆる旅費にかかるコストで、ほんのわずかがアトラクションに使われていることです。どこに行くかということでアトラクションが決まってしまうわけですが、その残りの経費というのは、交通費であるとか、宿泊費ということになります。ですから、青少年のツーリズムをニュージーランド、オーストラリアに限って言えば、バックパック旅行が非常に大きなビジネスになります。そうすることによって、経費をある程度削減することができるわけです。

オーストラリアでは青少年ツーリズムを理解するためには、バックパッカーともともとと同じだという点を十分理解しておかなければいけない。青少年というのは、こういった旅行が非常に形態としては多い。なぜならば、彼らの使える時間が原因であります。青少年は学校に4年間行って、そして直接仕事につくわけがあります。その間に少し休暇をとって何かしたいと。例えば、卒業後、3カ月、6カ月休暇をとりたいと考

えるわけです。ですから、パッケージで出かける人たちよりも時間があるということと金額としては6,000ドルぐらいになると考えます。もちろん、個人差があります。そして、楽しい経験をしたと思うわけで、私が指摘しておきたいのは、そのほかの経済活動と比べれば、旅行というのは、公的部分のリソースを活用することができるわけでありまして。特に、そこを理解しなければいけないと考えます。

そのほかの経済活動と比較をしてみたいと思います。特に青少年の観光といえば、公的な資産、例えば農業についても、オーストラリアでは、いわゆる農業部門、例えばアスパラガス、パイナップルを収穫する時期というのは労働力が必要です。ブドウもそうです。なかなか人が集まらない。特に、オーストラリアは都市部に住む人たちは、農業知識はなく収穫しようとも思わないのです。ですから、ツーリストである若い人たちは労働力になります。観光だけではなくて、そういうことに人材を活用できるという可能性もあるのです。

確かに、ツーリズムというのはエンターテインメントであります。特に若い人たちにはそうだと思います。アートギャラリー、それから美術館というのは、このことを理解しなければならない。つまり、自分たちはエンターテインメントビジネスをしているのだということを理解しなければいけないと思います。なぜならば、何か学習を深くしたいと思って美術館に行くような人たちは少ないのです。むしろ大部分は自分たちが楽しみたいと考えています。ツーリズムというのは基本的に、需要をベースとした活動であるということ。そして、バックパックの人たちは全くそのとおりでありますし、そのほかの形態の旅行者でもそうです。また、日本人でも、特に青少年は最近そうってきています。パッケージツアーというのは、確かに重要な位

置を占めておりますけれども、パッケージ化しますと、例えばシドニーのような都市でのアトラクション、そしてその結果、経費は安くなるが、国全体を見れるということではないわけです。ですから、ほかと一緒に、日本の青少年といたしますと、オーストラリアに行くというとパッケージツアーでコストが削減できる。そして経費を抑えようとするわけであります。

ここで、この問題についてもう少し深く考えていきたいと思えます。日本人の青少年ツーリズムですけれども、最初は教育的な目的での旅行でした。これに関連してAPUについて話をしたいと考えます。APUには、ほとんどが日本、中国、そして韓国の学生でありますけれども、87カ国の学生がいるわけであります。そして、6,000名の青少年ツーリズムが集まっているわけであります。そして多文化性とか、国際性というアジアの青少年の経験について、APUキャンパスに来ていただければ、典型的にそういう経験ができるわけであります。また青少年のツーリズムが変化しているということを理解しなければなりません。例えば沖縄へ多くの地域の学校の人が行きますが、私どもの大学院生、学生は、こういったプログラムに8月、チューターとして参加して、仕事をしているわけです。

私のメインのトピックに戻りますが、少し前のことですけれども、オーストラリアの政府が労働力を見つけるためには、ツーリストがターゲットだと認識したわけであります。つまり、収穫を助けるような、そういった農業部門での人出です。そして、特に若い世代、例えばアカウンティングのトレーニング、そして職業トレーニングをするような人たち、シドニー、メルボルンなどに来ているわけであります。そして、ジョブサーチというウェブサイトがありますが、そこに政府が出したんです。若い人たちがオーストラリアの全土を旅行することができる。そして、ハーベストトレイル、収穫の地域をつないだ道をつくったわけであります。そこで多くのいろいろな国の人が集まってきて、青少年の旅行者を理解することができるようになったのです。多文化性であるとか、そして言語も練習する

ことができる。また、それに参加することによって、オーストラリア、ニュージーランドの地方を見ることができ。そして、そこを国際化することができるわけです。もちろん農業部門というのはかなり保守的であると思えます。しかしながら、こういうプログラムを政府が展開することによって、より若い人たちが出てきた。ということで、ワーキングホリデーであるとか、オーストラリアのプログラムというのは、みんなが参加できるのです。5年前まではいろいろな規制がありまして、自由に参加することができなかつたのですが、それが変わってきました。そして、ニュージーランド、オーストラリア政府がこれに認識を高めて、青少年のツーリズムを促進したのです。その結果、このプログラムは非常に成功していると思えます。

例えば、長距離やってくるヨーロッパの人たちは、こういったプログラムを活用して、自分たちの経費を削減しようと。オーストラリアで働いて、そのほかのアジア地域にも旅行を延ばしたいと考えるわけであります。韓国、日本人の学生たちも来ます。これをやっているわけです。単に家族についてくる、あるいはパッケージツアーに来るというのではなくて、こういうプログラム、独自で自立をしてやっている。そして、それを好んでやっているようです。

それから、そのほか日本人の学生というのは、どちらかという、過去は教育目的でメルボルン、シドニー、アデレードにやってくる人たちがいました。それからケアンズでは経済的な要因というのが非常に大きかったわけであります。日本の旅行者の経済貢献というのが非常に高かった。ゴルフコースもそうであります。教育目的でやってくる。けれども、学生たちはホテルで仕事をしたり、またレストランで仕事をして、観光の知識をつけるのです。そして、オンザジョブトレーニングをするわけであります。つまり、これは日本の観光のサポートツーリズムとなっているのです。サービスの文化と、ケアンズであれば、日本の観光客が労働力となって貢献しているわけであります。ただ、主流といえ、先ほど申し上げた収穫に参加することなのです。

オーストラリアの学生について、少し見ていきたいと思ひます。困ったことに、オーストラリアの学生というのは旅行に行かないのです。自分たちが学位を取る間は旅行しない。しかしながら、学校主催の旅行に参加する人たちは最近出てきたのですが、ほとんどは自分たちが卒業するまでは旅行に出ないのです。最近、オーストラリア政府が、これはよくないと判断して、より教育目的のツーリズムを促進したいと考えたわけです。そこでオーストラリア政府が、少なくとも1年間支援をして、そして海外で大学に学ぶことができるようにしました。APUがそうですけれども、オーストラリア人の学生を外に出すと。これは長年、私どもがやってきたことですが、それをオーストラリア政府がやろうとしてきています。

APUでは、オーストラリアから学生が確かにやってきます。学生たちは旅行をよくしますので、我々がやっていることはまだ間違いではないと考えています。ただ、日本の大学に入るオーストラリア人をふやすためには、例えば、単位を提供するという必要も必要でしょうし、それから、政府間での協力が必要でしょう。そして、オーストラリア政府が支援をしているような形でもって、この両方側からの支援が必要です。もちろん、若いオーストラリア人で日本にやってくる人たちはいます。ほとんどは例えば標識であるとか、価格であるとか、旅行しやすいかどうかということに心配するようではありますが、「ようこそ！ジャパン」というプログラムが展開されてからは、こういう問題は少なくなってきました。

そして、受け入れ側の姿勢も重要だと思ひます。「ようこそ！ジャパン」のプログラムによって変わってきてはおりますが、オーストラリア人の学生は、どちらかというところ、年齢は高い。つまり、自分たちは卒業して、あるいは学位を取ってからやってくるわけで、それらの姿勢を変えるということはなかなか難しい。より早く、若い時代からもっと日本に来るように仕向けていかなければならないと考えています。

それから、学生交流のそのほかの形態としては、ジェットプログラムというのがあります。日本と英語

の教育にかかわるプログラムでありまして、オーストラリアの若い世代には人気があります。また、日本のNGO、NPOでの仕事をするということですが、これは青少年の経験にとっては非常にすばらしいと思ひます。これはそのほかの地域にも、国にも拡大していきたくて考えております。オーストラリア、ニュージーランドの学生にとっては、とても有効だと思ひます。もし日本語がしゃべれれば、とてもすばらしい経験ができると思ひます。

日本は非常にすばらしい文化的な、また物理的なリソースがあり、オーストラリア人たちはそれを経験したいと思っており、そこは問題ではないわけですが、ただ、実際の問題というのは、やっぱり学位を取ってから来るという、そのずれなのです。ですから、大学のキャリアなどに関して、それから社会的なネットワークがそこでうまく対応できればいいなと思ひます。

それから、逆に受け入れ側、日本人の青少年を動かすのは、かなりやさしかったわけでありまして。最初は普通の旅行でやってきて、その後は自分たちの自立した旅行をしようということで、バックパッカーとして戻ってくるわけでありまして。オーストラリアで簡単に旅行している。日本人の学生というのは、非常に自立した形での旅行がふえていると言えらると思ひます。

「日本(関西)の青少年が求めるアジア・太平洋各国理解のためのツーリズム交流の形態」



阪南大学教授 前田 弘

私は、サステイナブル・ツーリズム(持続可能な観光)を研究しています。社会や環境の持続可能性をいかに達成するかは、今世紀の我々と次世代の人類に関わる大変重要な課題です。その意味でも、サステイナブル・ツーリズムは非常に重要ですが、その実践に関する考え方や方法はまだまだ研究の余地のある大変難しいテーマです。

さて、まず青少年ツーリズムとは何かを考えておきたいと思います。青少年は成長過程上の世代ですから、当然成長して大人になり、次世代の担い手となる、まさにサステイナブルな存在なわけです。すると、青少年ツーリズムとはツーリズムの持続性に関わることになりますから、まさにサステイナブル・ツーリズムだと言えるのではないのでしょうか。したがって、青少年ツーリズムは、今日の世界のツーリズムをめぐる大きな課題につながってくると思います。

ところが、青少年ツーリズムは、実態の非常に分かりにくいツーリズムです。私の所属する阪南大学の国際観光学科は、1997年に設立された関西初の4年制観光系学科です。1学年に約130人、全学年で約500人の学生がツーリズムを学んでいます。毎日学生と接していますが、彼らのツーリズムがどのようなものかは非常に分かりづらい。ただ、2つの傾向が言えると思います。

一つは、ツーリズムを学ぶ学生も、実際にやっているツーリズムは一般と変わらず、ほとんどがマスツーリズムだということです。彼らにとって現実には、安く予約が簡単なツアーをいかに探すかが最大の課題ではないのでしょうか。テクニックも必要ですが、こういったツアーを探すのはマスツーリズムのトレンドそのままであり、そういう一つの実態として、青少年ツーリズムがあるのではないかと思います。

もう一つは、大学教育の制度に基づく青少年ツー

リズムです。これは午前中の講演でもありましたように、留学制度や海外インターンシップです。今日、大学や場合によっては高校でも、そういう形が制度として非常に普及している、というのが青少年ツーリズムのもう一つの傾向です。

私たちの大学でも英語、中国語、韓国語圏を含め多数の大学と提携して留学を行っています。また、オーストラリア、イギリスなど英語圏では、インターンシップも行っています。日本の大学の現状では、留学の大半は英語圏での語学留学ではないでしょうか。中国語、韓国語圏が後に続いていると思いますが、国際相互理解や、国際交流の観点に立つと、語学留学は一部の狭い範囲の目的です。学生は入学当時から語学留学への意欲を持って、多くが1年か半年単位の留学をして満足していますが、それが青少年ツーリズムの全てとは言えないと思います。日本は、言葉の壁が非常に大きいので、留学のインセンティブとして語学習得がまず挙げられるのは仕方がないですが、ツーリズムを教える立場としても、大学における青少年ツーリズムは、語学主体の留学に偏りすぎている気がします。かつて私たちは、語学を学びたいというよりも、とにかくお金をかけず様々な国を旅したいという気持ちや行動の方が先にあったように思います。しかし、私が現実に学生と接する限りにおいては、なかなかそういう学生を見つけにくくなっています。ただ、彼らは語学留学だけ求めているのではないと思います。国際交流のチャンネルが、語学留学に限られている大学の制度的な問題があるのです。

青少年ツーリズムとして語学も海外インターンシップも必要ですが、それだけにとどまらず、現代の大学生もツーリズムに心から求めているものがあるはずで、そこで、そのような思いも込めて、青少年ツーリズムについて、私なりに定義しますと、それは、人

生の成長期において青少年に教育効果を与えるツーリズムだということです。大変幅広いのですが、その中でも特に、異文化理解や異文化交流という効果を特に求められるツーリズムが青少年ツーリズムだと思います。そして、語学留学にとどまらず、そのような効果をもつ幅広い青少年ツーリズムの形を普及させていくことが課題となるでしょう。

現代の主流のツーリズムであるマスツーリズムとは、サイトシーイングとアクティビティーで構成されたツーリズムといえますが、今の大学生を中心とする青少年が求めているのは、見るだけ、するだけではなく、それらを超えたものを求めているのではないかと考えています。それは、サイトシーイングとアクティビティーとはまた違う、「経験の価値」と呼べるものです。それは、見たこと、やったことが一続きの経験としてツーリストの記憶に残ること。これが今求められているツーリズムとして非常に重要ではないかと思っています。最近の経済学の分野でも「経験の価値」が重視されていますが、現代のツーリズムには、特に次代を担う青少年のツーリズムには、まさに同じことが言えると思います。

2005年にイギリスで私は「ツーリズムによる地域再生」をテーマに1年間調査したのですが、あるB&Bに泊まったとき、一人旅のイギリス人青年に出会いました。彼は、6～7歳の頃に家族と一緒にB&Bに来たという思い出、記憶をたどって、一人旅に出て、ここに泊まりに来たと話してくれました。つまり、その青年にとってツーリズムは、流行を追うよりも、家族と観光したという記憶のほうに重い価値を置いた、記憶をたどる旅だったのです。こういうところに、サイトシーイングとアクティビティーを超えた青少年ツーリズムの一つのポイントがあるのではと思います。

では、こういう「経験の価値」のあるツーリズムとは、どうやればできるのかを考えてみると、それには記憶に残る経験の場を作ることが必要です。その「場」とは、デスティネーションのコミュニティではないでしょうか。ツーリストがコミュニティの人たちといかに

交流するかに、青少年ツーリズムの意味があるように思えます。そして、その場合の青少年ツーリズムとは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムだといえます。

コミュニティ・ベースド・ツーリズムとは、デスティネーションのコミュニティを場所として、コミュニティとツーリストの相互交流の行われるツーリズムです。その相互交流として、異文化理解、異文化交流が行われる舞台がコミュニティです。そういう舞台をつくっていくことが、青少年ツーリズム交流に非常に必要になってくるでしょう。コミュニティ・ベースド・ツーリズム、日本ではコミュニティ・ツーリズムと言われることが多いのですが、これはサステイナブル・ツーリズムの一つの形態です。サステイナブル・ツーリズムをデスティネーション、つまりホストの側から見ると、コミュニティ・ベースド・ツーリズムと言いかえられます。UNWTOの定義に、サステイナブル・ツーリズムは、コミュニティの社会的・文化的持続性、あるいはコミュニティの経済的持続性を図ることとあります。このように、サステイナブル・ツーリズムにおいて、コミュニティは非常に重要な要素になっています。そういう意味で、私は青少年ツーリズムのあるべき姿をサステイナブル・ツーリズムに求めています。

そこで、私が大学でサステイナブル・ツーリズムの教育の一環として取り組んでいるエコツーリズム実習の例をご紹介します。私は、大学でエコツーリズムの講義をしていますが、講義だけではその意味や問題点をなかなか実感させることはできません。そこで、2004年から毎年夏に、学生を連れてマレーシアのボルネオ島で7日間のエコツアーを実施しています。2002年に「国際エコツーリズム年」が制定され、その第1回記念大会がボルネオ島で開かれました。この頃をきっかけに、マレーシアはエコツーリズム立国、すなわちエコツーリズムによる国づくりを国家方針として打ち出し、エコツーリズムへの取り組みが増えました。私も、そのようなマレーシアのエコツーリズムの動きに同調して、日本のエコツアー専門会社との共同企画で、実習としてエコツアーを始めたわけで

す。

ボルネオ島の上半分にマレーシアのサバ州があり、その熱帯雨林の中央をキナバタンガン川が流れています。川の周辺は野生動植物の宝庫で、そこにはまた32の先住民族が暮らしています。自然と伝統的文化がキナバタンガン川周辺に展開していて、そこで私たちは、毎年エコツアーの実習をしています。ツアーの特色は、キナバタンガン川の流域に住む先住民族（マレー語でオランスガイ）の家でのホームステイです。

エコツーリズムには様々な形態がありますが、次の二つの分け方があります。一つは、ネイチャーベース（自然重視型）のエコツーリズム、もう一方は、コミュニティーベース（文化重視型）のエコツーリズム。エコツーリズムでネイチャーベースなのは当たり前だと思われるかもしれませんが、エコツーリズムは自然一辺倒ではなく、観光客の自然との接し方の違いにより、そういう分け方ができるのです。ネイチャーベースは、例えばガラパゴス諸島のように、ほとんど人の文化のないところで、観光客が自然と直に接触する。もう一方のコミュニティーベースのエコツーリズムは、地元コミュニティーを通じて自然と接触するということです。

特にボルネオ島のエコツーリズムの特色は、ホームステイによるコミュニティーベースが奨励されているので、まず先住民と一緒に生活をして、寝食を共にし、彼らと一緒に行動しながら自然を体験していきます。先に、「経験の価値」の重要性を述べましたが、この場合、その価値はホームステイという形式にあります。つまり、たとえば、単にリバー・クルージングで熱帯ジャングルの自然を見物するサイトシーイング、あるいは村中で何かを飲食するようなアクティビティーではなく、住民と一緒に生活する中で、日常のひとコマのようにサイトシーイングやアクティビティーをやっていきます。これは、ホームステイという交流の仕掛けをベースにすることで、サイトシーイングやアクティビティーといったツーリズムを経験の価値のある、心に残るツーリズムに変えているのです。

自然豊かなボルネオ島は、実は森林伐採が進み、そ

の後にパームオイルのプランテーションが盛んに行われ、原始的な自然が非常に少なくなっているのが現状です。それをくい止めるためにも、政府はエコツーリズムを推進しているわけです。私たちは、樹木伐採で森を追い出されたオランウータンの保護施設を毎回見学したうえで、ホームステイ先の村を訪れます。そうすると、村の住民たちは、エコツーリズムという言葉でなく、コミュニティー・ツーリズムという言葉でわれわれを迎えてくれます。私たちはツアーの初日から、ジャングルの自然を守るためにツーリズムによって自らの暮らしを変えていこうとする住民の強い熱意を感じるようになります。

学生が、こういうネイチャーベースのサイトで自然の豊かさに感動するのは当たり前ですが、実は彼らが一番感動した、あるいは好きになったポイントは、まさに経験の価値の部分、つまり「コミュニティーの人たちとどう関わられたか」ということです。ホストファミリーや住民との関係をベースに自然を見たり、楽しんだりする。コミュニティーをベースにして、学生たちはエコツアーを楽しみ、感動していることが非常によく分かります。中には、次年度の実習に同じ料金をまた払ってでも参加する学生が2-3人必ずいますが、彼らはそのエコツアーに経験の価値を認めているからこそ、再度参加するのではないのでしょうか。単なるサイトシーイングとアクティビティーだけで満足なら、おそらく1回で十分です。それが2回、ある場合には3回と続くかもしれないという持続性を保証しているのは、そういう「経験の価値」を生み出すコミュニティー・ベースド・ツーリズムの仕組みなのです。

私は、そういう体験から、青少年ツーリズム交流は、実はコミュニティーベースでやるべきではないかと考えています。実際、ツーリズムの世界ではすでに様々な形でそういう試みがなされていると思いますが、私が大学教育の現場で見る限り、そういったコミュニティー・ベースド・ツーリズムを青少年が体験することは、現実にはあまり取り組まれていません。これはツーリズムの価格とか、ビジネスも含めた様々なシステムの問題があるのでしょうか。それをクリアするのは

まだ大変難しいですが、青少年ツーリズムがサステイナブル・ツーリズムとなるためには、そういうバリアを越えていかざるを得ません。なかなか具体的な提案はできませんが、一つは、それにはツーリズム産業だけが取り組むのではなく、産業の側、民間部門、コミュニティ、そして行政・政府、そういった多様なセクターが互いに協力して青少年ツーリズムを生み出していく仕組みがぜひ必要です。それも、ツーリズムなのでから国際的な仕組みです。ぜひともそれに取り組むことです。

今や、日本やどこの国の学生でも比較的楽にマスツーリズムの商品は購入できますが、例えば、パソコンのワンクリックでそのような青少年ツーリズムも購入できるシステムはまだつくられていない。少なくとも日本の学生を見ていると、「経験の価値」を求めるコミュニティ重視のツーリズム交流へのニーズはあると思いますので、直ちにシステムの構築に乗り出さなはいといけない。ということ、日本からと言うと大げさですが、青少年たちの学ぶ大学の現場から問題提起させていただきます。ありがとうございました。

「訪日教育旅行における学校交流の現状」

財団法人大阪観光コンベンション協会 学校交流コーディネーター(特命顧問)

湯浅 勝史



大阪観光コンベンション協会は、大阪府、大阪市及び民間が出資、人材派遣をし設置されました。大阪に海外あるいは国内から人を呼び、大阪の活性化することを目的とした財団法人です。大阪城や大阪市内にある5カ所のインフォメーションも大阪観光コンベンション協会が運営しております。無料の観光地図等も大阪観光コンベンション協会で作成しております。天神祭も共催しています。いろいろなところで観光の下支えをしながら、観光客やコンベンションを大阪に呼び入れている財団法人です。

きょうは、訪日教育旅行と学校交流、学校交流の意義と評価、学校交流の実際、学校交流の課題と対応、の順でお話をさせていただきます。

まず、訪日教育旅行と学校交流ですが、近年、大阪だけではなく他の府県も、訪日教育旅行者の受け入れが増加しています。当然、経済的な効果は高いのですが、それ以外に、海外修学旅行は大阪から海外に行く場合と同様、学校交流によって海外修学旅行の教育的価値を高めることも重要となっています。増加している教育旅行者のニーズに応えながら、これからは受け入れ校にとっても学校交流をいかに意義あるものにするかが問われています。

訪日教育旅行者が増えているのは、海外での富裕層の増加、教育旅行に限ってビザなし渡航が韓国、中国、台湾で可能になったからです。他に、日本文化への憧憬ということも挙げられます。例えば漫画に代表されるようなもの、あるいはファッション、また進んだ日本の教育に接してみたいという気持ちもあるでしょう。更につけ加えますと、安全である、清潔である、そういう日本に来たいという若者のニーズも強いと思います。

訪日教育旅行と日本の修学旅行の違いですが、日本の場合、修学旅行は一個学年がほぼ全員参加します。

一方、訪日教育旅行の場合は、人数が限られ希望者だけが来るというところに特色があると思います。少人数の希望者ですから、小回りがききます。小回りがきくということは立案が遅くても間にありますから、学校交流の申し込みが遅く、1カ月から2カ月前に斡旋をしてくれませんかというような申し出がほとんどです。

大阪府内の受け入れですが、教員の視察も含めまして、昨年度約1万1,000人が来られました。受け入れ校が延べ257校、これだけの学校が海外から来られます教員・生徒に対して門戸を開いているわけです。この数を大阪府として誇っていいと思います。1年間ほぼ毎日のように、どこかの学校で交流や視察が行われている計算になります。その受け入れの窓口になっていますのが、大阪観光コンベンション協会です。海外からの交流の申し込みがありますと、どういう目的で、何人ぐらい、いつ来られるのかを確かめ、それに見合う学校をマッチングします。マッチングだけではなく、その後、学校に行き細かな打ち合わせをします。当日の立会いにも行きます。バスが遅れてくることがあります。スケジュールが狂いますから学校はあわてます。その対応をするようなことも必要です。そういうことをやりつつ、学校に交流の受け入れをしてもらっています。

できるだけ教育的価値がある、質の高い交流をしたいと思いますが、数も多く思うようにはなかなかいきません。大阪府内で学校交流をしたいという申し入れが、2004年度は1,000人台、2005年度には3,788人、海外の学校あるいは旅行社からありました。その際、これまでは教育委員会に話があったり、大阪府の観光振興課、あるいは大阪市などの機関に申し込みをされていたのですが、それぞれの場所で対応するということは非常にやりにくいだろうということで、大阪観光

コンベンション協会に大阪府内の交流窓口を一本化しました。これが2005年度です。窓口は一本化できたのですが、学校のほうではいろいろな事情があり、なかなか交流を受けていただけない。特に週5日制で土曜日が休みになり、1週間のうち5日しか授業日がない。せっかく大阪で交流をしたいという申し込みがありましても、いろいろな行事が月曜日から金曜日までに入っている中に、新たに1カ月、2カ月先の交流まで受けていただけない。2005年度までは学校の事情がわからないまま交流の依頼をして断わられていたようです。

教員を定年退職した私がコーディネーターの仕事を引き受けたのは2006年です。私は、学校にはいろいろな事情、課題がありますが、とにかく大阪に学校交流の申し込みがあれば引き受けてもらい、そのうえでできるだけ生徒中心の交流をしてもらうことによつて、受け入れ校にとっても意味のある交流ができるのではないかと考えました。2006年度は8,041名、そして昨年度は1万1,072名と2年間で約3倍の交流人数となりました。量的拡大という面では、かなり成果があったと思っております。また2006年度から交流数が急増したもう一つの理由に、大阪府・大阪市・堺市・府や市の教育委員会・観光協会等で「大阪修学旅行等誘致促進協議会」を立ち上げ、協力して訪日旅行の受け入れを図ったことがあげられます。特に大阪府教育委員会の全面的な協力が大きかったと思えます。

訪問者は韓国、中国、台湾の3カ国で94%です。その他はほとんどありません。韓国が約6割、中国が4分の1です。校種別では高等学校が143校、55%で、中学校、小学校と続きます。海外では小学校の生徒が教育旅行で海外に出ているのです。それだけ豊かな家庭が増えてきたのでしょう。その他が48校です。これは専門学校、または幼稚園、保育所、あるいは教育施設に来てもらっています。

次に、交流の意義と受け入れ校の評価についてお話しをさせていただきます。

私は学校交流について次のように考えています。ありがたいことに無料で向こうからやって来てくれて、

国際交流をしましょうと言ってくれているのです。利用しない手はないと思います。受け手の方は、いろいろな思いもあるでしょうが、交流の意義は高いです。先ほど言いましたように、昨年度は約1万人の大阪の生徒が海外の生徒と交流したのですが、その生徒たちが周りの友達に交流の内容を話す、あるいは家庭に帰って話をすると、その影響は横にかなり広がったと思います。それだけではなく、若者の交流ですから、交流したこの体験が、将来必ず彼の中に、あるいは彼女の中に受け継がれていきますね。訪問した海外の生徒たちも、大阪に来ていい交流ができると、当然のことながら、彼らはそれらの国でやがてリーダーシップをとる人物でしょうから、また再び大阪に、あるいは日本にやって来てくれる可能性が高い。学校交流は国際理解の横への広がりだけではなくて、将来に向かってのたてへの広がりにつながると思います。そういう意味で、交流の教育的な価値は高いと私は思っています。

交流の意義の2つ目は、コミュニケーション能力を育てるという点です。相手が日本語をしゃべりしたら、共通話題を見つけて日本語で互いに理解してもらえよう話す努力をします。日本語が分からなければ、たどたどしい英語で話をするにしても、あるいは中国でしたら筆談をするにしても、そのことを通じて、自分の考えを相手にどう伝えるか、自分たちの頭の中で考え、いろいろ試行錯誤をしてコミュニケーションをとる、このような能力が国際交流を通じて育っていくのではないかと思います。このため、学校交流からは受け入れ校から非常に高い評価をいただいております。「大変良かった」「まあまあ良かった」、合わせて97%です。普通の評価は3%です。「今後も交流をしたいですか」という質問に対しては、学校の先生は教師の性というのですか、生徒が喜んでいましたら自分たちもやってよかったと思いますので、生徒たちが交流で生き生きしている姿を見て、一回でも交流をしますと先生たちもああよかった、またやっつてやろうということになります。結果は「今後も交流をしたい」が21%、「条件が合えば交流したい」は74%です。このことから、交流がいかに学校で評価をされてい

るかがわかりになると思います。

交流形態ですが、学校は忙しいからなかなか交流を受けてくれないという声があります。それには、生徒を主役にした交流をすればいいじゃないかと思いません。あるいは、手が足りないのであれば、地域の方、あるいは保護者、卒業生の手を借りるというのも一つの方法だと思います。

《パワーポイントの映像を利用して「学校交流の実際」の説明 = 略 》

最後に、交流の課題と対策というお話しをさせていただきます。

1つ目は、先程も申しましたように依頼から交流実施までが1カ月から2カ月と短く、ほとんどの受け入れ校は準備不足です。しかし、準備ができないから申し出を断るのか、やれる範囲で受けるのか、前提条件が同じであっても結果は異なってきます。やれるだけやってみようという姿勢さえ校長先生が示しますと、いろいろな交流の手だてはあります。そのために、私たちはマッチング後打ち合わせに出向き、質問や要望を聞きアドバイスをします。多くの場合、準備期間が短いので、受け入れ校の負担を軽減するため、普通の授業を使ってください、普段の部活動でいいです、生徒さんに任せてくださいと言います。生徒はいろいろなアイデアを持っています。特に大阪の子はいろいろなことをやります。大阪の観光資源は人材だと思います。若い子のとてつもない資源を活用しますと必ず立派なものができますので、生徒を主役にしてください、と私は校長先生にいつもお話しをさせていただいています。

2つ目は交流費用の捻出です。訪問校は必ず記念品を持ってこられます。そのお返しをどうすればよいか。飲み物代をどうするか。学校は今お金がないですから、一部私ども大阪観光コンベンション協会で負担していますが、交流件数も多くなかなか全額は出せませんので、この辺のところが今後の課題だと思います。

学校文化や交流姿勢の違いから問題や誤解が生じる

こともあります。時間にルーズで訪問時間が早かったり遅かったりします。日本の学校はきちんと時間管理をするのが普通ですけれども、海外から来られる場合は、そういうことが往々にしてあります。また、交流する際のマナーや態度に驚かされることもあります。生徒だけでなく、視察団の先生方でも、帽子をかぶっていたりチューインガムをかみながら学校に入ってくられます。それを見て困ると思われるのか、それとも異文化理解の一つのチャンスだと考えられるか、受け取り方はさまざまです。逆に、海外から来られまして一番驚かれるのは、日本の女子生徒のスカートの短さです。また先生に対する生徒のなれなれしさにも驚かれます。お互いにいいところ、悪いところもありますが、同じではなく違うことを理解することも大切だと思います。ただ、直前のキャンセルや予定変更、またチューインガムなど目に余るものは、私たちコーディネーターが立ち会っていますので、対応させていただいています。

交流課題に、訪問校から姉妹校提携をしてほしいとか、あるいはホームステイの希望が増えていることがあげられます。しかし、大阪では住宅事情もありますし、また日本人はお客様をもてなすのが下手ですので難しいです。特に韓国、台湾、中国から来る場合は、目の青い欧米人と違って姉妹校提携やホームステイの受け入れは、なかなか保護者の積極的な理解が得られない。そこで、私は向こうへまず行きましょうよ、と大阪の学校に呼びかけています。例えば韓国であれば、台湾、中国であれば、富裕層の生徒が来てくれていますから、向こうでの受け入れはいくらでもできます。まず、向こうでホームステイをさせてもらおう。次に大阪でそのお返しで泊まってもらおう。これは可能ですね。こういうギブアンドテイクじゃなくて、テイクアンドギブという発想もホームステイでは必要ではないのかなと思っています。

今年度、その例として成功したのは、日中友好協会さんにお金を出してもらい、大阪の高校生を約20名中国へ派遣しました。逆に中国から同じ数をお阪に受け入れました。中国派遣はホームステイの受け

入れを条件にしました。生徒の家で受け入れられない場合は、在籍する学校で面倒をみてもらいました。こういう形でのホームステイの受け入れは案外うまくいきました。この方法でのホームステイを東南アジア、あるいは東アジアの国々に普遍していくというのも、今後の課題かなと思っています。

講演

「旅行業界から見た日本の青少年ツーリズム交流の現状と課題」

ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

高松 正人

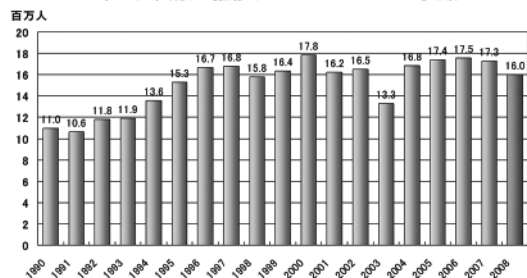


本日は、この約10年間に、日本の若者達の海外旅行の中で何が起きているかを皆さんと一緒に考えながら、この後のパネルディスカッションにつなげていきたいと思っております。

Japan Tourism Marketing Co.

日本人海外旅行者が構造的に変化

日本人出国数の推移(1990~2007+2008予測)



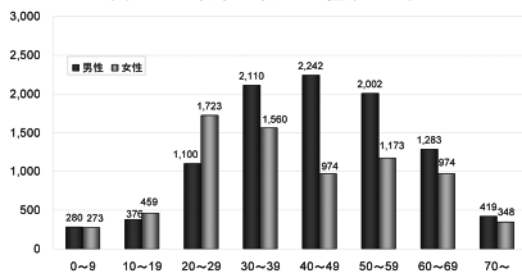
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, arranged by JTM

日本人の海外旅行者の動きは、2000年に1,780万人を記録後、上がったたり下がったりして今また下降曲線を描いています。今年は1,600万人を超えるか超えないかという状況です。

Japan Tourism Marketing Co.

30~50代男性が海外旅行の主役、次いで20代、30代の女性(2007)



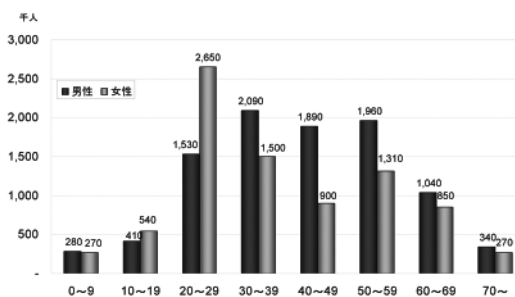
www.tourism.jp

資料: 法務省(出入国管理統計)

2007年の日本人海外旅行者の性別、かつ年齢層別のグラフです。30~50代男性の海外旅行の多さが目立っています。全てではないですが、かなりの割合が出張、仕事に絡む旅行ではないかと思えます。次に多いのが20~30代あたりの女性です。

Japan Tourism Marketing Co.

2000年以前の海外旅行は、20代女性が牽引していた



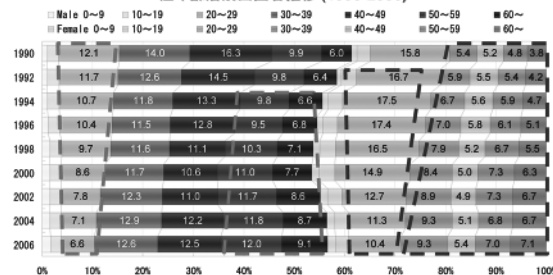
www.tourism.jp

資料: 法務省(出入国管理統計)

2000年は今と大きく様相が違い、20代女性が一番多く265万人。数十万人の違いですが、2000年~2007年の間に、海外旅行する人たちの中身が大きく変わってきた。しかも、一番大きな変化を示しているのは20代です。

Japan Tourism Marketing Co.

日本人海外旅行の主役は若者からシニアにシフト 20代のシェア28.4%(1992)⇒17%(2006) 性年齢層別出国者推移(1990-2006)



www.tourism.jp

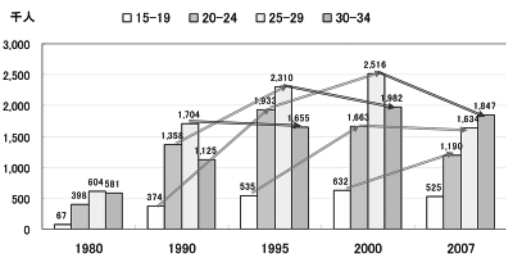
Source: Ministry of Justice, Statistics on Immigration Control

1990年~2006年まで2年毎に区切り、性・年齢層別に見たグラフですが、1990年代に20代の男女合計は27.9%でした。一番20代が多かったのが92年で28.4%でしたが、グラフを見ると20代は段々下がってきています。2006年になると17%にまで減少し、約10%以上シェアダウンしています。誰が多くなったのか。特に女性の30代、40代以降の層です。若者から

中高年齢層に海外旅行者がシフトしていったことがお分かり頂けると思います。

www.tourism.jp

青少年海外旅行のリード役は20代から30代に 青少年出国者の年齢層別推移



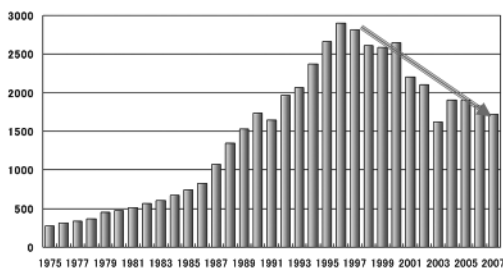
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, arranged by JTM

90年代に10代後半だった人たちは、95年に20代前半、この5年間に矢印の傾きが示すように海外旅行者が増加しました。同様に、95年に10代後半だった人は、2000年に20代前半になり、2000年に10代後半だった人は、2005年に20代前半になったのですが、だんだんグラフの傾きが緩やかになっています。10代から20代にかけての「さあ20代になった、海外へ行くぞ」という動きが見えなくなっている。その5年後はさらにカーブが寝てきています。2000年は20代前半から20代後半にいくと、同じ世代の人たちの数が下がり、さらに、20代後半から30代になると全部右肩下がりです。

www.tourism.jp

20代女性の出国数減少が止まらない

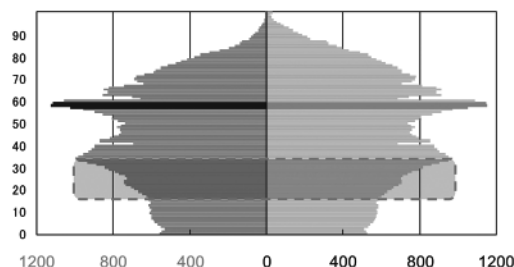


www.tourism.jp

20代女性の出国数のカーブです。一番多かったのが1996年、この層だけで約300万人いました。今では200万人も割り込み、急激に下がっています。盛り返す気配が全くない。この原因のまず一つは、若年層人口の減少です。

www.tourism.jp

30代以下の人口はさらに減少 日本の人口構造 2007



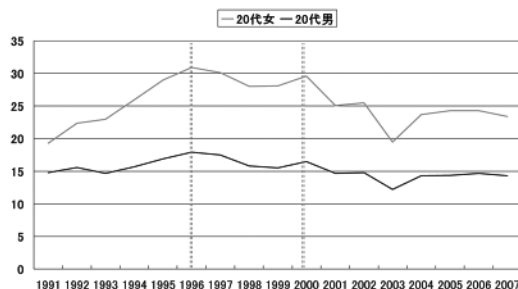
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, Statistics on Immigration Control

日本の人口構成で一番大きいところは60歳前後の団塊世代、その次が35歳前後です。そして、男女とも20代から先は下がる一方です。人口が減少するから、海外旅行者も減少するというの理由ですが、それだけでなく、最近の20代の人たちの海外旅行に対する興味が下がってきているのではないかと。単に人口の減少だけでは説明できないようなことが起きています。

www.tourism.jp

どうなった20代 20代の出国率の推移



www.tourism.jp

資料: 法務省「出入国管理統計」

出国率という概念を表したグラフです。出国率とは、ある世代の人たちが1年間に海外旅行に行った数をその世代の人口で割ったもの。100人のうち何人が海外旅行に行ったかを表す数字のグラフです。20代女性は96年に30%を超え、約3人に1人は海外旅行をしていたということですが、その後出国率がどんどん下がり、2003年のSARSのときに、大きく落ちています。そして、2006、2007年は、2001年9・11のときよりも出国率が低く、20%を少し超える程度。かつて3人に1人だったのが、今や4人に1人も海外旅行に行っていない。男性も緩やかですが下がってきて

います。2000年にもう一度盛り返しそうなグラフが、2001年9・11、そして2003年のSARS後、もう回復しようがないような形になってきています。これまでは憧れ、楽しそうなものだった海外旅行が、少し違って見えてきたのではないかとこのようなことが伺えます。

©Japan Tourism Marketing Co.

あなたにとって海外旅行とは？ 年齢別キーワード トップ5

| 20-24M | 割合 | 25-29M | 割合 | 30-34M | 割合 | 35-39M | 割合 |
|--------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| 異文化 | 21.9% | リフレッシュ | 15.5% | 異文化 | 13.9% | リフレッシュ | 22.4% |
| 見聞を広める | 9.4% | 異文化 | 10.7% | リフレッシュ | 13.2% | 異文化 | 14.0% |
| 楽しみ | 7.5% | 楽しみ | 9.5% | 気分転換 | 10.4% | 非日常 | 11.2% |
| リフレッシュ | 6.3% | 非日常 | 9.5% | 息抜き | 9.0% | 気分転換 | 11.2% |
| 経験 | 6.3% | 気分転換 | 7.1% | 非日常 | 9.0% | 楽しみ | 8.4% |

| 20-24F | 割合 | 25-29F | 割合 | 30-34F | 割合 | 35-39F | 割合 |
|--------|-------|--------|-------|---------|-------|--------|-------|
| リフレッシュ | 14.3% | リフレッシュ | 17.2% | リフレッシュ | 17.2% | リフレッシュ | 21.4% |
| 異文化 | 13.1% | 異文化 | 13.0% | ごほうび | 12.7% | 楽しみ | 13.7% |
| 楽しみ | 11.9% | 楽しみ | 12.0% | 日常からの解放 | 10.7% | ごほうび | 11.1% |
| 癒し | 9.5% | ごほうび | 9.4% | 異文化 | 10.0% | 非日常 | 9.4% |
| 非日常 | 8.3% | 現実逃避 | 9.4% | ストレス解消 | 9.3% | 異文化 | 9.4% |

資料：(株)フォーリズム・マーケティング研究所
「海外旅行実態調査レポート」海外版

www.tourism.jp

©Japan Tourism Marketing Co.

シニアのほうが好奇心旺盛 年齢別キーワード トップ5

| 60-64M | 割合 | 65歳以上M | 割合 |
|--------|-------|--------|-------|
| 見聞を広める | 13.8% | 楽しみ | 13.1% |
| 楽しみ | 11.2% | 見聞を広める | 11.2% |
| 気分転換 | 10.3% | リフレッシュ | 7.5% |
| 異文化 | 6.0% | 非日常 | 6.5% |
| あこがれ | 5.2% | あこがれ | 6.5% |

| 60-64F | 割合 | 65歳以上F | 割合 |
|---------|-------|---------|-------|
| 楽しみ | 18.1% | 日常からの解放 | 13.6% |
| 見聞を広める | 11.0% | リフレッシュ | 11.9% |
| 日常からの解放 | 9.4% | 楽しみ | 10.2% |
| リフレッシュ | 7.9% | 癒し | 6.8% |
| 異文化 | 7.1% | 見聞を広める | 6.8% |

資料：(株)フォーリズム・マーケティング研究所
「海外旅行実態調査レポート」海外版

www.tourism.jp

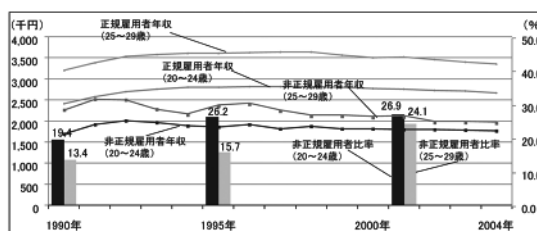
私どもで毎年実施している海外旅行者に対する調査で、「あなたにとって海外旅行とは？」の質問に3～4,000人からフリーアンサーで回答を得ました。若年層の海外旅行は、異文化に触れる、見聞を広めることだという話が先の講演でありましたが、20代前半の男性は、海外旅行についてそのとおりのことを言っています。ところが20代後半以降は、「リフレッシュ」、「気分転換」、「息抜き」、「日常からの解放」、「ストレス解消」、さらには「現実逃避」というような言葉がどんどん出てきます。これは40代、50代も全然変わりません。とにかく毎日疲れ果てているので、携帯も鳴らない、メールも届かない海外に行くと、2-3日の

んびりしたい、とような感覚ではないでしょうか。しかも20代後半ぐらいから「リフレッシュ」がトップにきています。20代にまでその傾向が出ているのは、少し悩ましいことだという感じがします。最近の若い人たちは、「さあ楽しむぞ」、「新しいものに触れるぞ」という気持ちで海外旅行に行っていないのではないのでしょうか。

しかし、60代以上には気持ちが若い人がいます。50代までは「リラックス」、「リフレッシュ」、「現実逃避」、でも、60代になると、「見聞を広める」、「楽しみ」、「異文化」、「憧れ」といった言葉が出てきます。これは実際に旅行の仕方を見ても違っていて、30～50代までの方々は、できるだけ1か所でゆっくりという旅行をします。でも、60歳を過ぎると、一日に一つでも多く見たいので、様々なところを回るようなツアーに参加して、朝から夕方まで頑張ります。現役で働く50代までの方々は、旅行から帰った次の日から仕事ですが、60代以上の方は毎日が日曜日、旅行後もまたゆっくり休めるので、旅行の中で頑張れる、というようなことがあるのではと思います。

©Japan Tourism Marketing Co.

非正規雇用者の拡大と伸びない年収



www.tourism.jp

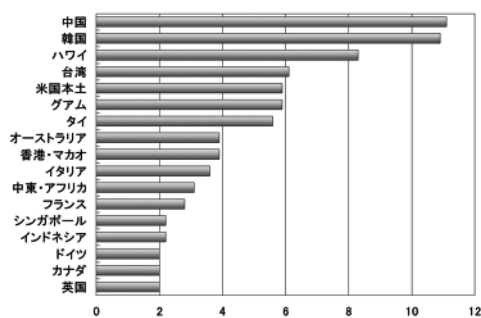
3つ目の背景として、可処分所得、お金がないという問題があります。1990年～2004年の正規雇用者と非正規雇用者の割合を比較してみると、特に20代は、非正規雇用者の割合が上昇してきています。正社員でなく、派遣や契約社員、フリーターが増えている。また、正規と非正規では年収の差があります。ただでさえ年収が低いのに、さらに年収額は右肩下がり。格差の拡大が若年層にも出てきているのではないかと。M

字社会という言い方が今アジアの中でありますが、日本でも同じことが何となく感じられます。

つい最近、首都圏にある2つの大学の先生と別々に話をしました。ある先生から、この1年間に海外旅行をしたかどうかを100人ほどの教室で学生に尋ねたら、2-3人しか手が挙がらなかった。学生たちは、海外旅行は言葉が通じないから大変だとか、怖いとか言っていた、という話を聞きました。一方、別の大学の先生からは、うちの大学の学生はほとんど全員海外旅行に行っていますよという話がありました。両大学間には違いが2つあります。いわゆる試験の偏差値と親の平均収入の違い。同じ大学生で同じ観光専攻の学生ですが、この2つの違いでこれだけの差が出ています。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年の海外旅行先

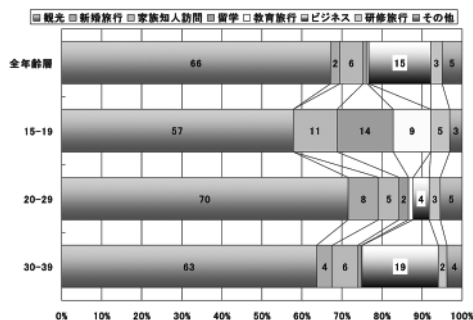


www.tourism.jp

日本の青少年が一番よく行っているのが中国、韓国です。後はハワイ、台湾、まさにマストツーリズム・ destinationsです。強いて言うと、中東、アフリカが他の世代に比べて多いかなという感じです。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年の旅行目的



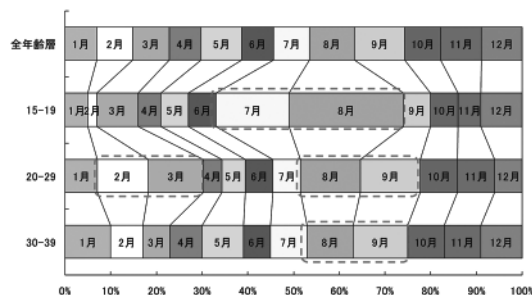
www.tourism.jp

旅行目的を見ると、15-19歳は「観光旅行」が6割

弱で、次に多いのが「家族・知人訪問」です。帰国子女で海外に友達がいるとか、親が海外で単身赴任しているとかでしょう。「教育旅行」で海外に行く人も結構います。20代では「観光」の割合が増えてきますが、「知人訪問」も多少あります。30代になると随分変わって、「観光」に次いで多いのが「ビジネス」、この年齢層から出張で海外に行き始めるのでしょうか。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年海外旅行出発月 (2007)

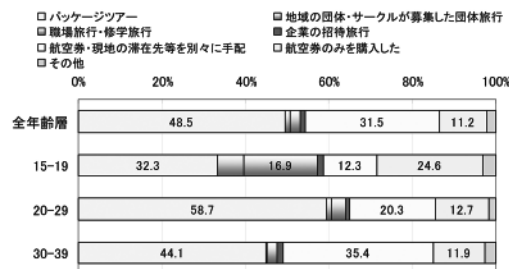


www.tourism.jp

どの月に海外旅行に出発するかは世代によって随分差があり、10代は知人訪問にも、学校の海外修学旅行や語学研修も大体夏休み期間を使いますから、7月～8月が多い。20代になると、卒業旅行にあたる2-3月と、夏休みにあたる8月に加えて9月が多いのは、やはり学生の特権でしょう。8月中は航空券もツアーも高い、9月になると値段も安くなるので、大学の後期が始まる前ぐらいに駆け込みで行く。社会人も8月に夏休みが取れますが、実際には安くなる9月に行っている方々が随分います。30代になると、8-9月が多いのですが、出発月は比較的分散しています。

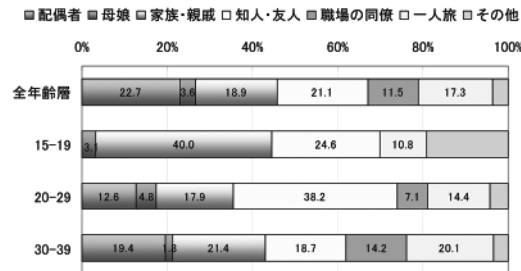
Japan Tourism Marketing Co.

海外旅行の旅行形態



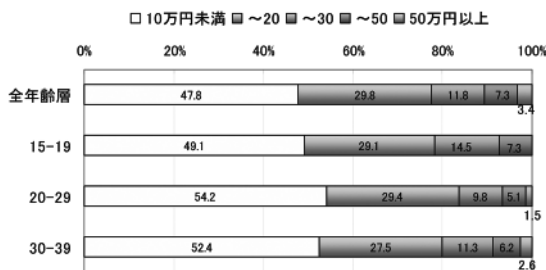
www.tourism.jp

旅行の同行者



旅行形態で見ると、若い方々はパッケージツアーが結構多い。誰と一緒にいくかということでは、10代では家族と一緒に旅行する方が多いようです。20代では、知人、友人。30代は、いろいろな人と一緒にいくという感じです。

海外旅行費用

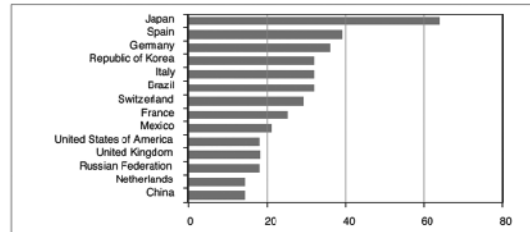


午前中の講演で、青少年の旅行は決してチープな旅行ではないというお話がありました。10代の方々の海外旅行費用は平均とほぼ変わりません。親がかりだからかもしれません。20代は、他の世代に比べて、10万円未満がやや多い感じですが、それほどの大差はなく、30代もしかり。決して20代だから、若いから、安い旅行ばかりということではなさそうです。強いて言うなら、50万円以上はさすがにほとんどいないですが、ハネムーンになるとひとり50万円以上かける人もいます。

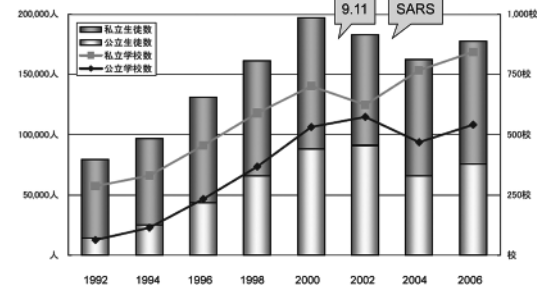
UNWTOのレポートに、世界の幾つかの語学学校で登録している学生たちの国籍を調べたら、何と日本人がトップでした。調査対象の3分の2の学校に日本人が在籍。日本人の若者に語学目的での海外渡航が非常に多いことが分かります。

日本は語学学習目的の旅行に最も熱心？ 3分の2の語学学校は、日本から生徒が来ている

Figure 7.3 Main source markets for language students, 2005 (%)

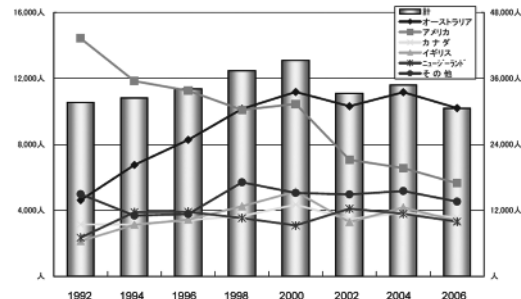


実施校数は増えても、生徒数は伸び悩み 海外修学旅行の推移



海外修学旅行は、2001年9・11後の2002年、SARS後の2004年に大きく減少しました。安全・安心が教育旅行では非常に大切なので、事が起こると減少する。日本の場合は1-2年前に修学旅行が決まるので、事が起こった後の2-3年まで影響します。でもまた、2006年には公立・私立とも海外修学旅行が増えています。折れ線グラフは学校数ですが、学校が増えた割には1学年あたりの生徒数が減少してきているので、全体として生徒数が伸びない傾向が見られます。

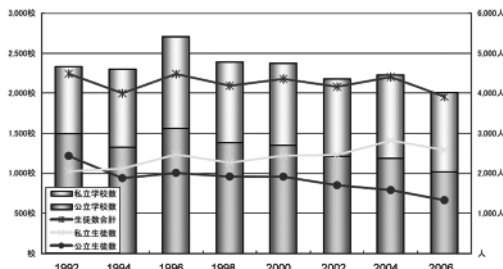
海外語学研修旅行(学校主催)の推移



修学旅行以外にも、学校が主催する海外語学研修（3ヶ月未満の短期留学を含む）があります。2000年あたりをピークになかなか参加する生徒数が伸びない。これも構造的な問題なのかもしれません。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

中・高校生海外留学(3ヶ月以上)の推移



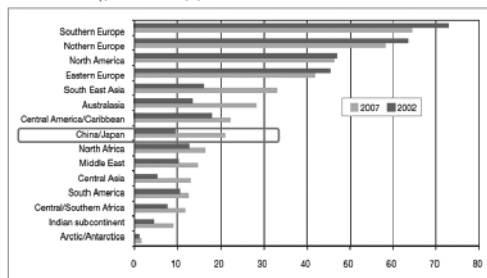
www.tourism.jp

3カ月以上の海外留学は、この世代の人口の減り方よりも減少が激しい。高校生が海外留学しなくなっているのは、幾つかの留学関係団体の話からも見えてきています。受験が大変だから大学に入ってから留学しようとか、海外に向いていた目が内向きになってきているのではないかと、心配させられるような数字が出てきています。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

訪問したことのあるデスティネーション

Figure 2.7 Destinations ever visited over entire travel career and destinations visited on most recent main trip, 2002 and 2007 (%)



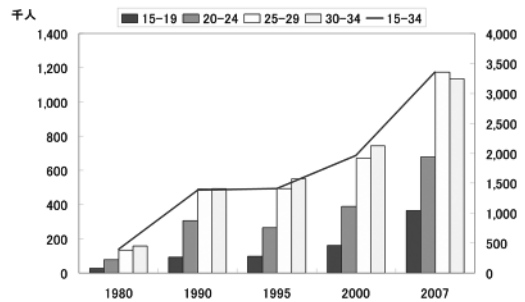
Source: WYSE Travel Confederation Independent Traveller Survey, 2007

www.tourism.jp

これもUNWTOの資料からですが、2002年と2007年を比較すると、世界の若者たちの訪問先は欧州が多いです。中国と日本は一緒になっていますが、この5年間で倍以上になっています。世界の若者たちは中国や日本、アジアに目を向けていることが見て取れます。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

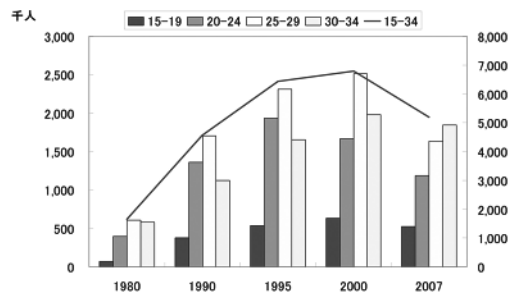
年齢別訪日外国人数



www.tourism.jp

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

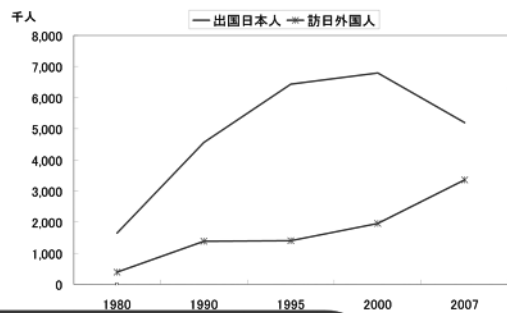
年齢別出国日本人数



www.tourism.jp

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

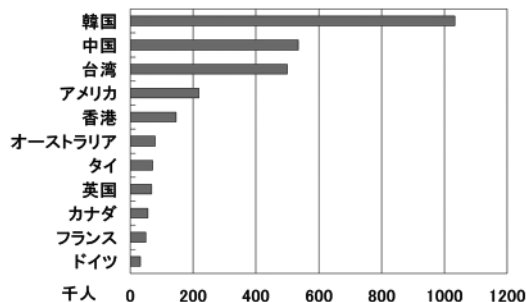
出国日本青少年 vs. 訪日外国青少年



www.tourism.jp

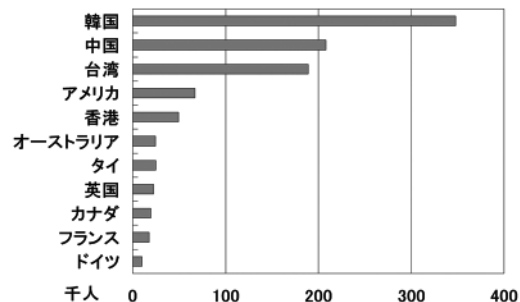
実際に訪日する15～35歳の人たちは、どの層も毎年増えています。特に2000年～2007年の間に急増しています。一方、日本の15～35歳の人たちの出国は、先ほどの訪日のグラフとカーブが全く違います。この両グラフを合わせてみると、あと3年ぐらいで人数が逆転するのではないのでしょうか。

訪日外国人青年旅行者(15~34歳)数上位の国(2007)

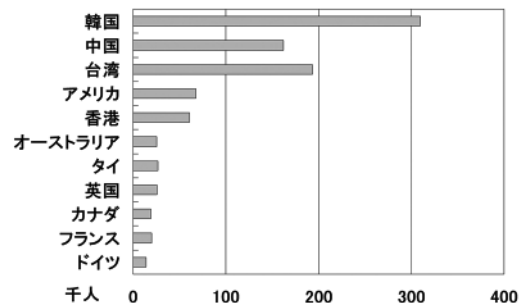


訪日外国人のなかで、一番多いのは韓国人です。次に中国、台湾、ぐっと下がってアメリカ、香港、オーストラリアが続きます。

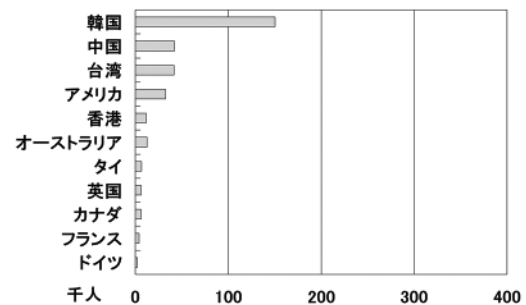
訪日外国人青年旅行者(25~29歳)数上位の国(2007)



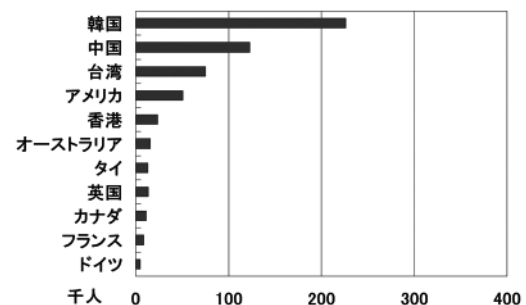
訪日外国人青年旅行者(30~34歳)数上位の国(2007)



訪日外国人青年旅行者(15~19歳)数上位の国(2007)



訪日外国人青年旅行者(20~24歳)数上位の国(2007)



年齢層別で見ても、10代の韓国人がすごく多い。これは修学旅行かと思われます。いわゆる学校訪問を含めた公的な形で統計がとられている修学旅行と、それ以外に日本と同様に、学校訪問なしで、観光と工場見学などの教育目的が入っている修学旅行とがありま

す。学校訪問のない修学旅行は、文部科学省の統計に反映されませんが、合わせると10代だけで十数万人という規模は十分考えられると思います。20代もやはり韓国が多いですが、中国と台湾あたりも多くなってきます。韓国の特に20代は、東京を中心に週末の都市でのショッピングと遊びが多いですが、今年は円高ウォン安で、日本への旅行費用が韓国人にとって倍近く高くなってしまい、急激に落ち込んできていると思います。20代後半になると、中国と台湾、また、欧米からの数が増えてきます。30代は台湾が多く、欧州あたりも増えてきます。

いずれにせよ、日本は世界の若者達から注目されている国ではありそうです。

日本から海外へ行く若者の減少を食い止め、訪日外国人の増加に拍車をかけるためには何ができるか、次のパネルディスカッションにつなげる前に、簡単にまとめたいと思います。

まず世界的な動きの中では、青少年の旅行は増えてきていますが、日本人は90年代をピークに減少傾向にあるということ。若年層の人口減少という構造的な要因がありますが、それだけではなく出国率の低下、つまり、海外に対する興味、意欲が低下してきていることが大きな問題です。一方で、訪日外国人、特に若い外国人たちは増えています。アジアからが多いですが、欧米の青少年も増えてきています。日本に海外の方々が来られる際に、何か不便なことや障害はないか、それを取り除いたらもっと増えるのではないだろうか。そういったことを、次のパネルディスカッションでぜひ考えていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッションと Q & A

「日本とアジア・太平洋各国の青少年相互理解に
資するツーリズム交流の形態はどのようなものか」

司 会

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

パネリスト

阪南大学学生 4 名

笹田 美香

副井 恵

古田 奏

安江 智世

A P U 留学生 4 名

パジェット・ティモシー (アメリカ合衆国)

アンセリー・インクルマー・ジョージ (ガーナ共和国)

シン・ナタリア (ウズベキスタン共和国)

エボン・ジョセフ・ンドベ (カメルーン共和国)

コメンテーター

各講演者

パネルディスカッション

○高松：

これまで講演をお聞きになって、世界的に青少年の旅行が拡大傾向にあること、また、近年、日本を訪れる世界の青少年の数が大幅に伸びていることがご理解頂けたと思います。では、世界の若者達は日本のどんなことに魅力や興味を感じて日本に来ているのでしょうか。

最初にAPUの皆さんにお伺いしましょう。皆さんの国の若者にとって日本は訪問してみたい国ですか。世界の青少年にとって、日本の魅力とは何でしょう。何を見たり、体験したりしたくて日本に来るのでしょうか。ティモシーさんからお願いします。

○ティモシー：

個人的には、APUの留学生として参りました。APUというのが非常によく知られてきていて、5,000人のうちの30%以上が海外から来ているということで、さまざまな国の非常に多様性に富んだ留学生が集まっているというのが魅力です。すなわち真の国際的な教育が受けられるということが大きな魅力でした。

2番目のポイントとして、日本というのは一つのターニングポイントに来ているということで、日本がまさに国を開いて、そしてその社会に門戸を開いているという時期に来ていると思います、日本語を超えたところで。

これまでは言語というのは非常に大きなバリアでした。日本で教育を受けるという場合の大きな障害であったわけです。いわゆる大学の在校生のレベルにおきましては、日本語以外の言語で教育を受けるということは大変なことだったと思いますが、そのあたりが非常に今魅力かなと思います。

○高松：

ティモシーさんをご自分の経験から、国際的な教育を受ける機会があることを挙げて下さいました。

次はガーナから来られたジョージさん、ガーナの若い方々にとって日本の魅力はどんなところでしょう。

○ジョージ：

正直に申しまして、ガーナあるいは西アフリカの大半の学生はそれほど日本というのは選択しません。やはり言語の問題があります。なかなかガーナの生徒が日本に来るという話は出ません。しかし、私にとりましては、今日本にフルコースで、英語で授業を受けられるという学校がある。私自身、実際日本に参りましたとき、大きな挑戦でした。すなわち、言語という問題でした。買い物に行っても、なかなか通じない、難しいわけですね。例えば、何かお肉を買いたい。しかし豚肉は食べたくないという場合がありますよね。だけど、実際にこれが豚肉なのか、あるいは牛肉なのかわからない。そういったところも難しかったですし、そういった難しさがあるからということで、なかなか日本というのは選択肢にならない。だから、大半の学生は、アメリカとか、あとヨーロッパに行く人が多いですね。日本というのは最後のオプションだということがあると思います。

○高松：

ジョージさんはAPUを選ぶとき、欧米の学校と比較してAPUを選んだのですか？最初から日本の学校で勉強してみたいと思ったのですか？

○ジョージ：

事実、中国に行くチャンスもありました。アジアというチャンスはありました。それともう一つ、新しいエリアだということですね、新しいチャンスではないかと。とにかく完璧な新しい環境の中で勉強ができると、そういった意味では、私のほかの同僚とか友達がアメリカとかヨーロッパで学んだことと全然違うというわくわく感がありました。だから、

そういったところに行きたいかと言われたときに、全く新しい今まで知らない環境で学ぶというのもいいかなと。すなわち、そこで全く何も知らない真っ白なところから、全くすべて日本語で書かれている。確かに最初は恐怖でした。だけれども、思ったよりも簡単だったということですね。もちろん、もっとやらなきゃいけないことはあります。日本は恐らくセキュリティ、安全性という意味では世界でもベストではないかと思います。非常に居心地がいいですし、それからいろんなサインだとか言語といったものですね。実際にどのようにコミュニケーションしていくのか、どのようにしてその言葉を読んでいくのか、基本的なところですね。これは本当に大変なところではあります。

○高松：

日本の生活は思ったよりも何とかなったという感じのようですね。では、今度は、ウズベキスタンから来られたナタリアさん、お願いします。

○ナタリア：

まず中央アジアの国からということで、日本のイメージは、アフリカの国々の皆さんと同じです。すなわち日本というのは、非常に苦勞しそうな国であると。中央アジアの我々にとりましては、やはり旅行する、あるいは勉強するというのは、アメリカとかヨーロッパが目的になりますね。韓国だとか、日本だとか、アジアの国々に行くというのがその次に来る。

なぜ私が日本で勉強しようと思った目的というのは、やはり新しい経験をしたいと思いました。といいますのは、日本というのは全く違う宇宙の星のような感じがするんですね。メディアを通しての多くの情報もありませんし、私が知る限りでは大体、侍というイメージがありました。そういった歴史的なことに、私、非常に興味があったんです。そして、それと技術にも非常に興味、関心がありました、ロボットだとか。だから、私の日本に対するイメージ

というのは、そういった意味ではミクスチャーなんですね。侍が片一方にいて、そしてロボットがいると。そういったものが日本に対するイメージ、そういったところで日本に来ました。ですから、現実はどうなのかということを見たいというのが一番の大きな目的でした。

○高松：

ナタリアさんが今見ている日本の現実、どんなものですか？日本に来る前に思っていたものとはかなり違っていましたか？

○ナタリア：

いえ、日本は全く知らない宇宙ではなかったです。地球上に存在する同じ国だということがわかりました。一番好きなのは、非常に国際的な社会であるということですね。特にこのAPUというのが、私自身の知識だとか経験を非常に広げることができていますし、そういった意味ではラッキーだと思います。すなわち、こういった87カ国の学生と一緒に勉強できるということはいいと思います。こういったチャンスというのは日本の学生さんたちにも経験してもらいたいと思います。

○高松：

次は、カメルーンから来られたエボンさんにお話をお聞きしましょう。

○エボン：

実際、日本というのは大半のカメルーンの学生にとってオプションじゃないんです。言語のバリアがありますし、それから余り日本について情報もたくさんありません。カメルーンの学生というのは大体アメリカとかヨーロッパで勉強するわけですが、私は個人的には、アジアの文化に非常に興味がありました。また中国にも長年住んでもいました。ということで、中国のシステムを学んでいき、その中で日本に来るチャンスを与えられたわけですが、それ以

外にももちろんヨーロッパに行くチャンスもあったのですが、私はあえて日本を選びました。というのは、カメルーンの学生はアメリカとかヨーロッパで勉強する人が多いのですが、私は全く違うことをやりたいと思ったのです。APUですと、カメルーンからの留学生は2人しかいません。ですから、そういった意味で特別でありたいと思った。そして非常にプログラムもよいと思いましたし、またAPUというのはいわゆる多文化が存在をしていますので、やはりAPUを通して、私はベストオプションだったと思います。だから日本を選ぶということに決めました。

○高松：

私の会社にもAPU出身の社員がいましたし、インターンも何人か採っている関係で、これまでに何度かAPUのキャンパスに行ったことがあります。日本の一般的な大学とは全然空気が違って、自分の子どももここで勉強できたらいいなと思います。

今度は日本の学生の皆さんにお聞きしますが、日本人として、日本の外から日本を見てみると、どのあたりが日本の魅力だと思いますか。阪南大学の留学生や、皆さんがお付き合いのある外国人の方から見た日本の魅力は何でしょう。笹田さんからお願いします。

○笹田：

私は日本人なので、お寺や京都の世界遺産などに魅力を感じているのだと思いますが、私の友達の阪南大学の留学生によると、先ほど話に出たように、例えば先生に対して慣れ合いだとか、スカートが非常に短くてはしたくないとか、日本より自国の方が良いと頻りに聞きますので、そういうのを感じさせてくれるのが魅力なのかなと思います。何か日本に来てみて、違いというか。

○高松：

違いが分かるところがいい。

○笹田：

そうですね、そういうのをすごく感じました。

○高松：

なるほど。次に、副井さん、いかがでしょうか。

○副井：

私は昔から田舎に住んでいて、大阪に比べてとても空気がいいです。また、人もいいので、日本の魅力は人にあると思います。人と人との関わり合い、思いやりや、大和撫子、着物といった和の心を海外の人にももっと知ってほしいと思います。

○高松：

日本の魅力は人だということですが、JNTOの調査によると、訪日外国人が、日本に来る前と訪日後とを比べて一番印象が変わるのが、人に対する印象なんですね。来るまではそんなに期待してなかったけど、日本に来て何日間か滞在して帰るときには、人の魅力の点数がずっと上がっている。そのあたりをとらえて副井さんはお話し下さったのだと思います。古田さん、いかがでしょうか。

○古田：

私は電車も走っていないような田舎で生まれ育ったので、阪南大学に入学して、電車が通っている、大きなビルがたくさん建っているなという、逆に私が留学生の気分です。留学生の方々は日本に対して、京都、奈良や、お寺というイメージと、先ほどのお話にもあった、最先端技術、大きなビル、ロボットや車とか、そういう2つのイメージがあると思います。もう侍はいませんが、私の出身地のような山があり、おじいちゃん、おばあちゃんが農作業をしているような「昔ながらの日本」が実はまだある。小さな国ですが、実はまだまだ知らない日本があるよ

ということを、留学生の皆さんに知ってもらいたいと思います。

○高松：

すごく本質的なことをお話し頂けたのではと思います。究極のコミュニティーツーリズムの話ですね。3年前前にJNTOが香港の消費者を日本に招待して、日本の様々な場所にご案内したあとで「一番どこが印象に残りましたか」と聞いたら、草津温泉に行く途中の田舎の風景がよかったという回答が多かったそうです。古田さんがこういうところを見せてあげたいと言った「昔ながらの日本」が、外国人の方にとっても印象的なのでしょうね。今度は、安江さんにお話をお伺いします。

○安江：

私は今新しくアルバイトを始め、結構外国人の方と触れ合う機会が最近増えました。私は全然英語が話せないですが、一生懸命に観光案内などをします。そして、私だけでなく社員の方々も英語で一生懸命に対応する姿が、とても日本人特有の優しさ、ホスピタリティーの姿勢だと思うんです。いろんな観光地に行ったりしても、おばあちゃんでも、すごく一生懸命外国人の方に対応したりしている姿を見るので、そういう優しさとかが、お寺などの日本文化以外にも、日本人を観光対象として見てほしいところかなと思います。

○高松：

やはり「人」と「ホスピタリティー」が大きなキーワードのようですね。実際に日本のホスピタリティーは、外国人の間で随分高く評価されています。今、阪南大学の学生さんから、日本の魅力をいろいろご紹介頂きました。

A P Uの学生さん達は、そういうことを普段感じていますか。今の安江さんの「おばあちゃんでも…」のお話を聞いて、2002年のワールドカップのときにカメルーンの選手団が大分県中津江村に滞在し、

村のおじいちゃん、おばあちゃんが同国の選手達と非常に仲良くしていた姿を思い出しましたが、エボンさん、日本人の優しさ、ホスピタリティー、そういったところに人の魅力を感じることはありますか。

○エボン：

確かにそうです。多くの日本の方にお目にかかって私はカメルーンから来ましたと自己紹介しますと、カメルーンを思い出すぐらい、とても親切にしてくださいます。日本人とカメルーンの人はお互い、私にとって温かく感じる人たちなので、日本人に対しても、とても気持ちのいい気分になります。

○高松：

ティモシーさんにお聞きします。エボンさんが話してくださった、日本人の温かさ、親切さ、それから先ほどお話に出たホスピタリティーを、ハワイやアメリカの方々は日本の魅力として意識しているでしょうか。それとも、どちらかという技術や先端的なもの、あるいは新しいものと古いものが入り混じった国という印象の方が強いでしょうか。

○ティモシー：

私はオリンピックゲームのあったジョージア州で育ちました。また、2002年のワールドカップのときにも日本にいました。ですから、皆さんと同じような経験をしたわけですが、アメリカでは見方がハワイよりも狭いと思うんです。ハワイというのは、人口の20%は日本人、日系人です。3世、4世という人たちがいるわけです。そういう人たちがハワイには住んでいる。ですから、ハワイでの見方といえば、とても親しみのある見方をしたいと思います。日本には古い文化、そして新しい文化があると見ています。歴史というと明治、そしてさかのぼって伝統的なものがある。しかし同時に新しい技術が開発されてアジアのリーダーであると。日本というのはリーダーであって、そしてコスタリカとともに

平和憲法を実施しているのは、世界の中でも2カ国しかないということでもあります。ハワイはそれを認識しています。そのほかの米国の州はそうではないかもしれません。

ですから、我々の問題というのは、「ようこそ！日本へ」というマーケティングですけれども、ここで日本にやってきて、非常に特徴のあるところを見るという経験になると思うんです。私は、1999年から日本に学生として来ていますが、親切にしてくれています。ほかの国際学生も同じだと思います。非常に日本というのは閉鎖的な社会ということもあります。ただ、例えば日系人に対して移民の政策があったわけでありまして、20世紀の初頭はそういうような政策があって、そしてその後将来的には移民の政策に関しては一つの課題になってくると思います。それから、地方では人口減少という問題も出てきていると思います。

○高松：

ティモシーさんの発言の中で、日本の姿をマーケティングしていくことが日本の課題の一つだという指摘がありました。まだまだ日本は、世界の若者たちに日本の良いところ、面白さや魅力をきちんと伝えきれていないのではないかと、というふうにも思います。

さて、日本の学生と留学生の両方からお話が出ましたが、APUのクーパー先生から少しコメントを頂けますか。

○クーパー：

両方ともサポートしたいと思います。確かに閉鎖的な社会ということもありますが、個人的な経験を言えば、全くそうではないと言えます。非常に人間性のある社会であると感じております。そして、安全で、進展した、そして機能的な社会。私、オーストラリアで30年間過ごしておりますけれども、生まれはニュージーランドです。ですから、信じてほしいんですけれども、この2つの国は日本の

ような機能性はないです。いろいろな意味で機能性に劣ると言えるわけなんです。

ですから、まず言えることは、海外の人たちというのは十分なメッセージがごく最近までは届いていない。「ようこそ！日本」というプログラムが展開されました。ですから、今の世代、それから将来的な日本人の世代に関しては、そういうメッセージは届くかもしれない。でも以前はそうではなかったわけです。

2点目としては、日本というのは世界にユニークな面を示すことができると思います。人間として一つの特性を示すことができる。親切さ、そして優しさということを示すことができると思うんです。ですから、学生たちはとてもいい経験をして、そして私が感じていることをうまく彼らは説明してくれたと思います。両方の学生さん、うまく説明してくださいました。

○高松：

今度は、日本人でありながら長く海外に住まわれ、最近では日本を外から見る機会の方が多いと思われる山川さんに、コメントを頂きたいと思います。

○山川：

私自身、タイで23年以上暮らした経験があります。23年前は、タイについて特にわかっておりませんでした。タイの人は、見たところ同じじゃないかというふうに思ったんです。子供のころです。それ以来ずっとタイを訪問したいという気持ちがずっとあったんです。そして、その国に行っているいろんなことを発見しました。多くのことが共通点としてあります。日本とタイの間、例えば仏教がその一つです。日本人は仏教徒だということになっています。そしてタイもそうなんです。ただ、真の仏教の性質を考えると、日本の場合とタイの場合で、その両者にかなり違いがあると思いました。

日本では毎日お寺に参拝する人がどれぐらいいるでしょうか。もちろんお葬式のときにはお寺には行

くと思いますが、仏教自体がタイにおいては毎日の生活の中に、そして精神的な面に深く結びついているんです。そして分かち合うということが仏教であり、そしてまた相手を思いやりということでもあります。相手への共感、思いやりの気持ちです。それをあらかずものが仏教なのです。ですから、一見とても似ているなどと思って、肌の色も似ていますし、仏教も共通点の一つだと。しかし、20年前、私は、そうしたことが本当ではないということがわかりました。いろいろ学んだと思います。

そして私の国、日本とはいいますと、これもすばらしい国だと思っているんです。ホテル日航に滞在しています。すばらしいホテルです。ロビーにもいろんな人がいて、そして政府関係の人もあればいろんな人を見るわけですが、みんな、つまり360度常に気を配ってくれていると。そしてちゃんと見ていてくれて、本当に人に対して思いやりを示すというふうに言えます。ただ単にあなたの前面だけを見ているんじゃないということ学びました。タイに住むことによって、日本に対する目が開かれたということです。もちろんタイのことも学んだし、そして自国のことも多く学んだと言えるわけです。それが私の気持ちです。

○高松：

タイの中から見たらタイのいろんなことが見え、逆にタイにいるからこそ、日本がまたよく見えてきたというお話でした。青少年の国際交流は、まさにこのあたりがポイントになってくるのではと思います。今までの皆さんのお話を伺うと、日本は様々な面で魅力があり、興味を持たれるデスティネーションだということです。では、日本は、世界の若い方々にとって訪問しやすい国と断言していいのか、あるいは訪問しにくい、比較したら他国の方へ行ってしまうような国なののでしょうか。例えば一般情報を含め、日本の観光情報の発信は十分なのか。先ほどガーナ、カメルーン、ウズベキスタンでは、あるいはハワイを除くアメリカ合衆国でもなかなか日本の情報は伝

わっていないというお話もありました。湯浅先生のお話のように、日本の入国制度、ビザ、物理的な日本への交通アクセス、日本国内の交通手段、国内の旅行費用、青少年の方々が泊まる宿泊施設、様々な面で日本での旅行のしやすさ、日本への訪問のしやすさの課題があるように思います。

日本は他の国に比べて、若い人たちにとって訪問しやすい国でしょうか。

○ナタリア：

若い人が日本に来て旅行しようとするときには言葉の障害があるので、やはり難しい面があると思いますが、同時に、やはり安心できる国ということも言えると思うんです。といいますのも、公共交通が非常に発達しているという点があります。だれかが新しい人であっても日本に溶け込みやすい、すなわち公共交通を使うということは簡単にできるということです。そしてまた英語と日本語両方の表記がありますので、決して難しくはないと思うんです。日本国内の旅行は易しいと思います。

○高松：

ジョージさんは、いかがお感じですか。

○ジョージ：

やはり情報の伝播ということが一番の主題ではないでしょうか。つまりこちらに来る前には、いろいろなことを知りたいと思っていました。また着いてしまえばいろいろとわかると思うのです。私もそういう印象を持ちました。例えば外国人に対してやさしくないかどうか、余り親切にしてくれないかというふうなことがあるんですが、しかし、実際にそこに行くと本当にその人に会うと、ちゃんと対応してくれるかどうかということです。でも、そうでないかもしれません。例えば警察国家というものもありますが、そのような国ですと、だれかにいつも見られているという気持ちを持つかもしれません。しかし、日本に来たときには、人々が全然違うなと思

ました。親切、よそよそしくもないし、顔をそむけるわけでもない。ですから、問題は言葉、英語の問題だったと思います。例えば英語でちゃんと答えてくれるかどうかということでありました。大半の人たちが本当に完璧主義者じゃないかなという気持ちを持ったんです。そして英語をしゃべり出したときに、間違いをしたくないというふうに思っていたらしゃるんじゃないか。ですから、そのように恥をかきたくないから言いたくない、ちょっと逃げてしまうということなんです。最初は逃げるようになってしまふと、そういうふうに思ったんです。ですから誤解が生じると思います。情報が適切に伝わるということはとても重要なことなんです。

日本がガーナとどういうふうな形でかわっていたかということですが、大使館がありますが、それが日本の方々がどれくらい知っているかなと思うんです。ガーナに来ましても、日本の大使館がどこにあるのかわかりません。そして日本の人はガーナといえばアフリカのどこかの国だということは知っているかと思いますが、それ以上はないかもしれません。ですから、情報を適切に伝えるということがやはり双方向で必要かと思えます。

もちろん大使館は外国にありまして、そしてきちんとしたポリシーをそこから発信するという役割があると思いますが、日本の政府もその点を意識しているんじゃないか。例えば奨学金を出すというふうなことがあります。アフリカ、そしてどこに行くかということを考えるときには、日本に来て勉強してもらってもいいんですよということ、そしてまた、そこの奨学金を受けて学生となって日本に来た人は、将来のすばらしい大使、ベストアンバサダーになると思います。ですから、マーケティングということになるかもしれません。新聞に書いてあることよりも、自分の実際の経験のほうを信じると思えます。ですから、我々の将来は我々の肩にあると思います。国際的な交易、貿易、何であろうと、とにかく日本の状況が私自身よくわかったということが自信になっています。ほかの人から学ぶ以上に実際

の自分の体験で。ですからお金だけでプロモーションができるんじゃない、やはりいい投資というのは、やはりあらゆる要素に対してということを考えるならば、きちんとしたポリシーをつくって、そしてそれに則ってということでもあります。

中国はそういうチャンスをつかんでいるんじゃないでしょうか。我々が今知識を得ていっていると思うのです。メディアに聞くときにも、ニュースについても中国がこうだということを知る時も、そのまま鵜呑みにはしないんです。私自身、自分の目で考えることができると思っています。情報を自分でリアレンジするのです。真の状況はどうであるのかということ。日本についてもそうです。そうすることによって、我々はより多くのものを勝ち得られると思います。

○高松：

阪南大学の学生の皆さんは、海外旅行したことはありますか。どこの国に行きましたか、順番にお願いします。

○笹田：

日本に近い中国、香港、ベトナム、カンボジア、マレーシア、タイに行きました。

○高松：

すごいですね。

○副井：

私は少ないです。オーストラリアと香港にしか行ったことがないです。

○高松：

2か所行っていますから、少ないことはないです。

○古田：

私は、グアムと韓国に3回ほど行きました。

- 高松：
韓国に3回。はまっているんですね。
- 古田：
そうです。韓国の人と友達になって、何度か会いに行きました。
- 高松：
学校交流みたいな感じですね。
- 古田：
はい、そうです。
- 高松：
安江さんは、いかがですか？
- 安江：
私はグアムと韓国に行ったことがあります。
- 高松：
皆さんがそれらの国々に外国人旅行者として行ったときに、いろんな不便を感じたり、また、外国人である日本人でもこんなに楽に旅行できるんだと思うこともあったでしょう。それと同じ目で日本を見たとき、外国人にとって、日本は旅行しにくいのではないか、不便を感じるのではないか、と思うことはありますか？安江さんからお願いします。
- 安江：
まず公衆電話ですが、私がグアムから日本に国際電話をかけようとした際、公衆電話がすぐに見つかりました。使い方は友達と四苦八苦しなながら、何とか日本につながりました。日本では、友達と京都に遊びに行った際に、外国人の方から公衆電話の場所を聞かれたのですが、日本は携帯電話がとても普及しているので、京都のどこに公衆電話があるか私はそんなに分からず…。すると、私の携帯を貸してと言われましたが、貸す勇気がなくて、結局、その人とは別れたのですが、何もできなかった自分にとって罪悪感を感じました。多分その人以外にも、公衆電話を探して困った方は絶対いると思います。こんなにも観光に力を入れている京都なのに、日本人サイドでしか考えてないのかな、外国人が旅行しやすい環境にまだなっていないのかな、というのは海外に行き気づいたことかもしれません。
- 高松：
すごくリアルですね。これは大変な問題です。古田さん、何かお感じになったことはありますか。
- 古田：
私のイメージでは、海外に行くときはお金を財布以外にも分散して持たなければというイメージで、逆に日本はとても安全な国だと、私はとても感じています。
また、日本人はとても情があって親切ですが、困っている外国人に話しかけたいけれど、先ほどのお話のように、英語をちゃんと話せない、間違っていたらどうしよう、恥をかきたくないという気持ちが先に出てきて、話す勇気がない。でも、その勇気がもつと日本人にあればと思います。私がグアムや韓国に行ったときは、日本語表記がたくさんあり、バスの運転手、もちろんホテルの方も日本語がとても上手で、すごく観光しやすかったです。
- 高松：
やはり日本人って、きちんと話せないと英語を話さない傾向があるんですね。APUの皆さんは、そうお感じになったことがありますか？エボンさん、どうですか。
- エボン：
そうですね、英語をしゃべらないとなると、英語を学ぶということに関心すら余りないように感じます。例えば日本と中国を比較しますと、中国の人は、外人を見るととにかく近寄ってきて質問をします。

そしてフレンドリーにしようとするし、英語を勉強したいということも言ってくれるわけですが、日本の方というのは、余りそういった努力をしようとしませんね。わからないというふうに言うてしまう。嫌なのかもしれませんが、とにかく日本の方と一生懸命会話しようとしたのですが、わかりませんと、とにかく逃げてしまうというところがあります。日本は、教育の分野で何かすべきじゃないでしょうか。そしてまた学生には英語をもっと勉強するように、そういった策が必要かと思います。

○高松：

なかなか面白い指摘ですね。日本人は相当長く英語を勉強しているはずですが、それを実際に使ってみることに気おくれしているのかもしれないですね。ティモシーさんもそんなふうに感じますか。

○ティモシー：

私はコミュニケーションのバリアということに関しては、相対的な話ですけれども、特に英語で話をしようという気持ち、意思というのが、私から言わせると、日本というのはインターディペンデントなカルチャーということを感じます。すなわち、ほかの国の人に自分自身を表現するという義務感を余り感じていないということでしょうか。それがやはりコミュニケーションにも影響を及ぼしていると思います。日本で英語を教えるシステムがもう少し改善されればと思います。すなわち英語を読むということ、あるいは書くということに関してはいいのですけれども、必要な、いわゆる言語でのコミュニケーション、話し言葉でということに関しては余り十分ではないと思います。

○高松：

日本の英語教育までさかのぼった問題になってきましたが、少し話を戻しまして、副井さん、ご自身が外国に行ったときに感じたこと、それから外国から日本を見たときに、少し何とかならないかと感じ

ることがありましたら、お話し頂けますか。

○副井：

高校生のときに、オーストラリアの姉妹校にホームステイという形で行き、ホストファミリーにはとてもよくしてもらって、いろんな場所に連れていってもらったり、休日にはアボリジニのところへ一度連れていってくれました。アボリジニの方たちが何をしゃべっているか全く分からなかったのですが、彼らは、食べ物だとか、住まいだとか、中までよく見せてくれて、彼らの伝統をすごく親切に教えてくれました。

でも、日本では、どうしても伝統を守っている人達は、外国人と接したことのないような高齢世代になってしまっていて、せっかく日本を知ってもらおうと紹介しようとしても、英語も全く話せないだろうし、外国人にどう接していいかも分からないから、それで終わってしまう。外国人の方はボディランゲージとかもよくしてくれますが、日本人はそういう表現力も余り持っていない気がします。逆に、英語が通じる観光地に行くと、どうしても日本の伝統は薄れているような、伝統の浅い部分しか見えないような気もするので、そういう点をもう少し考えていかなくてはと思います。

○高松：

ボディランゲージも含めて、もっと日本の普通の人たちが普通にコミュニケーションできればいいのというお話でした。とてもいい指摘だったと思います。これまで何カ国も行ったことのある笹田さん、いかがですか？

○笹田：

私は、ツアーに頼らず、国内・海外旅行ともバックパッカーで行きました。航空券と宿泊も自分で全部手配しました。国内は1週間で行き先はいろいろ、全部で8万円かかりました。一方、アジアに何カ国も行った旅行は、1カ月間で17万円かかりました。

17万円のうち航空券代に半分消えましたが、1週間の国内旅行とアジアの1カ月は、滞在費だけで見ると値段が変わらない。1週間の国内旅行のときは大体1日1万円使って、帰ってきたらお財布に200円しか残っておらず、ぎりぎりの旅でした。草津温泉で「部屋空いていますか」と飛び込みで行ったら、あと何分で一人用の部屋が空きます、と言われたぐらい満室状態で、宿泊施設がすごく少ないなと感じました。それに対して1カ月のアジア旅行だと、1泊360円ほどの安宿ですが、たくさんホテルがありました。そこに行けば、すぐ宿が見つかるというような。違いをすごく感じました。

○高松：

日本で例えば3,600円のような安宿、若い人向けの宿は見つからないですか。

○笹田：

そうですね。観光地でもそんなになかったの。

○高松：

今、様々な課題が指摘されました。まず、日本の情報がなかなか自国にないため、日本がどうも行きにくい、行ったら大変そうという印象を、訪日前に持ってしまう。日本へ来ればそんなことないのですが…。言葉の問題もかなり大きいようです。とはいえ、本当は日本人もコミュニケーションできるはずなのに、上手に話せない限り話さない、書くのはある程度できるだろうけど話すのは少し気おくれする、という問題もあるようです。それから、携帯電話中心の社会になったせいで、日本国内を旅行する際に公衆電話が見当たらないことも問題です。私自身も海外で公衆電話を探し回ったことが時々あり、最近是不安なので出国前に訪問先の国で使える携帯をレンタルします。やはり同じことを訪日外国人も感じているのかもしれませんが。それから、表記の問題も言葉の問題として出てきました。またこれも言葉の問題に関係しますが、日本人の外国人に接する

態度、もっと知ってもらいたい気持ちがあっても、ポディーランゲージでもいいのに表現できないのがもったいないというお話もありました。でも、それ自体も日本の文化かみしれず、日本全体でそれを変えていくのは、そう簡単ではないのかもしれない。それから、笹田さんからご指摘があった宿泊の問題は、確かに若者達にとってバリアになる可能性がある。日本でも、沖縄ですと那覇に素泊まり1泊700円、1,500円で空港送迎付という安い宿もありますが、本州だとそんな安宿はたくさんないようです。

それでは一体、こういった課題がある日本をこれから先、誰がどうしたら、もっと若い人にたくさん来てもらえるようになるのでしょうか。ナタリアさん、いかがでしょうか。

○ナタリア：

非常に複雑な問題だと思います。若い人たち、もちろん旅行の目的が異なります。海外に行く場合、いわゆる自分の国以外からの文化を吸収する、すなわち観光する、それからエンターテインメントを楽しんで、そして国に帰る。ほかの若い人たちの中には、やはり文化を学ぶために来る、あるいは言語を学ぶために来る人もいるでしょう。ですから、若い人たちが何を思っているかによって、また責任によっても違ってくると思います。例えば、もし若い留学生が新しい文化を楽しみたい、あるいは観光したいということであるならば、ウェブサイトで情報を得ることをする人もいるでしょう。ウェブサイトでの情報は、いわゆるネットワーキングがあればできるわけですから、どの国の人であれ、いわゆるホスト国の人たちの中で、ホームステイさせてあげるよというような情報を載せることもできるでしょう。こういったサイト、ネットワークというのは、やはりオフィシャルな、公式なサイトでやるべきだと思います。どなたかが公式なサイト、ネットワークを立ち上げて、ホームステイをだれが提供しているかということをチェックできるような体制を整えればいいと思います。そうしたほうが安全になると

思います。

それから、もう一つ、若い人たちが来る目的としては、いわゆる文化の経験をしよう、言語の経験をしようというのですけれども、そういう人たちというのは、ボランティアの仕事をしてみたい、インターンシップで参加をする、あるいは季節性の仕事をするということ。これは全く観光とは違う目的であるわけです。そこでの経験というのは、より深い経験ができるのです。つまり現地の人と交流があって仕事の経験もできる。ですから、完全にコミュニティーの中に入り込む経験ができるわけです。そういう意味で、政府がよいシステム、制度づくりをするべきだと思うんです。またそのほかNGOであったり、あるいはNPOであったり、ビジネス外でもいいと思うんです。インターンシップを提供するようところが何か制度化をするということも必要だと思います。そしてそれに対して責任をちゃんととることが必要だと思います。

また、メディアも重要な役割を果たすことができる。メディアとしては、若い人たちのツーリズムを促進し、よりたくさん情報をいろいろな国に対して発信をする。ボランティアの活動についての情報発信、それからインターンシップの情報発信。旅行会社が今度はそこで参加をするということ。ですから、政府の役割、それから産業界、メディア、そしてまた学生の何らかの組織、そういったことで役割分担していくべきだと思います。

○高松：

今のお話で、官民とマスメディアが各々役回りを担って初めて大きな流れになるのではと思います。では、その全体の動きをオーガナイズするのは、一体誰なのでしょう。

○ナタリア：

一番大きな役割というのは、やはり政府だと思うんですね。そして政府の中で何らか部門、またその下の部門かもしれないけれども、こういうような青

少年ツーリズムに対して責任を果たす人がいるべきではないでしょうか。

○高松：

政府がイニシアティブを取るべきだとのお話でしたが、ジュタコーンさん、タイでは政府あるいはTATの役割は一体どのようなものでしょうか。

○ジュタコーン：

ツーリズムが過去どうであれ、官民をつなぐコーディネーターのような役割をタイ政府観光局(TAT)は担ってきました。つまり、民間で何かビジネスを始めるのにどこに支障があるかなどの意見を聞き、それを関係当局に伝える役割です。例えばプーケットの例ですが、私が十代の頃には1日1本、B737のフライトだけでした。さらにプーケットへ繋がる道路は空港から1本だけ、プーケット市からパトンビーチまでも道路が1本しかなく、別のビーチに行こうとすると非常に難しいという状況でした。そこで、プーケットの人たちはTATに対して苦情を言ってきましたので、TATから提案し、タイ政府に対して、また内閣を通して、そして閣僚から特別な予算取りをしてもらい、プーケット開発のプロジェクトがスタートしました。ですから、官民のコーディネーションは、ツーリズムにおいてとても重要な役割だと思います。TATは半官半民で設立されたのが幸運でした。利益を上げない組織として予算を政府からもらえるからです。

以前に一度、UNESCAPが官民のコーディネーションについてのセミナーを開催したことがありました。我々は、明確に政府側の責任は何か、民間側の責任は何かを明示し、一体誰がその中で調節をするのかも明らかにするわけです。そうすることで官民が同じ方向を向き、同じ道を歩んで一つの目標を達成できるわけです。ですから、日本ではJNTOがこういった責任を果たすことができるのではないかと思います。

私が十代だった頃、日本については私のヒーロー

だった三船敏郎、侍の映画、それから私の大好きな日本の「上を向いて歩こう」（スキヤキ）の曲しか知りませんでした。現在では少なくなっていますが、日本の生活水準がそれほど高くなかった昔、タイからの日本へのグループツアーがたくさんありました。日本企業が経済成長を遂げたことが一つの磁石的な働きをしたと思いますが、日本企業がタイでの操業をどんどん広げたことで、タイ人たちは自分たちの子供に日本語を日本で学ばせたい、そして日本企業で働ければと考えるようになっていました。私が大学生の頃、タイ人に対する日本政府の奨学金があることを知りました。タイ政府経由で奨学金が与えられる形で、タクシン政府、副首相、ソムキット博士が日本で学生を学ぼうとしたわけです。

タイでは、インバウンドはもう50年前からスタートしていましたが、これまで日本は主に日本人を海外に送り出していました。今度はインバウンドが必要だと考え出したわけですが、ほとんどの国々はもう既にインバウンド推進を行っているので、我々は競争していかなければならない。でも何らかの形でさらに推進することはできると思います。

私どもが若い頃にはインターネットがなかったので、私が日本について学ぼうと思うと映画や歌しかなかったわけです。昔、日本で5年間トレーニングを受けたタイ人の男性シンガーがいます。彼は今もう高齢ですが、日本の歌を歌えますので、彼らを日本のツーリズムに活用すればいいわけです。例えばケイ・チョン先生がおっしゃったように、ジャッキー・チェンは香港観光大使となっていますので、同じようなことをすればいいわけです。台湾と日本は、歌の女王、テレサ・テンがいるので約50年間こういう交流をしてきました。この方たちも日本で研修をしました。彼女は非常に台湾、中国でとても有名なので、一つの戦術として活用すればいいと思います。

以前は多くの国は単にインバウンドのことしか考えなかった。でもこの新しい時代、新しい世代の時代では、我々はギブアンドテイクでやっていくべき

ということで、日本からの観光客も必要、また、タイからも日本へ送客するように努めています。また、日本国内では受入れ側として何をしなければいけないか認識すべきだと思います。

○クーパー：

コメントしていいですか。今の方についての意見についてですけれども、日本で欠けている点は、政府のいわゆる省が一つ欠けているということです。1983年にオーストラリアは観光省というのをつくっています。オーストラリアでも、例えばJNTOのような組織はそれまでもあったのです。でもそこで何か欠けていると、つまり直接政府とつながるような、そのリンクがなかったわけです。ですから、観光部局もできるだけ省のレベルに上げるということが必要だと思います。早くすべきだと思います。

それから、もう一つ、オーストラリアで認識したことは、ビジネスで出かけてくる人たちの90%は非常に小さな企業が担当しているわけであります。しっかりと管理ができていない。ですから、やらなければいけないのは、政府、それから地域の観光局がいわゆる管理能力というものを醸成する。そして小さな旅行会社の管理能力をレベルアップする。そしてこのツーリストが海外からやってくる、あるいは出ていく方でも、どのようなケアをすればいいかということトレーニングすべきだと思います。インバウンドのツーリズムを成功させる。日本は、一時はインバウンドの旅行者が非常に多かったわけであります。1920年代、それから1940年代、50年代に関しては、非常にこれは多かったわけです。インバウンド向けであったわけであります。そしてこれを再度見直すべきだと思います。

○高松：

クーパーさんがコメントしてくださいましたが、10月に観光庁が設立されました。まだ省になっていないですが、非常に大きなステップだと思いますし、まさに今、TATの例でジュタコーンさんにお話を

頂いたようなコーディネーター役を日本の観光庁に期待したいと思っています。

ここで、180度視点を変えて、日本の若者達の国際交流、海外旅行についてお話を進めたいと思いますが、先ほど私の講演でもお話したように、ここ10年間ほど、若い訪日外国人は増えているのに、日本人はなかなか海外へ行かなくなってきた。3～5年後には、この人数が逆転してしまうかもしれないところまで来ています。国際交流は双方向の動きがあってこそ初めて意味が深まるわけで、日本人の若者達が海外に行かなくなってきたら、今後の国際社会における日本は大丈夫かなあと心配になります。

まず、阪南大学の皆さん、今、周りの人たち、お友達、他の大学の方々、先輩、後輩のなかで、海外旅行に興味がない方は結構増えてきていますか。

○笹田：

先日、友達との卒業旅行にトルコ旅行の計画を立てた際、私はバックパッカー経験から、出会いも多く面白いと思って個人旅行を提案しましたが、友達は余り海外に行った経験がなく不安なのでバック旅行がいい、と議論になりました。私は不安がっている人を無理やり連れて行くのは良くないと思い、ツアーで行くことにしました。

私がバックパッカーとしてアジアで体験したお話ですが、「日本人は集団行動が多い」と、ある一人のヨーロッパの旅行者に言われました。集団行動とは、多分ツアーのことでしょう。また「一人でこんなところに来て、君はクレージーだ。」とも言われたほど、個人旅行する日本人は非常に少ないのだと感じました。さらにその人から、国境を越えればすぐ別の国なので、3カ国語ぐらい話せる人が結構いると聞きました。日本人が英語を話せないのは島国だから、と単純に思ったのが正直な意見です。

バック旅行か個人旅行かを議論した際、その中間的なツアーがあればいいなと思いました。例えば、私は安江さんとグアムにフリープランで行きました

が、ネット検索でトルコだとフリープランが見当たらない。グアムに比べてトルコは旅行しにくいかなということがありました。

○高松：

副井さんは、いかがですか。周りの方々、あなたご自身も含めて海外旅行はどんな感じでしょう。

○副井：

そうですね、基本的には皆さん、興味はあると思います。皆、行ったことのないところにはやっぱり出かけたい、見たことのないものを見たい、関わっていない人にも関わりたいと、すごく本心的にはそう秘めていると思うのですが、今は情報化社会で、様々な情報が学生の私たちにも入り過ぎだと思えます。

○高松：

どんな情報が入ってくるのでしょうか。

○副井：

インターネット、テレビでも、どこの国が、どういう状況かもボタン一つで見ることができる。でも、それは逆に悪いところも見えてしまっているとも感じます。行きたいという気持ちが前に出る反面、とまる気持ちもそれによって生じる、葛藤が生じると思うのです。海外旅行する人が増えていた時代は、想像力だけで行っていた人がとても多かったと思います。でも、今は入り過ぎる情報がきっかけで理想と現実のギャップが生まれ、足がとまってしまい、年々減少傾向になってきている。今の人たちは、興味はあるけど踏み出せない、というのはあると思います。

○高松：

とてもおもしろい指摘です。情報が入り過ぎる、いわゆるマイナス、ネガティブな情報まで入ってきてしまい、それゆえ、興味はあるが踏み出せない。今のお話は、マーケットの状態をととても的確に言い表

しているのではと思います。古田さん、いかがですか。

○古田：

私はとても旅行が好きで、バイトしてでも旅行に行きたい気持ちがあります。でも先日、友達との会話で旅行は今しかできないと言ったら、バイトで得たお金で好きな服や、かばんを買うなど、旅行以外に魅力的なことがたくさんあるし、結婚したら旅行に行けないわけでもなく、歳をとってからでも幾らでも旅行できるから、別に今急がなくてもいいという話になりました。そのことを母親にすると、世代が違うのかなという感じで、母親の世代は、結婚したら旅行に行けないイメージがあったので、若いときにたくさん旅行したと。今若い人が旅行しないのは、他にもたくさん魅力があるし、いつでも旅行はできるという考えがあるのかなと思います。

○高松：

すごく大事な点ですね。大変失礼ですが、お母さまは40代、50代？

○古田：

母は50代です。

○高松：

今の50代の方々は、30代になったとき、ぱたっと海外旅行に行かなくなったのです。1990年頃の30代女性の出国率は10%を割っていました。結婚したら、子供ができたら、海外旅行なんて無理と言われて、行きたくても行けなかった時代なんですね。ところが、今の20代、30代の人たちは、「今でなくてもいつでも行ける」と思って結局海外旅行に行かないようです。安江さんの周りの方々は、いかがですか。

○安江：

私は、笹田さんと古田さんの意見に本当に同感ですが、私は笹田さんほど冒険心が余りない、度胸が

ないので、ひとり旅だったら楽に安くパッケージツアーで主要な観光都市を回るような、安全な旅行がしたいと思うタイプです。

古田さんが言ったように、旅行以外に娯楽があり過ぎると思います。私は旅行会社に内定をもらっていて、会社から「ほかの娯楽にお金を費やす人たちが、どうしたら店舗に来て、旅行を契約してくれるか考察せよ」という課題が出ました。旅行は何年か一回といった方たちも気軽に来てくれるような、コンビニみたいな、ちょっとお茶飲みに行こうと誘えるような旅行店舗にしたらいいのでは、と回答したのですが、本音を言うと、ブランド物のかばんか、旅行かと考えて、私は正直、ブランド物のかばんを買いましたが、そういう考えの若い子が多いのかなと思います。そこで、私は娯楽を対象とした旅行をつくれればいいと思います。私は鉄道、特に新幹線が好きなので、例えばその車両庫を見に行く、制服が着られる、そういうツアーができれば私は絶対参加するのですが。そのような様々な趣味と旅行を合わせたプランなら、旅行もできて、趣味にも費やせると、旅行をする若い子が増えるのではと思います。

○高松：

提案まで出てきました。旅行とそれ以外の娯楽、あるいはそれ以外のお金の使い方が競合しているとの指摘が出ました。これは、若い人に限ったことではありません。今の旅行市場を見ていると、例えば、オリンピックを見るために50万円のプラズマテレビを買ったので、今夏は海外旅行に行かなかったとか、わざわざ温泉に出かけるのは大変だから、近くにできた日帰り温泉で思いっきり一日過ごしたなどという事例がたくさんあるのです。今のお話のように、ブランドバッグか、旅行か、というような競合も出てきます。今は急激な円高なので、一昔前のようにブランドバッグを買いにシンガポールやソウルへ旅行ができますが、一時円安になったときは、海外よりも日本で買ったほうが安くなったので、これなかったようです。今のお話の中で注目したいの

は、「どこに行く」という話が一つもなかったことです。かつての旅では「どこに行く」が先にあり、そこで「何をやる」か考えたのが、今は「何をしたい」が先にあり、それができるから「どこに行く」という順で旅行の目的地の選び方が変わってきています。ですから、若者達を目を海外へ向けさせるには、海外でならもっと有意義にできるようなことを見せてあげるのもいい方法かもしれません。例えば、安江さんを海外へ行かせるには、まだ日本人があまり行っていない台湾新幹線の車両基地に入れてあげるとか。

では、今度はAPUの留学生の皆さんにも聞いてみましょう。APUにも日本人学生が6割程いると思いますが、彼らはあなたの方の国の若い人と比べて、海外旅行への関心は高いですか、同じくらい、あるいは、余り海外旅行に行く気はないかなという印象でしょうか。エボンさん、いかがですか。

○エボン：

カメルーンの若い人たちは海外に行きたがりますが、例えば日本の場合、ビザを得るのが非常に難しい。カメルーンの大学では、いわゆるそういった交流プログラムがありません。ですから、多くの学生は自分自身で資金を集めなきゃいけないし、例えば奨学金をもらわなきゃいけないということで、ただその中で入学を許可されたような場合、例えば私のようなラッキーな者の場合でも、やはりバリアがあります。すなわちかなり多額のお金を銀行にまずデポジットしなきゃいけない。大半の方はそういったお金の余裕がありません。オーストラリアの場合、ツアーでも何かアルバイトをすることができます。しかし日本ではそれができないという問題がありますね。なかなか難しい。

それから、中国と比較しますと、中国の場合、非常に数多くのホテルがあります。学生向けのホステルもあります。いわゆる学生がツアーリストとして行って、非常に安い値段で泊まることができます。日本もそういったことをやったらどうかと思いま

す。大学の中でも、そういったホステルを使って若い海外からのツアーリストを受け入れるということもいいんじゃないでしょうか。

○高松：

日本に来る若い人たちのことをお話ししましたが、日本人のクラスメートは海外旅行に行きたいと思っている、あるいは海外旅行に実際に行っていますか。

○エボン：

海外には行きたがっていると思いますし、実際に楽しんでいらっしゃると思います。日本人の学生さんで本当に海外に行きたいという人はいますが、問題は多くの日本人の方は、それは英語を勉強するためだけというのがあると思うんですね。もっといろんな角度から見ていく必要があると思います。ですから、例えば大学の大半の学生の十分な需要には合っていない場合もあると思います。例えば教育ということ。そういった意味では、いわゆるツアーに行くということに関しては、そういった意味で分かりやすい場合もあるのかもしれませんが。もし自立をしているならば、やはり期待に合うようなものを求めるはずだと思います。ですから、そういった意味では自分の関心を半分ぐらいしか満たされないということがあるかもしれません。

○高松：

ナタリアさん、いろいろおっしゃりたいことがあるようですが。

○ナタリア：

日本の学生の場合、特にAPUで学んでいる学生さんたちは、非常に海外に行きたがると思います。例えば私の場合、この国際的な環境の中に入ったときに、それだけの知識を得た。すなわち、どんなメディアでも、どういったインターネットでも得られなかった経験をしましたし、知識を得ることができ

ました。単に人と話をするだけで、単純に生徒と話をすることで非常に数多くの国に対して関心を持ちました。いろんなところに行きたいと思う、こういった国際的な環境というのは、非常によいベースになると思います。すなわち、日本の学生さんたちにとってもこういった知識を持って、もっと知識を得て、そしていろんな人、いろんな文化を知る。そうしますと、その後で恐らく彼らはもっと海外に行こうという気になるでしょう。学生さんで、例えばローカルエクスチェンジプログラムというと、大阪ですとか、それ以外のところから来ている交流学生の方たちも非常に興味を持っています。私の国にも非常に興味を持ってくださっていると思います。

○高松：

A P Uの場合、87 カ国の生徒がいる特別な環境なので、興味を持つ国はたくさん出てくるだろう、多少他の大学に比べて学生は海外に興味を持ち、実際に行ってみたいと思う方々が多いというお話でしたが、轟先生からご覧になって、最近の学生達の海外旅行に対する志向はいかがでしょう。

○轟：

確かにうちの学校が、特にアジア・太平洋地域に関心を持って、地域研究をしようと思って来る学生が多いので、ほかの大学に比べたら、そうでもないかもしれませんが、同じような傾向がありまして、僕は90年代の初めに学生でしたが、そのころは、プラザ合意の後に急に円高になって、それからバックパックというのが一種のブームになって、だれでも大学生になったら、バックパッカーとして海外に出るようなものだというような道筋ができたんですね。一つのブームになっていて、逆に行かなければいけないみたいな義務感で行くような人も多かったぐらいでして、皆、「地球の歩き方」をバイブルみたいに持って、今は完全に昔の話ですけども、昔は個人旅行というだけでもすごく目新しく、冒険心をくすぐられていたんですけども、今の学

生を見ていると、それ自体がもう食傷してしまうような、そういう時代になっている。今の学生の傾向はどうかというと、海外に対する関心はあるんですけども、そういったバックパックス的な旅行や、それこそツアー的な旅行ではなくて、現地に行って、どこに行くではなくて、何をやる、そっちのほうにすごく移ってきている。だから、従来型の旅行じゃなくて、例えば我々は国際交流のプログラムとか、それこそ青少年交流の我々、アクティブラーニングと言うんですけども、そういうプログラムを学生たちにどんどん提供しているんです。それというのは、講義としてやっていますけれども、登録の開始ですぐに締め切りになっちゃうような、そういう海外のアクティブラーニングプログラムというのはすぐに売り切れてしまうような盛況を呈しているんですね。

何かを経験したり、体験したり、あるいは自分の専攻に合った行動をしたり、勉強をしたり、そういうものは、すごく学生のモチベーションをくすぐっていて、すごく需要があるわけですね。どこに行くじゃなくて、何かをする、何か貢献をする、そういった方向に学生の関心がシフトしているんじゃないかなという気がしております。

○高松：

学生が受け身になってきているというお話がありましたが、もう少し具体的にお話し頂けますか。あるいは、A P Uの学生さんで、日本人学生が以前に比べて受け身だということについて、どうお考えになるか、ご意見ある方、いらっしゃいますか。

○クーパー：

日本の学生さんでA P Uに来られるということは、いわゆるマルチカルチャーな経験をしたということ。87 カ国、これは日本の学生も含めてという意味で言っています。そのうちの半分ぐらいが日本の学生であるということ。ですから、このプログラムが成功しているのは、やはり日本の学生がかか

わってくれているからだということも言えると思います。ですから、そういった意味では大きな違いはAPUに関してはないと思っています。

○高松：

その他コメントありますか。ジョージさん、どうぞ。

○ジョージ：

私どものクラスは半分日本人で半分中国人がいますが、「どこから来たの」と聞かれまして、私は「ガーナ」と。私はケニアからというふうに彼は聞き違いをしたんです。だから、「ああ、そう、ケニアから。そしたらライオンとか象とか家の窓から見えるの」というふうに聞いてきました。ですから、「そうじゃないよ、私は町に住んでいるんだよ。そしてみんなが住んでいるような家に住んでいるんだよ」という話をしました。だからこういうふうにいわれる情報が少ないということ。それから海外に出かけるチャンスもない。ですから、若い世代にとって難しいのは、海外に出かけたいと思ったとしても、実際実行できる人たちというのはやはりそれは限られていると思います。パッケージツアーに参加するということが多いかと思うんです。パッケージツアーに行きますと、違ったところに行けない。例えばラテンアメリカに行きたいとしたとしても、その機会があるか。例えば言語を学ぶ機会はできるかもしれません。言語学校に入るのではなくて、ほとんどの日本人の場合には語学といえば書けるけれども、でもしゃべれない、しゃべるチャンスがないからということなんです。でも実際その地域社会に出かけて行って住むようになりますと、私のことを考えてみれば、日本語を覚えなきゃしょうがないということです。ですから、右左、みんな日本人、どこを見ても日本語をしゃべっている。だから私もそうせざるを得ないわけでありまして。だから、教室だけ座って勉強するのではなくて、いわゆる町の中でその言葉をピックアップして、学ぶことができるわけです。ですから、日本の青少年に魅力のあることをパッケージ化するということ

がいいと思うんです。それがパッケージグループ旅行であれば、バックパッカーであっても、大部分の人たちというのはやはりパッケージツアーを好むかと思っています。

○高松：

これまで日本の若い人たちをどうしたらもっと海外へ行く気にさせることができるかというディスカッションをしてきましたが、何かコメントやパネルの皆さんに対するご質問のある方がいらっしゃいましたら、どうぞ。

○参加者：

奈良県立大学地域創造学部観光学科4年の村本と申します。まず最後の課題に挙げた日本の青年が海外に興味を持っているのかという議論で、パネルディスカッションの中で出てこなかった議論を言いたいと思います。

高松さんの発表の中で、若い人の非正規雇用の増加という現状を、僕は重要視しないとイケないのかなと思います。僕の周りには、結構お金を持っている若い人もいますが、海外旅行なんて夢、という余裕のない学生やフリーターも結構大勢います。そういう状況の中で、海外に興味を持つのは非常に難しいのかな、日本がこれからグローバル化の中で海外に興味を持てるかどうかは、やはり経済状況が影響してくるのかなと思います。

もう一つ、教育の側面ですが、パネルディスカッションの中でも結構話されたと思いますが、日本の英語教育は果たして今の若者達に海外へ興味を向けさせる動機づけになるのか、僕は全く逆だと思っていて、受験志向の英語は、学生や若い人に英語嫌いを植えつけてしまい、海外への興味を削いでしまうというのが、僕らが教育を受ける段階であると思います。海外に興味を持たせる英語教育という視点で、日本の英語教育のあり方を考えていく必要があるのかな、経済状況もそうですが、そういうことを総合的に勘案して、今後インバウンドもアウトバウンド

も考えていかなければいけないと思っています。

○高松：

今、コメントが出ましたが、一つは非正規雇用の問題が非常に大きいだらうということ。それから、どうも日本の英語教育が、若者達の目を海外へ向けさせるようになっておらず、むしろ受験体制の中で海外から目をそらさせているのではないかと指摘されましたが、日本の英語教育を受けられた阪南大学の学生さんでどなたか、それに対してコメントはありますか。

○安江：

私は英語をそれほど嫌いではなく、文法と、外国人の方との会話という授業を2種類受けました。文法の授業は、ディス イズ ア ペンなどばかりで、そんなのを延々と繰り返しても、絶対旅行に行きたくならないと思います。それより、アポリジニのことや、観光に関連する勉強を中学校くらいからしたほうが、いつかここに行きたいというような好奇心が芽生えてくると思うので、先ほど村本さんが言われたように、受験英語ばかりでなく、遊びではないですが、勉強しながら旅行に行ったかんじになるような教育をしたら、旅行に行きたくなくなるかなと思います。

○高松：

中学からという話でしたが、皆さんの中で中学以前、小学校で英語に触れたことある方いらっしゃいますか。

○副井：

塾で、5年生か、高学年になってからですね。

○高松：

それは何か影響はありましたか。

○副井：

そのときは、A、B、Cの発音からだったので、

特に何か文法を難しく組み合わせたり、といった勉強はしませんでした。

○高松：

小学校5年生の頃から始めた英語は、英語を好きになるきっかけになりましたか。

○副井：

好きにはなりました。塾の先生をまず好きになれたことから始まったので、英語が好きになるというより、人を好きになってから始まったというのが大きいと思います。

○高松：

ティモシーさん、お願いします。

○ティモシー：

私が言いたいのはAPUの学生というのは非常に幸運だと思うんです。数は少ないですけども、そして経済的にも恵まれた人たちが来ているわけです。ただ日本の状況、購買力というのは家族の収益というのは、10年前でも今でも同じだと思います。でも、生活の経費というのがここ30年間どんどん上がってきているわけで、これは経済学者、経済官僚の人たちが言っていることであります。ですから、こういう学生というのは、海外に出かけていく機会はあるって、アルバイトをして、そしてバックパックを担いでということ、そういう資本主義の社会ではそういうことも可能であるわけです。

でも、私の解決策としては、NGO、JICAのような組織、そのほかの組織もまた専門学校もそうですけれども、いろいろな国で学ぶ協力提携をやっていて、プログラムを展開しています。例えば貿易をやる人たち、高等教育を受けなくても海外に出かけて行って、例えば港湾の仕事であるとか、それからまた農業の活動をするということもあります。そして、自分自身がその地域の社会に出かけて行って言語を学ぶことができるわけです。日本の資産とい

うのは、日本人たち自身にあると思うんです。日本人は海外で会ったときに日本の大使として役割を果たしているわけです。彼らの心の温かさ、やさしさというのに触れて、そして外国人学生は日本に來たいと思うんです。皆さんの一番の資産というのは、そのやさしさにあると思います。

○高松：

まさに、国際交流親善大使の役割を一人一人が果たしていく、というようなご提案がありました。もうお一人、何かご意見、コメントがあればどうぞ。

○参加者：

旅行会社に勤めています西村と申します。先ほどの続きになりますが、もう少し、日本の受験英語と実用英語を考えてみたいのですが、ランゲージバリアという言葉も出ましたが、単なるランゲージでなく、コミュニケーションのための英語をもっと勉強させていくと、実際自分の目で見て、口で食べて、頭で考えて、を海外でやってみたいという動機づけにもなると思います。何より、日本人は遠慮し過ぎというか、英語は話せるだろうけど、コミュニケーションに積極的でない。それって何か、外交にも似ているのではないか、島国根性の悪いところかなと。ですから、日本の総理大臣も、ツーリズムとか、海外との交流を発展させていったら、日本の国力、平和のみならず、外交も将来担っていけるような人を育てるぐらいの観点で、観光庁のみならず、国を挙げて取り上げて欲しいと考えております。

結 論

今の日本の若者達が海外へ目を向けるかどうかは、最終的には、日本が世界の中でどう認識されるか、どういう立場になるか、ということと大きく関わっているのだと思います。また、今ご指摘のあったコミュニケーションのための言語は、英語だけでなく、中国語、韓国語もそう、タイ語もそうかもしれません。実際にAPUの学生を私の会社でもインターンとして随分受け入れましたが、4カ国語話せる人はざらにいます。例えば、20歳くらいのマレーシア人学生は、マレーシア語、北京語、広東語、日本語、そして今は韓国語を学んでいます。それに比べて、どうして日本の学生は英語一つでさえできない、何が違うのだろうと感ずることもあります。

これまでの議論で、アウトバウンドに関して日本の若者達に共通しているのは、皆さん海外に興味があるということです。興味そのものがなくなっているという話は、本日一回も出てきていない。でも、海外には行かない、行けない。その理由の一つは、先ほどご指摘があったように、経済的な問題かもしれません。でも、旅行に出かけている日本以外のアジア諸国の若者達は、必ずしも富裕層の子ばかりではない。働いてお金を貯めて、ブランド物でなく、海外旅行にお金を使っているのではないのでしょうか。もちろんブランド物のバッグも買えて、豊かな生活もでき、旅行もできればいいですが、ブランド物は買えなくても旅行に行ける国の人たちがいる、行っている日本人がいるのは、それまでのベクトルの向け方、オリエンテーションの仕方なのかも、そういったことも考えてみる必要があると思います。

それから、教育の話が随分出てきました。単に言葉の話だけでなく、やはりコミュニケーションだとか、世界に目を向けるような教育、この辺は最終的には学校の先生の問題でもあるかもしれません。例えば今、

ツーリズム・マーケティング研究所
取締役マーケティング事業部長

高松 正人



中学や高校の先生方がどれだけご自身の体験を生徒に話しているか。

もう一つ、皆さんのお話で随分出てきたのが、何かをするための旅行、旅行の目的ということです。何かをするための旅行が、幾つかのパッケージとして具体的に用意され、選択できるようになってくると、若者達はもう少し海外に向けて動機づけされるのでは、というご提案もありました。

今日のパネルディスカッションで指摘された課題を、具体的にどう解決していけばいいかを考えながら、民と官がコーディネーションをうまくとって進めていくことで、若者達のインバウンドも、アウトバウンドもまだまだ発展させられる可能性は十分あるのではないのでしょうか。また、今後日本が国際社会の中で生きていく、活躍していく、貢献していくため、若者達の交流を大きく伸ばしていくのは、彼らの先に立つ、我々の世代の責任でもあるのではと考えます。

積極的なパネルの皆さんのご発言に本当に助けられました。ありがとうございました。また、コメントーターの皆さんからも、様々な形で進行にご協力を賜りましたことを、改めて御礼申し上げたいと思います。

以上をもちまして、パネルディスカッションを終了させて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

総括

国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP） ツーリズムユニットチーフ
山川 隆司



私の最後の言葉は、とにかく主催者側の方々に感謝を申し上げるということですが、その前に、今回のセミナーは非常に有益であったということ、非常に興味深いものでありました。また非常に生産性の高いものでありましたし、まさに非常に数多くのことをこのユースツーリズム、青少年のツーリズムから学ぶことができました。

最初に、青少年ツーリズムを理解するのは非常に難しいということを理解しました。といいますのも、いろいろなファクターがかかっています。例えばデータが不足しているとか、あるいは情報が十分でないとか、あるいは研究がまだ十分でないといったようなこと。

また、2番目に、恐らく皆さん方、一致されると思いますが、こういった重要なエリア、まさに青少年ツーリズムに関しましてはもっと理解し、もっと焦点を当てるべきであると。そしてまた、共通の理解として、青少年ツーリズムというのは、その地域の社会に対してもメリットがあるし、また国際的なつながりを強化する上でも役に立つ、また国際的な理解を深める上でも有益なツールであるということを理解すべきだと思います。もちろん、数多くの問題も確認されました。そしてまた、数多くの非常によい提言といったこともお話ができました。

しかしながら、一番重要な、あるいは有益な提言というのは、前田先生がお話しになったところでメカニズムであるということでした。すなわち、体系的にこの青少年ツーリズムを促進して、進めていく上でのメカニズムが必要だということ。これは非常に重要だと思いました。また、それ以外のスピーカーの方々もおっしゃいましたけれども、パートナーシップが非常に重要であると。これは産業界だけではなくて、やはり提携あるいは協力、あるいはかなり集中的なコンサ

ルテーション、パートナーシップ、これは民間そして公的な部門、そしてまたコミュニティーとの間のそういった関係が重要だというお話ができました。すなわち、やはりコンセンサスというのが重要であると。

では、すべての主催者に対して感謝申し上げたいと思います。一番初めに、UNWTOアジア太平洋センターに対しまして心より感謝を申し上げ、拍手でその謝意をあらわしたいと思います。

それから、もちろん数多くの皆様方に、今回のこのセミナーの成功にかかわっていただきました。さまざまな世界各地からもご参加いただきましたし、また日本からもご参加をいただいております学生さんも含めて、そしてまた数多くのこちらに座っていますスタッフの方々ですね、いろいろな技術的な問題に対しても対応してくださいましたし、また同時通訳のほうにも感謝申し上げたいと思います。すばらしい仕事をしていただいたと思います。ありがとうございました。

ということで、UNWTO、そしてそれ以外のすべての関係団体の皆様、そして人々に対しまして、心より感謝申し上げるとともに、またさらなる今後の繁栄を心よりお祈りしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

学生ガイド・ツアー：歴史文化都市・堺のまち歩き観光について

阪南大学教授 前田 弘

本国際セミナーのエクスカージョンとして企画された学生ガイド・ツアーは、セミナー参加者（講演者・APU パネリスト他）が実際のツアーに参加して、参加者同士や地域の人びとと交流しながら、今後の青少年ツーリズムの内容や方法について考えるものである。このツアーは、セミナーのパネリストである学生自身が企画、ガイドするユニークなスタイルとなった。また、その企画・運営には、ツアー地である堺市の観光担当行政、観光ボランティア、寺院、刃物・線香などの地場産業に従事する住民の方々の全面的な協力と支援を受けている。

この学生ガイド・ツアーの第一の意義は、ツアー自体が本セミナー・テーマの青少年ツーリズム交流の「実践の場」となったことである。ツアーでは、パネリストやオーディエンスとして参加した日本人学生たちがホスト役となってコミュニケーションを深められたので、パネルディスカッションだけでは得られない楽しさと親しみのあふれる交流となった。第二の意義は、地域社会との交流が図られたことである。このツアーは、ツアー地の堺市住民との「ふれあい」をベースにしたコミュニティ・ツーリズムである。そのため、ホストとゲスト間の交流以上に、参加者の地域社会に対する関心が深まり、心に残るツアー体験となった。また、日頃、一般ツアー客を相手にしている地元住民も、観光や文化交流を学ぶ若い世代との交流に大変感動し、青少年ツーリズム交流に対して強い関心と期待を抱くようになっている。

以上のように、参加学生と地域社会とのパートナーシップによって実施できた学生ガイド・ツアーは、交流の場だけではなく、青少年ツーリズム交流のいわば「モデルケース」としても機能したといえる。今後も、青少年ツーリズム交流をテーマとして、こ

のような多様な内容を伴った国際セミナーの展開を望みたい。

Programme

| | | |
|--------------------|---|------|
| 09 : 30 | Opening Addresses | P.71 |
| Mr. Masato Kakami | Director-General, Kinki District Transport Bureau, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, Japan | |
| Mr. Yuichiro Honda | Chief of the UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific | |
| Mr. Toru Hashimoto | Governor, Osaka Prefecture (Message Read by <small>Director General, the Department of Dynamic Osaka Promotion, Osaka Prefectural Government</small> Hiroshi Masaki) | |
| 10 : 00 | Keynote Presentation The Outlook of Current Trend of the Tourism Exchange for Young Generation in Asia and the Pacific | P.77 |
| Mr. Ryuji Yamakawa | Chief of Tourism Unit, UNESCAP | |
| 10 : 25 | Presentation Youth Tourism Exchanges: Experiences from Hong Kong | P.84 |
| Dr. Kaye Chon | Chair Professor & Director, School of Hotel and Tourism Management The Hong Kong Polytechnic University | |
| 10 : 50 | Presentation Promotion of Korea/Japan, Tourism Exchange for Young Generation | P.89 |
| Dr. Sang Taek Lim | Chairman of the Board, Asia Pacific Tourism Association (APTA) Professor, School of International Tourism & Director, Tourism Research Institute, Dong-A University | |
| 11 : 15 | Coffee break | |
| 11 : 30 | Presentation The Promotion of Thailand/Japan Tourism Exchange for Young Generation: Prospects and Issues | P.92 |
| Mr. Suwat Jutakorn | Director, Marketing Database Group, Policy and Planning Department, Tourism Authority of Thailand | |
| 11 : 55 | Presentation Australia Japan Tourism Exchange for Young People | P.97 |
| Dr. Malcolm Cooper | Professor & Vice-President, APU | |
| 12 : 20 | Lunch Break | |

| | | |
|-----------|---|-------|
| 1 3 : 2 0 | Presentation The Trend and Style of Tourism with Japanese Youth for Mutual Understandings of Asia and the Pacific Countries | P.100 |
| | Mr. Hiroshi Maeda Professor, HANNAN University | |
| 1 3 : 4 5 | Presentation The Current Situation of Educational Tourism Exchange for Accepting Foreign Youth to Japan | P.105 |
| | Mr. Masafumi Yuasa Educational Exchange Coordinator, Osaka Prefectural Government | |
| 1 4 : 1 0 | Presentation The Current Trend and the Issues of Tourism for Japanese Youth from the Viewpoint of the Travel Industry | P.109 |
| | Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co. | |
| 1 4 : 3 5 | Coffee Break | |
| 1 4 : 5 0 | Panel Discussion and Q & A What are the Optimum Conditions and Arrangements for Supporting the Tourism Exchange of Youth in Asia and the Pacific | P.119 |
| | Moderator: Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co. | |
| | Panelists: 4 students from HANNAN Univ. 4 students from APU | |
| | Commentators: Presenters | |
| 1 7 : 3 0 | Conclusion | P.140 |
| | Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co. | |
| 1 7 : 4 5 | Closing Remarks | P.141 |
| | Mr. Ryuji Yamakawa Chief of Tourism Unit, UNESCAP | |
| 1 8 : 0 0 | Closing of Seminar | |
| 1 8 : 1 0 | Reception | |
| 1 9 : 3 0 | Closing | |
| 1 1 th | Student-Guided Tour | P.142 |

Opening Addresses

Kinki District Transport Bureau, Ministry of Land,
Infrastructure, Transport and Tourism, Japan

UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific

Osaka Prefectural Government

Opening Address

Director-General, Kinki District Transport Bureau **Masato Kakami**



Thank you for the introduction. Distinguished guests, ladies and gentlemen, on behalf of the Kinki District Transport Bureau it is my honor and pleasure to welcome you to Osaka for this opening ceremony of the UNWTO Seminar on Asia-Pacific Youth Tourism Exchange.

It is with deep appreciation that I see so many of you here today to participate in this Seminar.

The UNWTO Seminar on Asia-Pacific Youth Tourism Exchange is designed with the purpose of exchanging our views, deepening our awareness, and coming to a common understanding on the ideals of tourism exchange for young people, who are richly receptive and keenly sensitive.

Recent trends in international travel show that more young people from other countries are visiting Japan. There seems to be a rising interest in getting to know our country. On the other hand, the number of Japanese youth going overseas is on the decline, and we do not know exactly why. The expansion of youth tourism exchange ideally goes beyond a simple numerical increase in the number of visitors going both ways, but also helps to facilitate permanent mutual international understanding and strengthen friendships, and ultimately contributes to world peace. Since not many seminars have had themes targeting youth, it is our understanding that this Seminar is a timely and meaningful one, as it takes the standpoint of young people who will carry our

future on their shoulders, discussing the present situation and needs in an effort to expand youth tourism exchange.

Needless to say, this seminar under this theme has great significance in our nation's policy toward becoming a tourism-oriented nation.

The "Tourism Nation" policy is an important government policy aimed at a more attractive and beautiful form of development for Japan in the 21st century. In the interest of its promotion, the Cabinet decided on a "Basic Plan for the Promotion of a Tourism Nation" in June 2007, set forth concrete targets and measures such as having 10 million foreign visitors come to Japan and having 20 million Japanese people go on overseas travel in 2010. Various efforts are underway to meet these targets. Furthermore, Japan Tourism Agency was established within the Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism (MLIT) in October of this year for the purpose of more strenuous promotion of these measures.

It is said that "Tourism is the passport to peace." The expansion of youth tourism exchange is a true embodiment of that saying. We believe that this will contribute greatly to making our national goal of Tourism Nation a reality.

It is my fervent hope that this Seminar will serve as a catalyst for more active mutual exchange by young people, and that it will be an important step toward the manifestation of a Tourism Nation.

Last but not least I would like to express my heartfelt thanks to the hosts and sponsors of this Symposium: Asia-Pacific Tourism Exchange Center (APTEC), Osaka Prefecture, Japan National Tourism Organization (JNTO), the United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP), Ritsumeikan Asia Pacific University (APU), Hannan University, and all the individuals who gave their support.

Thank you very much.

Opening Address

Chief of the UNWTO Regional Support Office
for Asia and the Pacific

Yuichiro Honda



Good morning, ladies and gentlemen.

I am Yuichiro Honda, the Chief of the UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific.

I would like to thank the Director-General Kakami from the Kinki District Transport Bureau, and Director General Masaki from the Department of Dynamic Osaka Promotion, Osaka Prefectural Government and everyone here today for taking the time to be here.

It is obviously very difficult to numerically quantify youth tourism in Japan, but it is an extremely interest theme to us at the UNWTO because of the future connotations.

It was reported from a 2005 UNWTO study that youth tourism is growing strongly all around the world.

Which raises the question with us of how youth tourism in Japan has tended to be in these recent years. I have heard some say that, setting aside educational trips and school excursions, the youth have, as was common before, stopped going abroad on their own. Japanese youth boldly began to journey outside of Japan in the 1970s, but today, this may have shifted greatly to other means of travel, such as group tours, including college graduation trips, and packaged tours.

Many thanks to the efforts of national and local governments and people from the tourism

industry, tourism and exchange between Japan and nearby countries is active. Today, we will be focusing on youth tourism and exchange in the Asian Pacific and the world as a whole, and hearing from the United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP), as well as some very noted experts from Hong Kong, Korea and Thailand. Also, for today's seminar, we are fortunate to have the cooperation and participation of professors and foreign-exchange students from Ritsumeikan Asia Pacific University, which works closely with the UNWTO in studying tourism, as well as professors and students majoring in tourism from Hannan University here in the Kansai.

With everyone's efforts, we will try to ascertain the state of youth tourism and, from there, discuss what should be done to promote youth tourism on the national and regional levels, as well as the value and future of youth tourism itself.

I hope that today's presentations and panel discussion may offer some hints on promoting youth tourism from abroad in Japan and the Kansai, encourage Japan's youth to travel to countries in the Asian Pacific and elsewhere around the world, and deepen our understanding of one another through tourism and exchange.

I would like to end with that. Thank you.

Opening Address

Governor, Osaka Prefecture **Toru Hashimoto**

(Message Read by

Director General, the Department
of Dynamic Osaka Promotion,
Osaka Prefectural Government

Hiroshi Masaki)



Distinguished guests, ladies and gentlemen, it is my honor to extend my greetings to you on behalf of the hosting municipality.

Our deep relationship with the UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific goes back to 1995 when Osaka Prefecture succeeded in inviting this tourism promotion organization to Rinku Town adjacent to Kansai International Airport. I am most happy for the success of today's "UNWTO Seminar on Asia-Pacific Youth Tourism Exchange in Osaka."

In the context of ever increasing internationalization of the world, I feel we need to have our young people deepen mutual understanding with their counterparts in other nations, through exchange at an early period with youth around the world, in order to promote the internationalization of Japan.

I am also convinced that exchange through youth tourism, which is generally referred to as educational travel, is not only effective for cultivating a cultural sensitivity in our youths but will also contribute greatly to world peace in the future.

I anticipate this Seminar to be a meaningful one, as it has a full program with a broad perspective for the Asia Pacific region, such as "Identifying the present realities of youth tourism," "Pursuing the kinds of tourism exchange for mutual understanding sought by young people," and "Preparing the hosting capabilities for the

promotion of exchange."

In Osaka Prefecture, we are actively committed to youth tourism exchange in the East Asian region. In addition to our prefecture's own unique exchange programs, we utilize the Cabinet Office's "International Youth Exchange" and the Foreign Ministry's "Japan - East Asia Network of Exchange for Students and Youths Program (JENESYS Program)."

The most difficult on-site aspect of youth exchange is the matching of schools.

In Osaka Prefecture, we have an Educational Exchange Coordinator in the Osaka Convention & Tourism Bureau who helps to make swift matches of Osaka schools with schools in other parts of East Asia, taking into account the strong points and unique efforts being made at each school, in response to the various requests made by East Asian schools including sports exchange and cultural exchange.

As a result of an accumulation of fine-tuned, grass-roots level exchange between individual schools, we have succeeded in the exchange of more than 11,000 students to date. We have received positive feedback from many of the participating schools who have expressed their satisfaction.

Our educational exchange coordinator will be lecturing today, and I invite you all to enjoy the presentation.

In closing I would like to express my hope that the results of active networking and exchange of views at this meeting will be communicated to the world. May all of the participants have a meaningful time at this Seminar.

Keynote Presentation

“The Outlook of Current Trend of
the Tourism Exchange for Young
Generation in Asia and the Pacific”

Ryuji Yamakawa

Chief of Tourism Unit, United Nations Economic and
Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP)

Keynote Presentation

“The Outlook of Current Trend of the Tourism Exchange for Young Generation in Asia and the Pacific”

Chief of Tourism Unit, United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP)

Ryuji Yamakawa



I am going to speak about the theme from a broader perspective by adding in promotion of youth tourism in the Asian Pacific Region. We haven't numbers that paint a clear picture of youth tourism and there are not any statistical analyses, therefore you have to talk about trends.

I would like to start by first defining what youth tourism is and then talk about the present state and future outlook of youth tourism in the Asian Pacific, and UNESCAP. My talk will also include a background explanation that looks at youth tourism from socio-economic viewpoints. I will also touch upon a few topics I recommend that should be considered in promoting youth tourism.

The World Youth Student and Educational Travel Confederation (WYSETC) defines youth tourism as persons ages 16 through 29 traveling alone for a period of less than one year. Anything over one year does not qualify as youth tourism. It can be best characterized as independent travel without one's parents and offering opportunities of study abroad.

Youth tourism is a very important market, but neither governments nor the private sector fully understand this. The World Tourism Organization (UNWTO) estimated that youth account for more than 20% of all international tourists, with more than 160 million youth traveling abroad a year and creating revenues in excess of 136 billion dollars. So, what is the motivation that inspires these 160 million youth to travel abroad? 81% want to expand their knowledge by exploring

other cultures, making friends and interacting with people from other places, and experiencing daily life in another place. Also, young people tend to stay longer abroad. And, they commonly use service by paying cash. Though the expenditures one makes are not that big, when the total amount is added together, it may possibly be a serious contribution to the local economy.

Young people go to various places including places not on tourist maps. For example, in Thailand, youth tourism registers in places outside of popular destinations like Bangkok, Chiang Mai and Phuket. Because they travel to Koh Chang, Koh Samui and Koh Phi Phi, places not in the mainstream of tourism benefit from their coming. Young people want direct contact with people from other worlds and are adamant about traveling alone in order to encounter and interact socially with other cultures.

Those providing services to these young people do not need to invest large amounts of capital as a business. Even with lodgings, young people do not need five-star hotels. Many young people stay at reasonably priced hotels, youth hostels and guesthouses. The capital investment for starting up this grade of lodging is far less than that needed to build a luxury hotel. Moreover, traveling youths play a very important role in society. These young people are greatly influenced by their experiences. They increase their knowledge of things and learn about other cultures. After returning home from their travels, they feel more

a part of the global community and, by expanding their horizons, they become more open-hearted, confident and considerate in their contacts with others.

According to reports by UNWTO and WYSETC, 80% of the young people who travel gathered their travel information over the internet. It was also learned that 50% collected information and booked reservations over the internet using new technologies. For private businesses, the issue is how to come in contact with this market. And, it may be necessary to offer tourism products and programs online. That kind of investment is for the future. Many young people who have had positive experiences become repeaters and return to the same destination, therefore investment adds to one's future.

The Asia-Pacific Region defined by UNESCAP reaches as far as Turkey to the west, Russia to the north and Australia to the south. It also includes the island nations of the Pacific Ocean. The region is densely populated and consists of 53 countries and 9 territories of varying degrees of development. It is where you find dynamic regional economies and the engine for global economic stability. The powerhouses are Japan and Korea. Australia and New Zealand are industrially advanced nations with high personal incomes. Playing the role of economic engine are China and India with their enormous populations. Then, there are the ASEAN countries whose economies continue to grow steadfast.

In contrast to that, there are the so-called 14 least developed countries. As defined by the United Nations, they are Cambodia, Myanmar, Lao PDR and Nepal. And, there are 17 island nations, but places like Fiji and Samoa are disadvantaged as a market because their remote locations

virtually prohibit development. Moreover, 800 million people live in this area and 67% of the world's population that lives below the poverty line are here. By "poverty line," it is meant earning less than one dollar a day.

I believe that the Asia-Pacific Region has the power to change the world. If the Asia-Pacific economies can continue to flourish and help to stabilize the global economy, it would be a great contribution to civilization. On the other hand, should India's or China's economy stop growing, it could spawn a global economic crisis. For those reasons, the Asia-Pacific Region can be considered capable of changing the world.

I would like to now switch my talk to tourism in the Asia-Pacific. Tourism has risen rapidly in the last few years. And, the level of growth has surpassed other regions. And, there is enormous hidden potential for even further growth in the future. What this says is that the regional economy is very strong. Moreover, transportation and the opening up of air routes are progressing. And, the number of low cost travel companies is increasing. Tourism is a priority issue in many countries and territories. They are making various efforts to smooth the visa process in the name of development. Furthermore, cooperation is strong amongst ASEAN countries.

Let me now introduce the strong possibilities of future growth in youth tourism. New air routes have opened up and low cost airlines are on the rise. More importantly, this region has scenic natural environments and numerous cultural heritages as attractions. There are the unique cultures and customs of some 54 countries. And, hospitality is a tradition and, with the beautiful outdoors, all of these countries have the ground for drawing young tourists. Turning to the market,

the countries that are sending youth tourists are usually countries with economic power. Moreover, student tours are increasing today. This is so in Australia, New Zealand, Japan, Thailand, Malaysia, Singapore and Korea. Student tours are important today. For example, in Japan, some universities have more than 100 extracurricular activities clubs. And, tours originate on campus. Just 20 or 30 years ago, tours were limited to Japan, but nowadays, the tennis team may travel to Thailand for activities. Thailand has tennis and golf facilities, so they can be used. Therefore, in these kinds of fields, the possibilities of future exchange can be considered high.

The working holiday is another important motivation for travel abroad. Countries like Australia, New Zealand, Korea and Japan, where young people tend to stay longer in particular, offer this kind of program. Sports and cultural exchange events have great potential as well. The 24th Universiade is the second biggest sporting event after the Olympics. It was held last year in Bangkok with the participation of 9,000 athletes from 152 countries. Sporting and cultural events have a very big impact. I want to move onto tourism in Japan, but this is important. Please take a look at China in this chart.

Domestic Tourism

Domestic tourism by young people contributes to wealth redistribution and economic development within a country.

Comparing international and domestic tourism statistics
In selected Asian and Pacific countries

| | Reference year | International tourist arrivals (million) | Estimated domestic tourists (million) | Ratio of international to domestic |
|-----------|----------------|--|---------------------------------------|------------------------------------|
| China | 2005 | 46.8 | 1,212.0 | 1 : 26 |
| India | 2003 | 2.8 | 309.0 | 1 : 110 |
| Indonesia | 2005 | 5.0 | 31.3 | 1 : 6 |
| Thailand | 2005 | 11.6 | 79.5 | 1 : 7 |
| Viet Nam | 2003 | 2.4 | 13.0 | 1 : 5 |

On the right side are the ratio of international travel to domestic. Domestic travel is 26 times bigger. It is high in India as well, at 110 times. This is the number of tourists who arrive for domestic travel. According to a UNWTO study, 20% of that falls within the category of youth tourism. Therefore, I think that it is a good idea to focus more on domestic tourism that young people partake in. This sector is also playing a major role in driving local economies. And, we should awaken ourselves to that. One can learn more about the cultures and customs of one's own country. It is known that, compared to travel abroad, domestic travel is rather stable and not readily shaken by economic gyrations.

Next, let me talk about what should be done to promote tourism more with young people.

To begin with, youth tourism effectively has the power to advance targets set by the United Nations, e.g., socio-economic development, the poverty reduction, and environmental conservation. In economic terms, international travel is a very important source for acquiring foreign currency. This data is from Laos.

Tourism in Lao People's Democratic Republic
Revenue and rank of various Lao industries
(revenue in \$US million)

| | 2001 | | 2002 | | 2003 | | 2004 | | 2005 | |
|-----------------------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|---------|------|
| | Revenue | Rank | Revenue | Rank | Revenue | Rank | Revenue | Rank | Revenue | Rank |
| Tourism | 113.8 | 1 | 113.4 | 1 | 87.3 | 2 | 118.9 | 1 | 146.7 | 1 |
| Garments | 100.1 | 2 | 99.9 | 2 | 87.1 | 3 | 99.1 | 2 | 107.5 | 3 |
| Electricity | 91.3 | 3 | 92.7 | 3 | 97.3 | 1 | 86.2 | 3 | 94.6 | 4 |
| Wood Products | 80.2 | 4 | 77.8 | 4 | 69.9 | 4 | 72.4 | 4 | 74.0 | 5 |
| Coffee | 15.3 | 5 | 9.8 | 7 | 10.9 | 9 | 13.0 | 8 | 9.5 | 8 |
| Agricultural Products | 5.7 | 6 | 25.6 | 5 | 11.1 | 8 | 20.5 | 6 | 26.6 | 6 |
| Minerals | 4.9 | 7 | 3.9 | 8 | 46.5 | 5 | 67.4 | 5 | 128.3 | 2 |
| Handicrafts | 3.8 | 8 | 2.7 | 9 | 12.4 | 7 | 1.9 | 9 | 2.7 | 9 |
| Other Industries | - | - | 19.9 | 6 | 17.1 | 6 | 13.4 | 7 | 11.9 | 7 |

Lao People's Democratic Republic is one of the least developed nations, but tourism is the biggest industry for earning foreign currency. They have electric power, but it is purchased from Thailand.

There is tourism, and this is what they will be dependent on if you think about the future.

Many of the least developed nations benefit from tourism, some examples of which are given here. And, tourism can contribute to their social development. The tourism sector's contribution to the economy is in the form of 31% of their GDP. Moreover, it is an important source for gaining foreign currency and a source of tax revenue. Furthermore, governments are trying to improve education and healthcare by investing financial resources in tourism. By doing this, the Maldives achieved a 100% literacy rate, which is great social progress. And, the infantile mortality rate went from 121 deaths per 1,000 in 1977 to 38 deaths per 1,000 in 2004. And, lifespans have gotten longer from 47 to 67 years. All of this was made possible by a booming tourism industry. Without it, it is unthinkable that any of this would have been achieved.

An important issue of the Asia-Pacific Region is poverty in diverse senses of the word. The United Nations announced its Millennium Declaration, in which they are committed to halving the number of people in member nations that earn less than one dollar a day by the year 2015. If you think about the war on poverty and the relations therewith of the tourism industry, you can see the strong potential of uniting forces in the name of socio-economic development.

Moreover, buying goods and services from the local area can contribute directly to the eradication of poverty. One thing I am hoping for is that, when thinking about where to go, how to get there or what to buy, you will consider how it might benefit that country before making your decision. This should also raise awareness of the environment and cultural heritages. It will inspire people to care about local cultures and

the natural environment. When young travelers regard local cultures with respect and love Mother Nature, it works towards protecting those cultures and environments. I am hoping for that kind of contribution.

I personally believe that young people can help build world peace, and, in that sense, tourism helps to deepen understanding between differing cultures and countries. The result would be peace all around the world. We need to recognize that, by interacting with locals and learning about each other's cultures, young people are promoting peace and helping to create an environment of peace around the entire world.

Some countries are implementing programs in youth tourism as very important initiatives. Australia has a working holiday program. Japan and Singapore do as well. India is looking into youth tourism packages as a policy. There are plenty in their 9th 5-year plan. The Philippines developed a youth tourism policy and are working on marketing for it. Thailand is putting efforts into promoting sporting and cultural events.

I will now talk about student exchange via unity and cooperation within a single geographic area. It is an attempt at networking. In 1997, UNESCAP created this to develop human resources for tourism in the Asia-Pacific Region. Called "APETIT," it has 252 member organizations from 45 countries. And, there is a student exchange program that involves Australia, Malaysia, Hong Kong, Macao, Korea, Thailand and Iran. As for the number of organizations by country, India has 38 and Vietnam 39, while, from Japan, there are Rikkyo University, Ritsumeikan University, Saitama University and the JAL Foundation. They offer great opportunities for obtaining extremely useful information, data and networking, therefore

please visit their website. APETIT's network promotes and expands this kind of cooperation, and they are developing various things as educational targets. By doing that, their aim is to further share useful information.

I would now like to think about what is important towards promoting youth tourism and what are the issues and difficulties involved with that.

A major issue is that there is not any statistical data. In most cases, there is hardly any statistical data on market scale, impacts, or profiles and ages of young people. And, there is very little data on how much money they spend.

The second issue is related to the first, i.e., because there is no data, youth tourism is not a priority with governments and very low on the priority list as well. And, the industrial world thinks of young people as not spending much money. Accordingly, both governments and private businesses seem to know little about this.

The third issue is that a concrete policy is needed from a socio-economic standpoint. The only way to promote youth tourism is through harmony. Rather than being dealt with singly, tourism needs to be coordinated with education and culture policies, youth programs and the like, as well as measures for the immigration issue. Any sort of promotion of youth tourism must begin with a coordinated policy. A number of countries are simplifying their visa issuances, but unfortunately, it is not that easy to get a visa in this region. That is one of the impediments to development.

I would now like to offer some recommendations as to what should be done. More studies are needed. Data needs to be collected on diverse fronts, e.g., how much money are people spending, what are their travel patterns, and what are they

seeking. The governmental tourism organization in any country needs to identify the volume of youth tourism and categorize the numbers by age, etc. Then, they need to do analytical studies to determine the socio-cultural impacts.

Another issue is personal awareness. Youth tourism benefits the local community. It also contributes to culture and international understanding. People need to become aware of the fact that buying local goods and utilizing local services contributes to the local economy. In that sense, public information activities are important. Action is needed so that people recognize that youth tourism plays an extremely important role in overall socio-economic development.

Moreover, youth tourism should be outright incorporated in a country's master plan for tourism. There are various master plans from diverse countries, but no matter which you look at, none addresses youth tourism. An integrated policy is needed. Coordination and collaboration between the various governmental agencies are important. Cultural and sporting exchanges are conducted between sister-cities. And, this is also seen between countries and regions.

I mentioned earlier that many people get their information from the internet before taking trips. Efforts in that regard are needed as well. Europe offers a number of discount schemes. They are targeting young tourists. That makes inexpensive hotels and programs like working holidays necessary to accommodate the travelers.

Youth tourism can bring good things to our way of life and the world; these kids can contribute to world peace and discover a more beautiful planet. I hope that more people travel more, and continue taking trips where they can meet and learn from others and, in the process, discover themselves.

Presentations

“Youth Tourism Exchanges: Experiences from Hong Kong”

Chair Professor and Director, School of Hotel & Tourism Management
The Hong Kong Polytechnic University

Kaye Chon



I would like to speak today on the educational aspect, that is, how to stimulate youth tourism.

As a representative of our School of Hotel & Tourism Management I feel our students need to acquire a balance of skills. These can be divided into three categories: First, they need professional skills and competency. Upon graduation, students must perform in management roles in all aspects, including marketing, finance, and human resources. In addition, students need specialized skills, such as tourism management, hotel, hospitality, et cetera. Then they need soft skills, that is, people skills and communication skills. We also have our students actually experience the industry through internship programs. It is also important to acquire international and multicultural skills. The skills in these three areas are extremely important for hotel and tourism management.

How, then, can students go about acquiring international and multicultural skills? There are three approaches. The first is to study in an international and multicultural environment. Learning in a multicultural, international environment for three or four years allows students to acquire an international outlook naturally. For the second point, it is effective to gain opportunities for international travel. This is the experience of going overseas and working in an environment that is multicultural, instead of staying within your own society. Tourism is necessary for youth, and traveling for the purpose of tourism, as well as traveling for the purpose of work, are also necessary.

I feel people in Hong Kong have a variety of opportunities, as well as interest. For instance, as students are experienced in international travel and are open-minded, there is no xenophobia among our students. Since Hong Kong is an international city, the percentage of the population with passports is said to be the largest in the world. When a baby is born in Hong Kong, the first thing parents do is get him or her a passport. Hong Kong is a small territory, and its people must always be traveling, and they go overseas. About 70 to 80 percent of the population have passports, and so I would say they can gain international experiences.

Another major advantage is that people can speak English. Also, Hong Kong provides a variety of good opportunities for foreign students. That is, the education is in English, so they can study in Hong Kong easily. Also, the general image of Hong Kong as a travel destination is favorable, safe and lively. However, there are limits and threats as well. The most major threat is Hong Kong's educational system. It is not flexible, and does not allow international students to be admitted for full time study. The reason is that there are only 8 universities for the population of 7 million, which limits the number of students who can be enrolled. I hear that Japan has 220 universities. By comparison, Hong Kong is extremely limited, and admission of foreign students is capped at 4 to 8 percent of the total population. At universities, students from foreign countries are capped at 4 percent of the total

student numbers. For individual faculties, the cap is 8 percent. These conditions are in place because certain departments and faculties may not wish to accept foreign students. At present, we get 35,000+ applicants for 220 places in our School, which means only 1 applicant out of every 160 can be accepted.

A good way of solving this problem is student exchange. Foreign countries can accept students from Hong Kong and exchange students at the university level. Students from Hong Kong can then study overseas and foreign students can have the opportunity to come to Hong Kong. Students who remain in Hong Kong can also have the opportunity to study with foreign students. We have thought of many different approaches, one of which is student exchange as a means for international education and accepting foreign students.

The second method is non-local industry placement for internships. All of our students are required to go on internships during summer, and some do their internships overseas instead of in Hong Kong. The third way is to organize study trips in Hong Kong for foreign students. The fourth is to bring students to Hong Kong. We also have a system called "Professor For A Day Program." And finally, since many of our students use the Internet, we have a "Virtual Classroom" which gives students international experience. These programs of student exchange allow us to have youth exchange in the sense that our students can travel overseas and we can accept students into Hong Kong. We send our students to many countries including China, Canada, Australia, France, Finland, South Korea, Peru, Thailand, New Zealand, and the UK. Before this program was started seven years ago, none of our students

studied overseas. However, we are utilizing it actively now. In these 7 years, we have sent a total of 165 students overseas and accepted 172 students from foreign countries. Out of our partner countries, Finland is extremely popular, with as many as 55 students going there from Hong Kong and 44 coming from Finland. The Netherlands is also popular, followed by the UK and Australia.

Our partner institutions in Japan are Rikkyo University and Ritsumeikan Asia Pacific University (APU). We have accepted 6 students from APU and have sent 3 of ours there. Although some of our students can speak some Japanese, they cannot take courses taught in Japanese. This poses a language problem which precludes them from taking courses in Rikkyo University, where all the courses are taught in Japanese. This is why we send them to APU, where they can take courses taught in English.

One of the inconveniences of student exchange is the difference in academic calendars. Hong Kong operates on a two-semester system, with the first semester starting on September 1 and the second starting in mid-January. Therefore, for exchange to take place between universities, the programs need to be in the same season or the same semester system. Some universities start in August and end in July, which means there is nothing from December to April. Also, there must be compatibility of curriculum, and there is not always a good match.

The third issue is the perception of destinations. Is the place safe? How about the cost of living? Europe is a popular destination among students because of the opportunities it offers. Students like to travel throughout Europe for a month or two using the Europass. In this way, the perception of the place as a destination is very important.

The fourth point is the compatibility of the instructional language. Can students use English there? What is the common language? In Hong Kong, we speak both Chinese and English, so students can take courses taught in English. In Taiwan and China, students can take courses taught in Mandarin.

And then there is compatibility of culture. This is about whether or not someone feels comfortable in a different culture. And we also have overseas internship placement. This is one of the methods relating to the second point I just made, and it consists of forming partnerships with international corporations and sending our students into companies which have branches in Hong Kong, then having the company send our students overseas, stay during the summer, and allowing them to gain international experience. We consider these methods to be a form of youth tourism and international education. Students come into contact with various types of management within the tourism and hotel industries, and usually the training sessions are held in the summer, between June and August, although some programs last for a year, and we also have overseas study trips in the curriculum. In many of our courses, we have programs in which we send our students overseas (Dubai, Egypt, Hawaii, etc.) so that they can come to understand the concept of "tourism." A group of female students went to Cheju Island in South Korea and took a course in convention management, in which about 94 students participated. The group went to convention centers on Cheju Island and in cities such as Pusan and Seoul. Our airport management course, which includes such programs as management of airports and airlines, which offer employment opportunities in Hong Kong, is designed to let students learn

about best practices.

We also conduct cultural tourism. Since overseas travel is expensive, the university bears about 60 percent of the cost and the student pays for 40 percent.

We have another, very interesting government-assisted program. The Hong Kong Tourism Board (HKTB) encourages youth tourism so that young people in many different countries will come to understand Hong Kong. A few years ago, the HKTB held an online essay contest at its website, inviting students in South Korea to submit essays on their image of Hong Kong. A total of 50 students were selected for a prize - a free trip to Hong Kong, with educational and cultural components. The students visited our university for a day, during which one Hong Kong PolyU student was paired with each Korean student. We feel it was an extremely effective exchange. A similar program was arranged by HKTB for Japanese students, where 60 in 2006 and 62 in 2007 came to Hong Kong from Trajal Hospitality & Tourism College, a private college in Tokyo. It was a program for learning about Hong Kong tourism and culture, and ran for 4 or 5 days in total, during which they spent a day at our university. We believe these approaches are very effective.

Another effort that is presently still at an experimental stage is a field trip for students at overseas universities. In this Summer School program, universities in the USA, South Korea, and Japan design credit bearing courses in Hong Kong, and sends 30 or 40 students over to spend 2 weeks in Hong Kong. Hong Kong PolyU faculty members also taught for this course.

Another very interesting program we operate is the "Professor For A Day Program." In order to

promote the international aspect in our education, we invite high-ranking government officials and overseas persons to be a "Professor For A Day." We opted for this Professor For A Day because "Guest Speakers" are now very commonplace. Since our visitors are called "Professor For A Day" and are presented with a commemorative plaque, the program is considered to be very high class and we hear that our Professors For A Day are very proud of their role. This program is a huge success and we have had Jackie Chan, Hong Kong's Ambassador of Tourism, as one of our Professors For A Day. His lecture was so popular that there was a waiting list and we had to issue coupons. Fans from Japan and South Korea also came to hear him speak. Jackie Chan is now more than a Professor For A Day - we have asked him to be an Honorary Professor of Hotel & Tourism Management. This role is a non-paying one and entails lectures only, and he agreed to conduct lectures and cooperate with the University's fundraising efforts for scholarship purposes. We organized a fund raising gala dinner, titled "An Evening with Prof. Jackie Chan," at the InterContinental Hong Kong Hotel. He brought some of his own belongings to be sold at an auction at the event, and we were able to raise 3 million Hong Kong dollars extremely efficiently in one night. As I am constantly telling my students, I believe creativity is very important. If you are creative, you can do many different things and come up with new ideas. After this event, Jackie Chan invited me over to dinner at his home. When I presented him with business cards with "Honorary Professor Jackie Chan" printed on them, he was very pleased. We have printed more than 5,000 of these business cards to date, and we have asked him to hand them out to people

he meets. This also helps Hong Kong PolyU's marketing efforts. Although he only comes to the university once or twice a year, we have installed an office for our Honorary Professor. There are even people who come to see his office, and it is now a sightseeing spot. Some of these people are his fans, and we give them his business card as a souvenir.

Another episode relating to Jackie Chan is that two years ago he was conferred the title of UNWTO Tourism Ambassador Asia & The Pacific.

Last year, we thought of the idea of building a virtual environment as part of our effort to stimulate international youth tourism. Young people today study in ways that are completely different from when we were students. They have no desk; they lounge in their bed listening to their iPod, watching TV, and using their computer while they study. We created the virtual environment because we needed to think about how to communicate with young people. This virtual environment enables people to meet students from Japan, South Korea, the Netherlands, and Iceland for mutual exchange and even joint research tasks. At present, about 10 million participants are enjoying this virtual environment. It is predicted that all active internet users will have some type of virtual world, a Second Life, by 2011. Students from Hong Kong, the UK, Australia, and other countries created a resort island. It is an artificial island that does not actually exist, but students created a hotel and conference centre there, and made them a joint business. This includes, for instance, facilities planning and design, resort and spa management, meetings management, customer relations, and marketing. This kind of teaching is extremely effective. When I was in high school I had a pen pal with whom I corresponded, but

people now can carry on pen-pal-like activities utilizing the virtual world, and we can probably stimulate youth tourism in that sense also.

In order for a university to give international education and stimulate youth tourism, an international faculty is a must. At the School of Hotel & Tourism Management (SHTM), more than 60 of our faculty come from 18 different countries. It is a very international group and we consider ourselves to be very blessed.

We also conduct PR. Our school is ranked fourth in the world and first in the Asia Pacific in the Global Ranking of Tourism and Hospitality Schools. This was reported in the newspaper. We are often asked what we need to do to be No. 1, and to this I answer that we need a hotel owned by the school. Our virtual hotel is not an actual hotel, but we intend to use this as a base from which to further pursue our education. Presently under construction, it will be completed in 2010 and will stand next to our campus. It will have classrooms/labs and offices, and will have 278 deluxe rooms and 3 restaurants. There will also be a "House of Innovation" which will showcase new technologies. We will also create a spa operated by the very famous Banyan Tree. A conference center, ballroom, and Samsung Digital Lab are also being planned.

I believe that international youth tourism needs to be examined from broader, more international pedagogical perspectives which go beyond the standpoint of a government or university. The key, I believe, is "Creativity." In other words, we need to think outside the box, and start with virtual endeavors. In addition, we need to try out a variety of methods so that students can learn more about the international aspects. Our academic faculty also needs to be internationalized to more

fully realize internationalization objectives.

Thank you very much.

“Promotion of Korea/Japan, Tourism Exchange for Young Generation”

Chairman of the Board, Asia Pacific Tourism Association (APTA), Professor, School of International Tourism and Director of the Tourism Research Institute, Dong-A University

Sang Taek Lim



I did a study on youth tourism and exchange (YTE) that showed private sector exchanges and tourism are active, while government-sponsored tourism is not. I tried to figure out why that was so.

There is a definition of YTE in Korea, but the Korean government redefined it as youth between the ages of 15 and 24. The WTO's view is slightly different at ages 16 to 29.

Also, youth tourism and exchange is an extremely broad, inclusive and complicated field, as it is categorized into training, exchange and cultural activities. In other words, most of these activities qualify as so-called “youth tourism exchange,” while different categories of youth tourism and exchange exist. For example, for school-based exchanges, there are school/educational tours and field trips. When handled by international organizations, there are international exchange programs, training exchange programs and research programs conducted in cohort with industrial circles and universities. In the private sector, there are backpacking tours, language education tours and working holiday programs. For groups, there are family tours and small group tours.

I looked at youth tourism policy in Korea and Japan.

Korea has a Ministry of Health, Welfare and Family Affairs. And, there are two separate government-level committees. Through these offices, they are trying to promote a policy on

youth tourism. One of those committees is the Youth Protection Committee, while the other is the National Youth Committee. They are tasked with cultivating capabilities for an era of internationalization and information and supporting the youth to develop the welfare and their self-identity. To achieve these objectives, they have several important youth tourism and exchange programs. For example, there are feiendship meetings designed to enhance friendly relations with youth from Japan and China. One point I want to emphasize here is that these three countries, Japan, Korea and China, value this kind of program. They are very similar. The countries are so close geographically, it is like taking a domestic trip. And, our ways of thinking are very similar. So, there are commonalities between these three countries.

Precisely for that reason, going to Japan or China is popular amongst young people in Korea, indicating one of the major trends of the newer generation. Moreover, the Korean government sends young people all over the world every year in a “Korean Youth Go to World” program that lets them step into the world outside of Korea.

This is one case; Japanese high school students were invited to Korea. About 150 of them came and had fun exchanging cultures and cooking Korean food. It was reported on TV, but this story has two sides: one good and one bad.

The good side was well documented by the video file shown on the news, i.e., the efforts of the Korean and Japanese governments to promote

youth tourism and exchange were understood. The bad side was that the fact that it was reported on the news, meaning that the event was not frequently staged. In that sense, exchanges of this nature should be expanded.

The Japanese government is promoting some very interesting international programs. In August 2008, they staged the Asian Youth Exchange Program in Okinawa. The principle activities were studies and discussions of environmental problems and coral reefs, meeting with scientists, touring research and development facilities, and staying with Japanese families. The program was conducted in English and sponsored by the Cabinet Office. It is an excellent program. It would be good to promote exchanges like this in the future.

Looking at Korean data on youth tourism and exchange for 2007, the Korean government exchanged Memorandums of Understanding (MOU) with 27 countries in all. Japan was both welcomed and visited, and was involved in the most number of exchange activities with Korea that year. In 1987, MOUs were exchanged with the Japanese government in relation to youth tourism and exchange. Over these 20-plus years, only 1,300 persons have benefited from these exchanges, which is a very small number if you consider the relations between the two countries. This number is for government programs, but through the private sector, there have been several million. But, those officially invited and sent by governments are actually less than 1,300. The second highest reciprocating country is China, at 1,000 in all. This, too, is a disappointing number; these numbers need to be increased much, much more. Russia has a far lower figure. And, with France, not a single person was exchanged since MOU was exchanged.

The figure for India is also very low and there are still 22 other countries, but those numbers are very low as well.

Last year, more than 2 million Japanese came to Korea. As for their objectives, 40,000 were on study tours. I would like to see this number increase in the future.

I investigated where Korean students might go. The number one destination was China at 44%. Second place was Japan at 38%. These high numbers show how much interest there is in China and Japan. So, what about Japanese exchange students? Australia is the first destination, Korea the second and North America, which includes Canada, the third. There is some variation amongst Japanese exchange students in their selection of a destination country.

As for the reasons why Korean exchange students want to go to Japan, the number one response is to broaden one's own international perspective. The second reason is to study Japanese language. Studying Japanese language is a very popular fad in Korea. Studying Japanese is very important because, if one is fluent, he/she can find a better job, which guarantees them success in Korea.

Young students in Japan work hard at foreign languages, with English being the most pursued, followed by Japanese and Chinese.

As for the motivation for coming to Korea amongst Japanese exchange students, the number one reason is to broaden one's own international perspective. The second most responded reason is to learn about Korean culture. There are very many commonalities between Korea and Japan.

Japan and Korea share a number of historical and cultural things. For that reason, the youth is interested in studying Korean culture.

The Korean government asked questions to parents in both Korea and Japan about youth tourism and exchange. They wanted to know what their concerns were. Their biggest worry was the study schedule. In other words, if, for example, their children went to Korea or Japan, they may not attend lessons. That certainly would be a problem. If wanting to apply to college in Korea or Japan, it is very competitive. You cannot get into a good college unless you study hard for 12 or more years. So, parents are worried if their kids goof around even for one day. That is what parents are most apprehensive about when it comes to sending their children out of the country.

Their second biggest concern is the language barrier. After that comes the cost; they are worried about how much money it will take. With regard to safety and environment, there were some pretty interesting results. Korean parents are more concerned about the environment than Japanese parents. This is just my take on it, but Japanese society is very rapidly westernizing. The parents fear that their children will suddenly westernize and come home when they contact Western culture. They are also worried about safety.

I would like to introduce another very interesting program of recent. It has to do with youth tourism and exchange, but I'd like to point out that it goes beyond that.

Two months ago, the Korean government and US government made an agreement and established an MOU. The program's name is WEST, which is the acronym for Work, English, Study and Travel. It is called the West Program and starts next year. Some 5,000 young college students from Korea will be selected and sent to the US. They will be there for 18 months, which includes 6 months of English study, 6 months

of internship and 6 months of travel. And, it is supported by the government. I was thinking that this kind of "West Program" could be done with Japan. It would be very interesting. Of course, there are family issues and four other prime issues.

The first issue is structural. In other words, there is not a structure for managing youth tourism and exchange. Then, there is a program issue; the program cannot discriminate because of age, group or gender. So, you get a single problem that's one-size-fits-all. If you like it, fine, if not, don't join. I don't think the younger generation in particular will find this attractive. For example, if you don't have money, you don't really want to spend what you have.

Youth tourism and exchange are not looked at as a money-making venture. What I mean by this is that administrative people see youth tourism and exchange projects to expense money rather than making it, which is a very serious issue.

For what regards infrastructure, there are issues such as information systems for e-tourism. The young generation in particular is expert of virtual domains. But, manager-level people involved with youth tourism and exchange cannot use a computer, so there is this huge gap. We need to provide more virtual information. The kids will lose interest unless we provide more material over the internet.

Before closing, I would like to offer a proposal. First of all, we need to build a sound management structure. We must consider both quality and quantity. How about a WJST or Work, Japanese, Study and Travel. I want to propose a WJST. In short, I think that we could come up with something very interesting to young people in both countries.

“The Promotion of Thailand/Japan Tourism Exchange for Young Generation: Prospects and Issues”

Director, Marketing Database Group, Policy and Planning Department, Tourism Authority of Thailand

Suwat Jutakorn



Last year, 2007, was the 120th Anniversary of Japan-Thailand Diplomatic Relations. I would like to speak about the relationship between our two countries and about youth exchange. I will discuss the problem points of youth tourism, what we should be doing to solve all the issues, and whether or not problems can be solved through tourism.

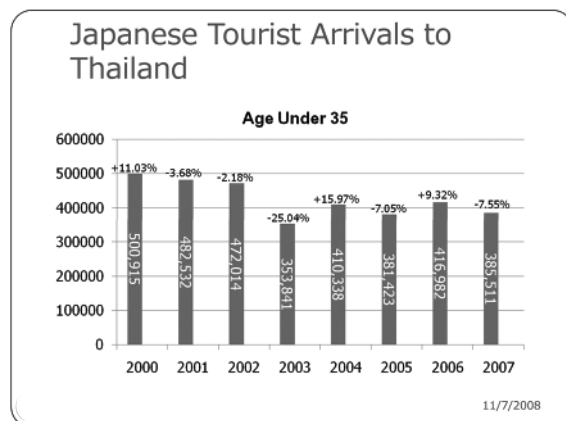
First of all, the relationship between our two countries goes back for more than 600 years. There were trade relations between merchants in Thailand and Okinawa in the era of the Sukhothai Dynasty. The Ayutthaya Dynasty followed, and a Japanese village was formed. At the time, the leader of Japanese Voluntary Troop was Yamada Nagamasa. He was given an honorary name by King Songtham of Thailand, and was given the position of Okya Senaphimuk, a military commander rank. He later became governor of Nakorn-srithamaraj Province in southern Thailand, and died in Thailand. Also, King Rama V (childhood name: Chulalongkorn) formed mutual ties with the Meiji Emperor in 1868, and diplomatic relations commenced in 1887. That is why last year was the 120th Anniversary of Japan-Thailand Diplomatic Relations.

A variety of events were held between our two countries through JICA. Also, Mr. Satsuki Eda, a member of the House of Councilors, visited the Japanese village in Ayutthaya last year.

We analyzed the status of tourism between our two countries from the standpoint of national

population and economy. Between 2000 and 2007, there were various changes in the situation as well as problems. Although there are fluctuations in the number of travelers, it does not change the close relationship between our two nations.

We already implement promotional programs targeting the younger generations. The TAT has three bases in Japan: first Tokyo, then Osaka, followed by Fukuoka. We have organized educational tours aimed at sending young people to Tokyo. This time we organized the opposite attempt: About 500 Japanese students would visit Thailand, touring the Prime Minister’s Office and many important sightseeing spots.



The number of Japanese tourists aged 35 and under who visited Thailand increased by about 11 percent in 2000, and went on a decreasing trend thereafter. In 2004 the numbers recovered somewhat and rose by 15 percent, but declined again after that. In 2006 we saw a 9 percent increase, a negative growth again last year, and slightly negative this year. Out of Japanese

tourists, 74 percent are men, which may give us a reason to change our promotion policies. We want more families to visit Thailand. The 35 and under age group comprises 30 percent of tourists from Japan. Sixty-four percent visit our country twice or more. Sixty percent of tourists made their own travel arrangements. About 80 percent are on holidays and 14 percent on business. The average stay is quite long, spending about 1 week in Thailand. Tourism expenditure is about 130 dollars per person per day.

Tourism can be categorized into cultural tourism and other kinds of tourism. First, I would like to talk about cultural tourism. Last year, we celebrated the 120th Anniversary of Japan-Thailand Diplomatic Relations. In commemoration, a Thai pavilion called Sala Thai was built in Ueno Zoological Garden.

There is a very famous novel titled “Khu Kham (Eternal Love and title of Japanese translation is “Afterglow on the Menam”)” written by a Thai female novelist. It is a story of a Thai girl and a Japanese soldier who fall in love with each other during World War II.

In 1939, before WWII, a Japanese restaurant called “Hanaya” was opened in Thailand by Morizono Family. It is the oldest Japanese restaurant in Thailand and is still in operation today, run by Mr. Yoshio Watanuki. He is the 3rd generation - a son of the original owner’s daughter Yasuko Morizono and her husband Takashi Watanuki.

It is important that there was a movement to celebrate the 120th anniversary and renew the memories in Japan also. In commemoration, a Japanese garden was created in the Japanese village in Ayutthaya. The gate to the garden was built to resemble the gate at Kinkakuji Temple.

There is a Nishinoya-style stone lantern and the garden is surrounded by a high bamboo fence. There is a rock garden covered with white pebbles and a tea house, as well as a water basin for handwashing prior to entering the tea house. There is also a stone tower of 13 tier pagoda as the symbolic mark and the guardian deity of the garden. The garden is filled with the wish to introduce the Japanese culture through this garden, and express the desire for a peaceful world. Her Royal Highness Crown Princess Maha Chakri Sirindhorn was present for the opening ceremonies for the garden held in August.

The TAT has an office in Fukuoka also. In an arrangement with Thai students, students from Fukuoka go to Thailand for exchange, while 25 Thai students and 4 teachers came to Fukuoka for homestay. In 2007 and 2008, 40 Fukuoka students went to Thailand. In the Osaka office, many seminars and presentations were held.

I think the support of the Japanese government is extremely important. That would be the Visit Program to Japan. In 2007 and 2008, it was implemented as the “Trip to Thailand.” It was organized by the Osaka office, and more than 800 students participated. For 2 months they stayed on board a ship and took part in various activities on a daily basis for cultural exchange. There were also discussions to learn about each other’s lifestyles and to disclose a variety of ways of thinking. The ship went around to various countries in Southeast Asia. These young people are considered to be people who will carry the future of the nation on their shoulders, and the program, which was started in 1974, continues to this day.

Mr. Keiichi Nakane of JICA assumed charge in Phuket and still works there today. He set up a

Kendo club in Phuket. This Kendo club joined the International Kendo Federation in 1991.

In addition, with the support of the Japanese government Youth Sports Center was set up in the Din Daeng district of metropolitan Bangkok. Facilities for sports, arts, and culture were set up there, as well as a training center and youth center office. Many Japanese sports such as Judo and Karate are very popular in Thailand and very well known. When I was in high school I studied Karate. On the other hand I think many Japanese people know about Thai boxing. There is also a type of fighting in which swords are used. It is an ancient Thai sport, and there is a training center in one of the temples in Ayutthaya. It was there that knights who served the Ayutthaya Dynasty trained in the past. In this way, exchange had already been happening.

I think Japanese golfers like Thailand. The golf courses are inexpensive and it is easy to make reservations. There are more than 100 golf courses in Thailand, and about 30 near Bangkok alone. Thai golf courses are very well equipped and maintained, and there are excellent Japanese-speaking caddies.

The Japan Association of Travel Agents aims for 10 million inbound travelers in 2010 under the "Yokoso! Japan" program. Target markets are North America, Europe, Oceania, and Asia. In the "Visit World Campaign," the goal is 20 million outbound travelers in 2010. In terms of future trends, the targets are people in their 20s and 30s. We strongly want people to choose Thailand as their destination. Out of the ASEAN nations, only Thailand is chosen as one of the 9 countries. The program can also connect to the strategy of revitalizing the Kansai and Chubu districts. Also, in terms of media strategy, there is a need for R&D

and joint promotion for young people in their 20s and 30s. We also wish to conduct direct marketing in Europe and mainland USA in the form of such strategies.

PATA is also paying attention to outbound travel. Right now, Japanese people have very tight purse strings and are sensitive about expenses, and not as willing to spend as they were before. This is most likely due to the global influence of the economic crisis which started in the USA. Now we have entered a recessionary phase and we also have many scandals relating to finance and the government. Therefore, perhaps domestic travel is more attractive. In terms of economic development, we have extremely close cooperative relationships in Asia. Although domestic travel is more attractive compared to overseas travel, Thai people prefer to travel overseas because overseas package tours are less expensive than individual domestic travel.

I would like to talk about what is the best for young travelers. In terms of exchange, we must make it so that high-quality visitors will increase in the future. The factor behind the number of young people increasing in 2000 but declining thereafter is, we believe, not so many young people went on the educational travels.

However, 10 years later, we are now in an age where young executives, leaders, and business owners have the money to travel and are willing to revisit the lands they went to in their youth.

In addition, at PATA they anticipate a variety of coordination efforts by the tourism bureaus of different countries. I think the hotel and airline companies, especially those relating to Southeast Asia, are trying to pool their strengths for joint promotions.

For tourism aimed at youth, I believe it is

important for public and private sectors to cooperate and coordinate more closely. As the lecturers at this Seminar are saying, it is also important to gain the full support of parents. Furthermore, in the 2010 forecast of the TTI, the nations sending out the highest number of long-haul travelers is USA first and Japan second, but I think there is a need to keep an eye on future trends. As Mr. Yamakawa mentioned, the emergence of low-cost carriers companies may change this forecast.

According to the MasterCard forecast, destinations in Asia are supposed to reach double-digit growth. The forecast says the recession is not going to have a significant effect on Asia; that we will somehow weather the global spread of the financial and economic crisis that started in the USA. It is predicted that we will have 88.3 million outbound travelers by December of this year.

According to the MasterCard ranking, there were 9.2 million outbound travelers from Japan for the second half of 2008. Outbound travelers from Thailand were 2.1 million people (approx. 10% increase). Since the Japanese numbers were large to begin with, the rate of increase is small, at 2.8%. The TAT conducts various collaborations with Kansai marketing students: 2,754 students went on a Familiarization Trip to Thailand.

We are planning such a project again for February 2009. The winners of the Kansai University Miss Campus beauty contest will be invited to visit Thailand. In July of next year, about 200 students of Kansai Gaidai University are planning a Visit Thailand program. The Osaka Board of Education is also planning to have 15 high school students and their teachers visit Thailand on an educational program. We are also planning meetings, discussions, and exchange

programs by volunteers, although these are still to be announced. In terms of cultural exchange, these may be gaining actual physical and tactile experience of the Thai lifestyle, world heritage, homestay, and “Thailand-ness” in Nakhon Ratsima (a province in northeastern Thailand). A special mission particularly emphasized at the Osaka office is the golfers camp in Thailand, designed for young people to receiving training in golf. We also have eco-tourism, so we look forward to the participation of Japanese young people. Through exchange of different views, and through sharing the same activities, you can make contact with Thai youth. Also, most Thai universities have an international department, where English is taught and which have programs where English is spoken. These can be found in Pattaya, Chonburi.

Now I would like to talk about what we should be doing to further deepen exchange in the future. As one of the people who were involved in the setting up of APETIT, a network for cultivating human resources for tourism, I would like to further promote these exchange programs and enhance cultural, educational, and sports exchange. I would also like to see stronger coordination.

How do we implement this? There are about 100 universities in Thailand. If the universities and high schools in Japan and Thailand sign agreements to form sister school relationships, exchange will happen more swiftly on the basis of those relationships. I also think there will be backing from private industry, public organizations, and government. Language study is also very important, as is family homestay. In the American Field Service program, the American government sends students to our country and has them stay for one semester or one year. Perhaps something similar can be done between

Japan and Thailand. Starting from family, and from a university professor. I think this would be very easy to do.

The only problem, perhaps, would be language, as Dr. Chon mentioned. If a program is to be international, I would suggest having it offered in English as the first step, then incorporate Japanese, then Thai. In terms of tourism between the two countries, given we already have a long history, I suggest the exchange of staff and younger people who are involved in tourism. Students studying tourism could be sent to JTB in Bangkok for job training, and likewise trainees of the worldwide JAL Hotel on-the-job training program can be sent to the Nikko Hotel in Thailand. The former Nikko Hotel in Thailand now has a new owner, but I think it would be possible to coordinate within the Nikko Hotel chain.

I would like to see the exchange of young executives and leaders between our two countries. It is important for young Thai and Japanese business leaders participate in meetings of the young business executives association and exchange ideas. Perhaps they will start businesses together. That would lead to further evolution of closer economic ties.

These things are extremely important, through cooperation in every conceivable field. There needs to be particular focus on full support, support aimed at young people from their family. In some cases this may mean the utilization of TV programs. The Japanese TV series "TV Champion" became very popular in Thailand. There is a Thai TV show called "Khun Phra Chuia," which translates to "Oh My God!" in English. This show played the role of conveying ancient Thai culture to modern people. It also showed Thai history in a manner which educated the people of today.

I would like to see this kind of exchange occur in a TV series. I think it would lead to faster exchange between young people, and a deeper understanding between Thais and Japanese.

This year is the 121th Anniversary of Japan-Thailand Diplomatic Relations, and I am deeply grateful to all of you. I sincerely hope that the level of exchange between our countries and between young people will have increased by the time we celebrate the 130th Anniversary.

Thank you very much.

“Australia Japan Tourism Exchange for Young People”

Professor and Vice-President, Ritsumeikan Asia Pacific University **Malcolm Cooper**



What is characteristic about tourism is that it is more a consumptive and commercial activity than a governmental activity, given what tourists are. In other words, it can be considered an activity originated from the demand side. In the case of Australia and New Zealand, the number of tourists is limited by accessibility. Time is also a limiting factor. In that same breath, the places that people can visit are also limited by these factors. What attracts the youth to Australia and New Zealand is the opportunity to work, which is what I want to talk about today.

Tourism is a very big business with economic benefits and social contributions for tourist destinations. Tourism is a source of revenue, but what I would like to emphasize is that, of one's travel expenses, only a small amount is spent on attractions. The available attractions are determined by where one goes, but the remaining expenses come from travel and lodging. Consequently, speaking just about Australia and New Zealand, backpacking trips are a very big business. Visitors can cut expenses to a great extent by traveling this way.

To understand youth tourism in Australia, you have to think like a backpacker. This is a very popular way to travel amongst youths. Reason being the time that they can spend. Youths go to school for four years and directly to work after that. They then take a little time in-between to do something. For example, they want a 3 or 6-month break after graduating. So, they have more time than people on a packaged tour and the cost is

about 6,000 dollars. Of course, this varies from person to person. And, because they are looking for a fun experience, I would like to point out that travel can, if we compare it to other economic activities, take advantage of public resources. I would like this in particular to be understood.

I want to compare tourism to other economic activities. Especially with regard to youth tourism and public resources such as - say - agriculture, Australia needs a labor force in harvest seasons for asparagus and pineapple, for example. The same applies to grapes. Yet, they cannot get enough people. The people living in urban areas of Australia, especially, know nothing about agriculture and never even consider taking part in a harvest. So, young tourists provide the labor. Tourism is not just about sightseeing as it offers possibilities for capitalizing on human resources for things like agriculture.

Without a doubt, tourism is entertainment. That is particularly true for young people. This fact must be understood by art galleries and museums. In other words, they must realize that they are in the entertainment business. Reason being that there are very few people who visit a museum with the intent of deepening their studies in one way or another. The greater part, instead, want to have fun. Tourism is essentially a demand-based activity. That is absolutely true for those who backpack, as well as travelers using other forms of travel. And, this is now becoming the case amongst Japanese, as well, and especially amongst young people. Packaged tours occupy

without a doubt an important position, but because they are packaged deals, one sees, for example, the attractions of Sydney at a reasonable price, but not the entire country. Nonetheless, like others, Japan's youth can reduce the cost of traveling to Australia by taking advantage of packaged tours. And, packaged tours try to keep the cost down.

Here, I would like to think about this issue slightly more in depth. In the realm of youth tourism, the Japanese people originally traveled for educational purposes. I would like to talk about APU in this regard. APU has students from 87 different countries, the bulk of which come from Japan, China and Korea. There are some 6,000 youth tourists in the school. If you visit the campus, you get a model experience in cultural diversity and internationalization that Asia's youth are going through. It is also necessary to understand that youth tourism is changing. For example, students from many rural schools go to Okinawa, and graduate and undergraduate students from our university take part in this program in August working as tutors.

I am going to go back to my main topic; as I mentioned earlier, the Australian government has realized that tourists are targeted to fill labor shortages. In short, there is a good turnout in agricultural fields to help with harvests. Young people seeking accounting training or business training come particularly to Sydney and Melbourne. They then visit a job search website launched by the government. Since they can travel all across Australia, they follow a path between harvest areas, referred to as the "harvest trail." Many come from different countries and meet other young travelers. They learn about cultural diversity and can practice foreign languages. And, by taking part, they get to see the countryside

of Australia and New Zealand. This enables internationalization. Obviously, the agricultural world is rather conservative, but these young people have come because the government developed this program. This is Australia's working holiday program and everyone can partake. Just five years ago, regulations prevented open participation, but all of that changed. The New Zealand and Australian governments became aware of this and started promoting youth tourism. As a result, the program has been a great success in my opinion.

For example, Europeans that have to travel such a far distance use this program to reduce their expenses. Their plans are usually to work in Australia and then proceed onward to the Asian region. Students come also from Korea and Japan. They do this on their own. Rather than a family trip or packaged tour, they come by themselves on their own through this program. And, they seem to like it.

There were other Japanese students who headed to Sydney, Melbourne or Adelaide in the past for educational purposes. With regard to Cairns, economic factors were particularly important. The economic contribution by Japanese travelers has been very large. Golf courses are one example. Though they come for educational purposes, students work in hotels or restaurants, and learn about tourism in the process. They get on-the-job training. This is, in other words, support tourism for Japanese tourism. In the case of Cairns, Japanese tourists provide the labor and are contributing to the service culture. Nonetheless, the mainstream is, as I mentioned before, harvesting.

I would like to look at Australian students for a moment. One of our troubles is that Australian students do not take trips. They do not travel

while getting a degree. However, there has been recent participation in trips organized by schools, but most kids do not travel until they graduate. Recently, the Australian government determined that this was not good and decided to promote tourism for educational purposes. The Australian government made it possible to study at a university overseas with financial assistance for a minimum of one year. This is true for APU; students have been sent abroad from Australia. This has been going on for years now, as I myself did this. This is what the Australian government is trying to do.

APU has students from Australia. The students travel around a lot, so we are sure what we did was not a mistake. In any case, to increase the number of Australian students in Japanese universities, it is necessary, for one, to provide courses and, two, for governments to cooperate with each other. Also, financial support from both sides is needed much like the way the Australian government is funding this. Of course, young Australians are coming to Japan. Though most of the worries concern road signs, prices and how easy it is to get around, these problems have decreased since the launch of the Yokoso! Japan program.

The thoughts of the beneficiary are also important. Though this has changed because of the Yokoso! Japan program, the average age of the Australian student is high. That is because they come after graduating or after getting their degree, and that has been hard to change. Efforts are needed to encourage more Australians to come to Japan at a younger age.

Another form of student exchange is the JET program. It involves teaching English in Japan and is a popular program amongst the younger

generation in Australia. There is also work via Japanese NGOs and NPOs, which is truly a wonderful experience for the young. I would like this to be expanded to other regions and countries. It greatly benefits students from Australia and New Zealand. There are wonderful experiences to be had if one can speak Japanese.

Japan has wonderful cultural and material resources, and Australians want to experience that. That is not the problem. The problem is the time lag in that students first get their degrees before coming. Something should be done to address their college careers through social networks.

Inversely, it is considerably easier to motivate Japanese students into coming to Australia. They come first on a typical vacation and then they come back as backpackers wanting to pursue their own journeys. They move easily about Australia. For certain, more and more Japanese students are traveling on their own.

“The Trend and Style of Tourism with Japanese Youth for Mutual Understandings of Asia and the Pacific Countries”

Professor, HANNAN University **Hiroshi Maeda**



My area of research is sustainable tourism. Achieving sustainability, in our society and environment, is a critical challenge that involves both ourselves in this century and the next generation of humanity. In that sense, sustainable tourism is extremely important, and the approaches and methods for its implementation are very difficult, complex issues with much room for research.

First of all I would like to think about what youth tourism is about. Young people are in the process of growth, so naturally they grow up to become adults and take charge of the next generation - they are sustainable beings in every sense. That means youth tourism has relevance for the sustainability of tourism, and so it would follow that it is sustainable tourism in the true sense. Therefore, I believe youth tourism leads into a major challenge for tourism in the world today.

That being said, however, youth tourism is a category which is extremely difficult to grasp the actual picture of. My affiliation is to the Hannan University Department of International Tourism, which is a 4-year program of tourism study established in 1997 for the first time in Kansai area. About 130 students at each grade level, or a total of about 500 students, are enrolled in this program to study tourism. I am in contact with the students every day, yet I have a very hard time discerning what tourism is like for them. However, I can say there are two trends.

One is that, even though they are studying tourism, our students are no different from the

general public in terms of their actual travel practices, and by that I mean the majority of them practice mass tourism. For them, the biggest challenge in real life is how to find inexpensive tours that are easy to book. While technique may well be necessary, finding these kinds of tours is right along the trends of mass tourism, and I feel that youth tourism exists as one of the manifestations of that genre.

The other trend I see is the kind of youth tourism conducted on the basis of the university education system. As was mentioned in the morning lecture, this refers to study-abroad programs and overseas internships. Today, we see this form of travel systematized and very much widespread among universities and sometimes even high schools. This is the other trend of youth tourism.

Our university also offers study-abroad programs with more than a dozen partner universities, including those in English-speaking, Chinese-speaking, and Korean-speaking regions. In English-speaking countries such as Australia and the UK, we also have internships. I believe the present state of Japanese universities is that the majority of study-abroad programs involve language study in English-speaking regions, followed by Chinese-speaking and Korean-speaking regions. But from the standpoint of international mutual understanding and international exchange, language study is an objective in a narrow, incomplete range. Our students are enthusiastic about language study-

abroad programs right from the time they enroll in our university, and many are satisfied with 6 months to a year of overseas study; however, I don't think we can say this is all there is to youth tourism. Since the language barrier is a formidable obstacle for Japanese people, it is perhaps unavoidable for language learning to take priority as an incentive for studying abroad. However, as someone who teaches tourism, I do feel that youth tourism at the university level places too much weight on study-abroad programs focused on language training. Back when I was young, I think my peers and I were driven more by the desire to travel to many different countries on a shoestring budget. But as far as I can tell from my actual dealings with students today, students who feel that way are few and far between. Even so, I don't think our students are only seeking study-abroad programs for language acquisition purposes. The problem is a systematic one on the part of the university, in that the channels for international exchange are limited to study-abroad language programs.

While I am sure language training and internships have their place in youth tourism, I am convinced that the heartfelt desire of contemporary university students goes beyond those things, that there must surely be something they are searching for in tourism. In light of that sentiment, my definition of youth tourism would be this: Tourism that has an educational effect on young people at a growth stage of their lives. It is a very broad definition, but within that definition I would say that youth tourism is a form of tourism that is particularly effective in the areas of understanding and interacting with foreign cultures. I feel it will be our challenge to go beyond study-abroad language programs to popularize a broad range of

youth tourism with that kind of effect.

Mass tourism is the mainstream of contemporary tourism, and can be defined as being comprised of sightseeing and activity. However, I feel that university students and other young people of today are seeking something beyond just seeing or doing things. This something is not quite sightseeing, and not quite activity; it is something we might refer to as "the value of experience." This means the things the traveler saw and did remain in his or her memory as a sequence of experiences. I feel this is very important in the kind of tourism that is being sought after today. The "value of experience" is being given considerable weight in the field of economics in recent years, and I feel precisely the same thing can be said about modern tourism, particularly tourism for youth, who will carry the next generation on their shoulders.

In 2005, I was in the UK for a year conducting a survey with the theme, "Community Restoration through Tourism." When I stayed at a certain Bed and Breakfast, I encountered an English youth traveling alone. He told me he had stayed at that Bed and Breakfast with his family when he was 6 or 7 years old, and the memories had stayed with him; this time, he had set out alone, and he had let his memory guide him to the same lodge, where he spent the night. In other words, tourism for that young man was about tracing his memories, placing more value on the memory of having gone sightseeing with his family than on chasing after the latest fad. I feel this may represent one of the focal points of youth tourism that goes beyond sightseeing or activity.

How, then, can we go about creating this kind of tourism with "value of experience?" For that we need to create a place for experience that remains

in the memory. I suggest that “place” would be the community at the destination. I believe the significance of youth tourism lies in how the tourist interacts with the people in the community. And in such cases, youth tourism can be defined as community-based tourism.

Community-based tourism is a form of tourism where the community at the destination provides the place where community residents and the tourist communicate and interact. The community provides the stage where understanding and interacting with foreign cultures is conducted. There will be a critical need to create such stages in order for youth tourism exchange to occur. Often referred to in Japan as “community tourism,” community-based tourism is one form of sustainable tourism. When we look at sustainable tourism from the hosts’ point of view, it can be rephrased as being community-based tourism. The UNWTO defines the criteria of sustainable tourism as reducing negative impacts on cultural heritage, reducing harm to local environments, and maximizing tourism’s social and economic benefits to local communities. In this way, the community is a critical factor in sustainable tourism. In that sense, I am trying to see the ideal form of youth tourism in sustainable tourism.

I would therefore like to introduce to you an example of ecotourism that I practice with my students as a part of my sustainable tourism course at university. Although I give lectures on ecotourism in my university course, it is difficult to get the meaning and issues across through lectures alone. That is why, every summer since 2004, I take my students on a 7-day eco tour to Malaysian Borneo. With the designation of the year 2002 as the International Year of Ecotourism, the First Commemorative Conference was held

in Borneo. Around this time, the government of Malaysia set forth a national policy of nation-building through ecotourism, and endeavors in that area have since increased. I aligned my efforts with these ecotourism movements in Malaysia, and started my eco tours as practical training in the form of a joint project with an eco tour company in Japan.

The Malaysian state of Sabah is located in the northern half of Borneo Island, and the Kinabatangan River flows through the tropical jungle. The area around the river is a treasure trove of wild animals and plants, and 32 indigenous ethnic groups live there. The natural environment and traditional cultures surrounding the Kinabatangan River is where we do our eco tours every year. The feature of our tour is that students can homestay with indigenous Orang Sungai (Malay for “river people”) families living along the Kinabatangan River.

While ecotourism may take many forms, they can be placed in the following two categories. One is nature-based ecotourism, and the other is community-based (culturally oriented) ecotourism. Although it may seem obvious that ecotourism would be nature-based, it is worth noting that ecotourism is not about nature at the exclusion of all else, and that the two categories can be used to identify the difference in how the tourist comes into contact with nature. An example of nature-based tourism might be a tour to the Galapagos Islands, with virtually no human civilization, where tourists come into direct contact with the natural environment. In the other form, community-based tourism, the tourist comes into contact with nature through the local community.

What is particularly unique about ecotourism in Borneo is that community-based homestay is

encouraged, so we live the lives of the indigenous people - sharing their lives, their meals, their home, their daily activities - through which we experience nature. I have already mentioned the importance of the “value of experience,” and in this case, the value lies in the homestay format. In other words, this is not a simple river cruise to go sightseeing in the natural environment of the jungle, nor is it an activity such as enjoying some food or drink in the local village. Rather, the sightseeing and activity is like a page in the day to day of living with the locals. In this way, by basing the experience in the interactive mechanism of homestay, we transform the sightseeing and activity of tourism into something with the value of experience: tourism that remains in the heart.

Although Borneo Island has a lush natural environment, in reality its forests are being heavily logged and replaced with plantations for palm oil. The pristine nature is dwindling rapidly. Partly to prevent further damage, the government is promoting ecotourism. In our program, we always start with a tour of the sanctuary for orangutans driven out of their forest homes because of logging. Then we visit the village where we will be homestay. The villagers welcome us with the words “community tourism,” not “ecotourism.” From the first day of our tour, we are struck by the strong passion of the residents to change the way they live through tourism, for the sake of conserving and preserving the natural environment of the jungle.

While it is to be expected that students will be moved and inspired by the lush natural environment in these nature-based sites, it is noteworthy that the thing that inspired them the most, or the thing they liked best, was precisely the part pertaining to the value of experience -

that is, how they were able to interact with the people in the community. The relationship with the host family and local residents is the basis upon which the students see and enjoy the natural environment. It is very clear that students are enjoying and gaining inspiration from the eco tour from their base in the community. We always find that 2 or 3 of the tour participants are willing to go again on the same tour the following year, even though it means paying the same fee again. I believe the reason these students participate repeatedly is that they recognize the value of experience in that eco tour. If merely sightseeing and activity were enough, they would undoubtedly be satisfied participating just once. The mechanism of community-based tourism is what generates that kind of “value of experience,” which is what assures the sustainability of prompting a participant to go twice, or perhaps even 3 times.

From these experiences, I believe youth tourism exchange should actually be conducted in a community-based format. In fact, such attempts are already underway in many different forms in the world of tourism. However, as far as I can see in my day to day experience at university, there is not much being done in the way of having our young people experience those kinds of community-based tourism. This is no doubt due to a variety of problems including the value of tourism and other business-related issues. Surmounting such problems is still a very difficult task; however, for youth tourism to become sustainable tourism, we have no choice but to overcome those barriers. I do not have much to offer in terms of specific suggestions, but one thing I feel absolutely necessary is a cooperative mechanism to create youth tourism between

very diverse sectors such as industry, the private sector, the community, and government, instead of the tourism industry going at it alone. And what is more, this being tourism, the efforts need to be international. I am convinced these efforts are absolutely necessary.

Today, it is relatively easy for students in Japan and any other country to purchase mass tourism products. But there is still no system where, with a mouse click, someone can purchase the kind of youth tourism I have been describing. At least from what I see in Japanese students, I believe there is a demand for community-oriented tourism exchange where the “value of experience” is sought after. We must commit ourselves immediately to building such a system. That is my conclusion and proposal, which I am transmitting from Japan, or if that is too grandiose, from the university front lines where our students are learning.

Thank you very much.

“The Current Situation of Educational Tourism Exchange for Accepting Foreign Youth to Japan”

Educational Exchange Coordinator,
Osaka Prefectural Government

Masafumi Yuasa



The Osaka Convention & Tourism Bureau (OCTB) was established with funding and human resources from Osaka Prefecture, Osaka City and the private sector. As a foundation, its purpose is to activate Osaka by drawing people from outside and inside Japan to the local area. OCTB operates five information centers at Osaka Castle and various other locations in the city. It also produces tourist maps that are offered free-of-charge. It also co-sponsors the Tenjin Matsuri. OCTB is working to draw tourists and conventions to Osaka by supporting tourism in various ways.

Today, I will be talking about school trips to Japan and school exchanges, the meaning and assessment of school exchanges, actual school exchanges, and issues and countermeasures concerning school exchange programs, in that order.

To begin with, I will talk about school trips to Japan and school exchanges. In recent years, other prefectures besides Osaka have increased the number of educational travelers that they have welcomed to Japan. The economic impact is obviously high, but also it is important to enhance the educational value of overseas school trips via school exchanges just as when school trips go from Osaka abroad. The issues are to meet the needs of an increased influx of educational travelers while finding ways to make schools exchanges meaningful for future hosting schools.

Increasing the number of educational travelers to Japan are the growing affluence abroad and

the no need for a visa for school trips from Korea, China and Taiwan. Other than that, there is also the interest in Japanese culture. For example, some want to come in contact with representative facets of Japan such as manga, fashion or Japan's advanced level of education. I might also add that Japan is safe and clean, which is another strong reason why young people want to come to Japan.

Educational travel to Japan and school trips from Japan are different. In Japan, the entire grade goes on a school trip, whereas educational travel to Japan is characterized by small numbers of just those wanting to go. Because of the small number of participants, these trips are flexible. Because of this flexibility, proposals can usually be obliged even when made at a late point in time. At the very latest, proposals for school exchanges come anywhere from one to two months prior to the actual event in most cases.

As for welcoming people to Osaka Prefecture, about 11,000 came last year including teacher observations. There were 257 hosting schools, a number that shows just how open our doors are to teachers and students from abroad. We are proud of this number in Osaka Prefecture. This kind of number means that an exchange or observation takes place almost everyday throughout the year. OCTB is the portal for those visits. When an application for exchange is received from outside of the country, the purpose, number of persons and planned period of time are confirmed and a compatible school is then sought. Not only do we

match the schools up but we also visit the hosting school afterwards to discuss details. We are also present on the day of the exchange activities. Sometimes the bus is late. Schedules get thrown off and schools panic. Those matters need to be taken care of. Those are the kind of things we do to enable schools to host exchange programs.

We want the exchanges to be high quality and have as much educational value as possible, but that is not always the case as you can imagine from the numbers. We received 1,000 requests for school exchanges in Osaka Prefecture in FY2004 and 3,788 in FY2005, from schools and travel agencies abroad. People before talked with the School Board and made requests to the Tourism Promotion Department of Osaka Prefecture and organizations in Osaka City, but it was difficult for each separate entity to provide these services, so OCTB was made the exchange program coordinator of Osaka Prefecture. This happened in FY2005. Though operations were centralized, schools have each their own situations and some schools are unable to host exchanges. In particular, schools are off on Saturdays because of the five-day week, so there are only five days of lessons in a week. In spite of the request for exchanges in Osaka, various events fill the week from Monday to Friday and schools, therefore, cannot host exchanges for as much as one or two months in the future. Up until FY2005, requests for exchanges were asked of schools without knowing their situations, and were often turned down as a result.

I became a coordinator in 2006, having been retired as a teacher. Schools have their circumstances and issues, but I believe that exchanges can be very meaningful to hosting schools if we accepted all requests for school

exchanges in Osaka and design the exchanges around the students as best possible. In FY2006, we had 8,041 exchange persons and then 11,072 last year, which amounts to a three-fold increase in two years. I think that we've been rather successful in terms of quantitative expansion. Another reason for the sharp increase in exchanges since FY2006 was the launch of the Osaka School Trip Promotional Committee by Osaka Prefecture, Osaka City, Sakai City, the prefectural and municipal school boards, and tourist associations, to promote cooperation in welcoming visits to Japan. The full cooperation of the Osaka School Board was a particularly big boost.

94% of the visitors come from the three countries of Korea, China and Taiwan. Not many come from elsewhere. Korea accounts for about 60% and China for about 25%. By schools, 143 or 55% were high schools, followed by junior high schools and elementary schools. Overseas, elementary school children take school trips abroad. That alone is an indicator of the increase in affluent families. There were 48 other schools. They visit trade schools, kindergartens, daycare centers and educational facilities.

I next would like to talk about the meaning of exchange and assessing hosting schools.

This is what I think of school exchanges. These other schools most graciously offer to come at no cost for international exchanges. I don't think anyone would turn that down. The hosting side has certainly various concerns, but exchange is very meaningful. As I said earlier, about 10,000 students from Osaka last year interacted with students from abroad, but when those children talk about their experiences with their friends and then their parents when they go home, the

impact expands horizontally. And, that is not all; because these are youth exchange programs, the experience remains with them well into the future. The visiting students from abroad as well are more than likely leaders in their countries and, after enjoying the exchange programs in Osaka, are very likely to come to Osaka and Japan again. School exchanges not only expand international understanding horizontally but also lead to vertical expansion in the future. In that sense, I think that the educational value of exchanges is high.

Another meaningful point about exchanges is that they develop communication skills. If the other persons speak Japanese, the children can find common topics of interest and make the effort to understand one another in Japanese. If they do not speak Japanese, they can use what faltering English they know or write down what they want to say in Chinese to convey their thoughts to others. They think for themselves and communicate by trial and error. These kinds of skills are developed, I think, through international exchange. For this reason, hosting schools have very highly rated school exchanges. We received 97% responses that were either “It was very good” or “It was good”. Those who thought it was ordinary accounted for only 3%. In response to the question “Would you like to take part in future exchanges?”, school teachers answered like you would expect teachers to: if the students were happy, it seems worthwhile, so after seeing students active in exchange activities, teachers are glad to do an exchange even once and will likely want to do it again. As a result, 21% said they wanted to do future exchanges, while 74% said they would if the conditions were right. This also shows how highly schools rate exchanges.

As for exchange formats, some schools are too

busy to host activities. In that case, I think that it is a good idea to let the children direct the activities. Or, if there isn't enough manpower, another possibility is to get help from neighborhood people, parents and graduates.

《Explanations of “actual school exchanges” using PowerPoint slides were omitted.》

Lastly, I want to talk about exchange issues and countermeasures.

The first is what I mentioned earlier about the one or two months from when a request is accepted until the exchange is implemented being too short of a time to prepare things. Most hosting schools cannot prepare in time. However, given the exact same conditions and pretexts, the results are completely different if a school turns down the request because they cannot make preparations and a school does whatever it can. Various things can be done if at least the principal demonstrates a willing attitude to do whatever can be done. For that reason, we visit schools for discussions after having matched them with overseas counterparts. We hear their questions and wishes, and provide them with advice. Often is that, because the preparation period is short, we tell them to use ordinary lessons and extracurricular activities and let the children handle things in order to lessen the burden of the hosting school. Children have many, many ideas. The children in Osaka, in particular, will do a lot of things. One of Osaka's tourism assets is it's people, I believe. Excellent programs can be arranged by utilizing the extraordinary resources that children are, therefore I tell principals to let the children play the leading role.

The second issue is about finding exchange funding. Visiting schools always bring gifts.

So, how do the Osaka schools return the favor? How do they pay for drinks? Schools do not have money now, so OCTB incurs some of the expenses, but because of the high number of programs, we cannot pay for everything. This is a future issue to deal with.

Also, problems and misunderstandings occur because of differences in school cultures and exchange attitudes. Some are loose with time, arriving early or later than the appointed exchange time. Japanese schools ordinarily manage their time carefully, but this is frequently the case when schools visit from abroad. Also, the manners and attitudes in the exchanges can be alarming. Not only students but teachers here for observations as well enter school buildings with hats on or chewing gum. People look at this in various ways; some say it bothers them to see it, while others think of it as a chance for differing cultures to understand one another. On the other hand, what seems to shock groups from overseas the most is the short length of skirts that Japanese girls wear. And, the friendly behavior with teachers surprises them. We both have good points and bad points, therefore it is important to understand that we are not the same and that we are different. However, we coordinators are on site to deal with things such as last-minute cancellations, schedule changes, gum chewing and so forth.

As exchange issues, visiting schools are asking to become sister-schools and there has been an increase in requests for home stay programs. However, Osaka has its housing issues and Japanese are clumsy at entertaining guests, which is a difficult issue. Especially when schools visit from Korea, Taiwan and China, parents do not readily approve of sister-school agreements and home stay programs, unlike with blue-eyed

Westerners. In those cases, I suggest to the Osaka schools that they first visit these other places. For example, since affluent students are coming, whether it's Korea, Taiwan or China, they can host us. We suggest that they do a home stay program first over there. Then, as a return favor, they would have the students stay over in Osaka. This is possible. I think this, not so much give-and-take, but take-and-give approach is needed for home stay programs.

One example success with that this fiscal year was that we sent about twenty high school students from Osaka to China with money provided by the Japan-China Friendship Association. Then, the same number of students were welcomed from China in Osaka. Chinese delegations make home stay a prerequisite of exchange. If the students could not welcome the foreign students into their home, the school where they were registered looked after them. This kind of home stay program went better than expected. A future topic will be to spread this method of home stay throughout the countries of Southeast Asia and East Asia.

Presentation

“The Current Trend and the Issues of Tourism for Japanese Youth from the Viewpoint of the Travel Industry”

Director and Vice President, Marketing,
Japan Tourism Marketing Co.



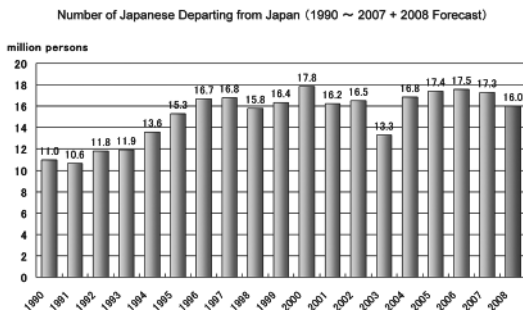
Masato Takamatsu

Today I would like to lead into the panel discussion by thinking together with you about what is happening in overseas travel by Japanese young people over a decade.

brackets. I think a major portion of them are work-related, business trips and the like. The next largest group is women in their 20s and 30s.

Japan Tourism Marketing Co.

Structural changes are seen amongst Japanese who depart from Japan



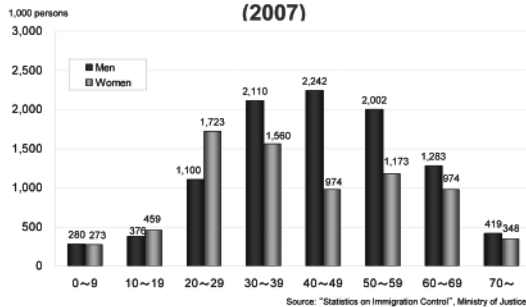
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, arranged by JTM

Trends of Japanese overseas travelers indicate a record of 17.8 million was reached in 2000, after which the numbers went up and down and is now on a downward curve. This year it looks like the number will hover around 16 million people.

Japan Tourism Marketing Co.

Men age 30~50 depart from Japan most followed by women in their 20s and 30s (2007)



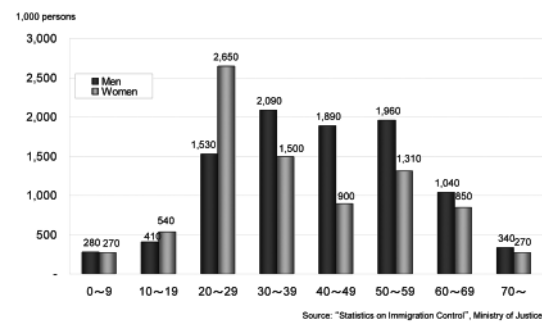
www.tourism.jp

Source: "Statistics on Immigration Control", Ministry of Justice

This is a chart of Japanese overseas travelers in 2007, shown by gender and age group. Notice the large number of males in the 30s to 50s age

Japan Tourism Marketing Co.

Women in their 20s led departure from Japan prior to 2000



Source: "Statistics on Immigration Control", Ministry of Justice

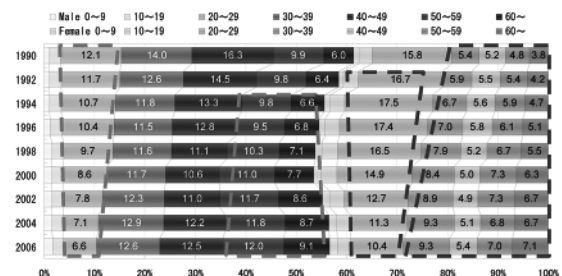
www.tourism.jp

The year 2000 was very different from what we see today, with 2.65 million twentysomething women making up the largest group. Although in terms of numbers the difference is several hundreds of thousands, the demographics of overseas travelers have changed in a major way from 2000 to 2007. And the group that has shown the biggest change is the twentysomething age group.

Japan Tourism Marketing Co.

Main age group of Japanese departing from Japan has shifted from young people to seniors: Travelers in 20s: 28.4% (1992) ⇒ 17% (2006)

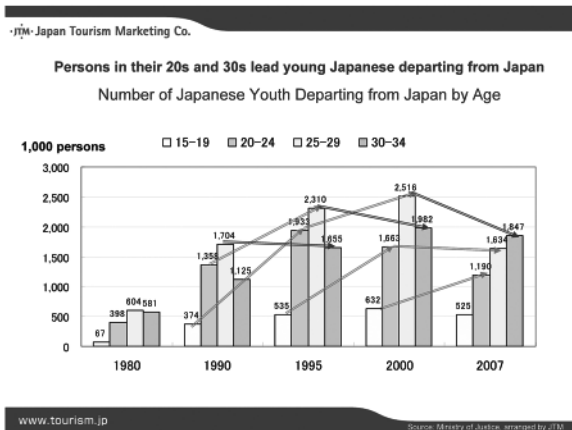
Number of Japanese Departing from Japan by Gender/Age (1990-2006)



www.tourism.jp

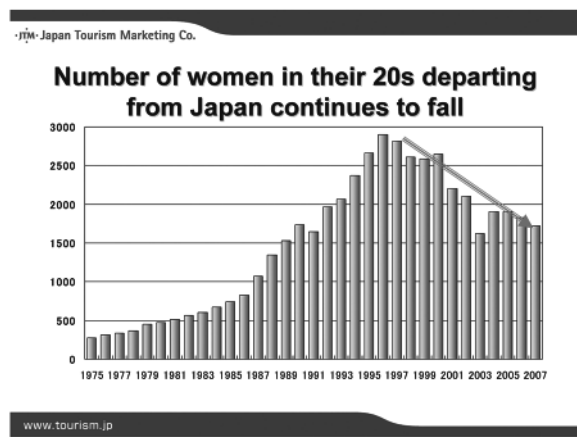
Source: "Statistics on Immigration Control", Ministry of Justice

This is a chart showing the period from 1990 to 2006 broken down into 2-year segments and displayed by gender and age bracket. The total of twentysomething males and females was 27.9 percent in 1990. The percentage of twentysomethings was highest in 1992, at 28.4 percent. However, as you can see from this chart, the twentysomething age group tapers off as we go down, that is, the twentysomethings as a percentage of the whole continues to decline. In 2006 it goes down to 17 percent, a decline of more than 10 percent. Who, then, are we seeing more of? We see a particular increase in women in their 30s and 40s. As you can see the overseas travel demographic has shifted from the young to the middle-aged and senior brackets.

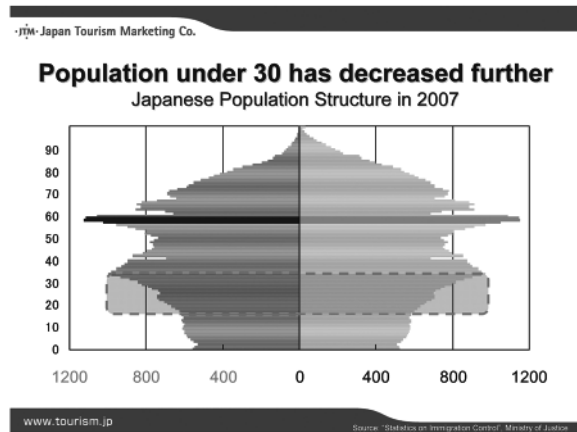


Let's look at the people who were in their late teens in the 1990s. In the 5 years between 1990 and 1995, when these same people were in their early 20s, the number of overseas travelers increased, as you can see from the tilt of the arrow. Likewise, late teenagers in 1995 became early twentysomethings in 2000, and late teenagers in 2000 became early twentysomethings in 2005, but as you can see the slope becomes less and less steep. We are no longer seeing the flurry of action of "okay, now I'm in my 20s, I'm going overseas!" which used to be there when people entered their

20s. Five years after that, the curve flattens out even more. Looking at the number of people in their early 20s to their late 20s in 2000, we see the numbers decreasing for the same generation. When we look at those in their late 20s to their 30s, all the numbers are going down.

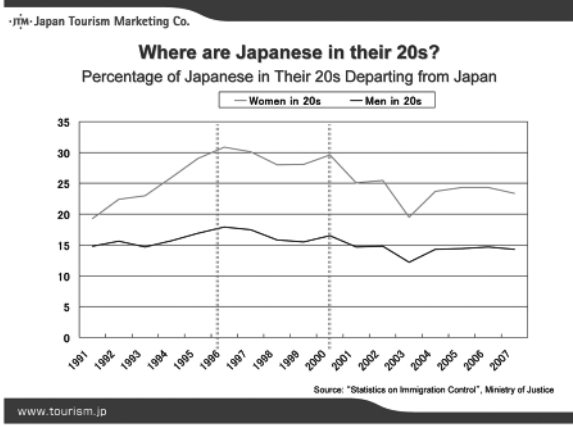


This is the curve showing female outbound travelers in their 20s. They were most numerous in 1996, when we had about 3 million people in this group alone. Today there are not even 2 million people, and the numbers are falling rapidly. There is no sign of the numbers coming back up. One of the reasons obviously is the decline in the population of young people.



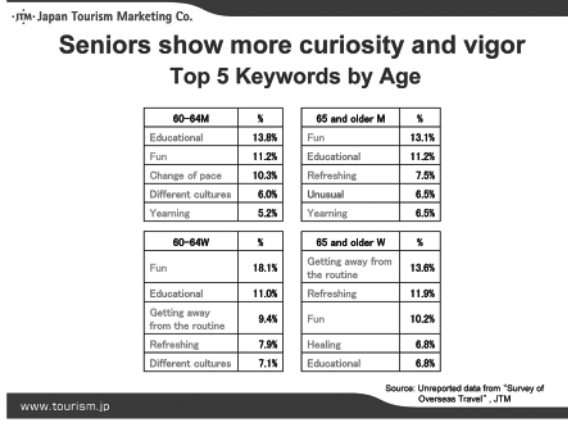
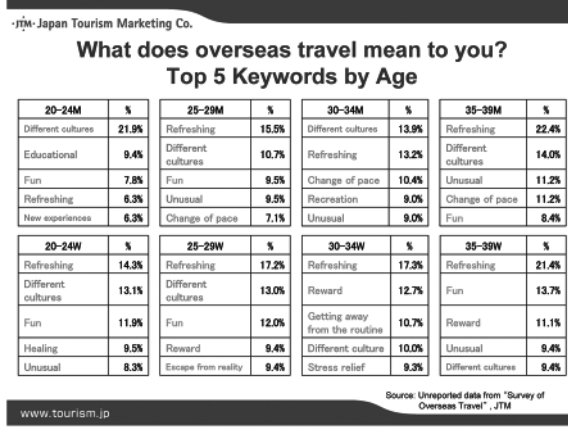
The largest demographic segment in the Japanese population is the baby boomer generation around 60 years old, followed by people around 35 years old. For both males and females, the

population goes into a decline from the 20s on down. It makes sense that a declining population would lead to a drop in outbound travelers, but that is not the only reason. The twentysomethings of today appear to have a waning interest in overseas travel. There seems to be something happening that cannot be explained by the falling population alone.



This is a chart showing the concept of "departure ratio." Departure ratio is the percentage of the total of a given demographic segment having gone overseas in the span of a year. These figures indicate how many people out of 100 went on overseas travel. In 1996, more than 30% of women in their 20s had gone overseas; that works out to about 1 in 3. However, after that, the departure ratio continued to slide, and then dropped abruptly with the SARS outbreak in 2003. In 2006 and 2007, the departure ratio was just over 20%, which is even lower than that around the 9/11 terrorist incident in 2001. Before, 1 in 3 went abroad; now the number is less than 1 in 4. Male travelers are also on the decline, although more gradually. The numbers look as if ready to make a comeback in 2000, but after 9/11 in 2001 and the SARS outbreak in 2003, the chart appears to be in hopeless shape. It suggests that overseas travel, which used to be something to be longed for and

dreamed about, is now being looked at in a slightly different light.



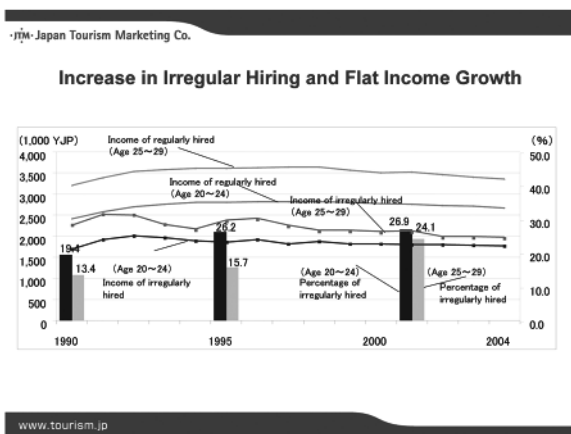
In a survey we conduct every year, we ask overseas travelers what overseas travel means to them. We obtained freely expressed answers from 3,000 to 4,000 people. In a previous lecture, we heard that young people go overseas to experience different cultures and expand their horizons. Indeed that is exactly what male travelers in their early 20s said about overseas travel. However, people in their late 20s and beyond increasingly describe overseas travel in the following ways: "a way to be refreshed," "switching gears," "taking a break," "a release from the everyday," "stress reliever," and even "escape from reality." Nor does this change at all for people in their 40s and 50s. It seems that people are simply exhausted every day and their feeling is they want to go overseas where their cell phone doesn't ring or receive e-mail, and spend a

few days just relaxing. Furthermore, from about the late 20s onward, the most frequently used phrase is “to be refreshed.” I have mixed feelings about the fact that this tendency is showing up in people so young. It seems that the young people of today are not going overseas all fired up to enjoy themselves or experience new things.

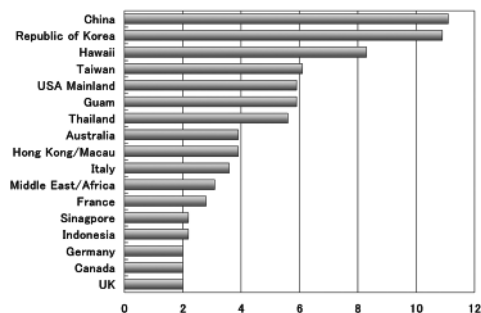
On the other hand, we are seeing those who are 60-plus who are young at heart. Up to their 50s, people use phrases such as “relaxation,” “to be refreshed,” and “escape from reality.” But once into their 60s, people use words such as “expand my horizons,” “enjoyment,” “different culture,” and “longtime dream.” This difference is also reflected in the way people actually travel. Those in their 30s to 50s tend to spend as leisurely a time as possible in one place. However, once past 60, people want to see as many things as they can in one day, so they participate in tours that take them around to a lot of places and commit themselves with energy from morning to evening. This is perhaps due to the fact that persons up to their 50s who are still in the workforce have to show up for work the next morning after they return from their trip, while for the 60-plus group life is just one long weekend, and they can take it easy again once they return home, which allows them to expend their energy while they are traveling.

The third background factor is disposable income, that is, the lack of money. A comparison of full-time and part-time workers as a percentage of the whole from 1990 to 2004 indicates a rise in the ratio of part-time workers, particularly in their 20s. We are seeing an increase in people who are not formal, full-time employees but rather who are temporary staff, contract employees, or “freeters,” that is, careerless people in part-time or dead-end jobs. There is also a difference in yearly income between those who are formally employed full-time workers and those who are not. With the yearly income low to begin with, the income level keeps going down. The gap between the haves and have-nots appears to be widening even in the young age groups. The phrase “M-curve society” is being used to describe certain Asian nations today, but I feel there is something similar in the air in Japan also.

Just recently I had an opportunity to speak separately with professors teaching at two different universities in the Tokyo area. One of the teachers described how he had asked a class of about 100 students whether they had taken a trip overseas within the past year, and only 2 or 3 students raised their hand; his students also talked about how they saw overseas travel to be troublesome because of the language barrier, or frightening. By contrast, a teacher from the other university said almost all the students in that university had traveled overseas. There are two differences in background factors between these two universities. One difference is the so-called “hensachi,” or the levels scored on standardized tests, of the respective student bodies. The other difference is the average income of the students’ parents. Both groups of students were tourism majors at the university level, yet just these two differences had led to a major gap.

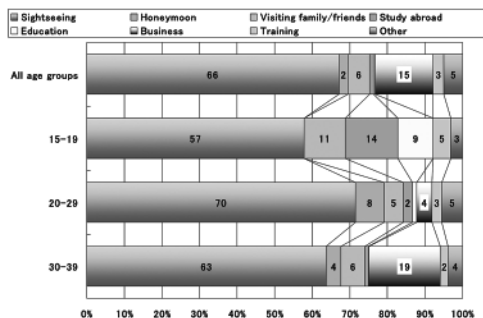


Overseas Destinations of Youth Travelers from Japan



The countries most visited by Japanese youth are China and South Korea. These are followed by Hawaii and Taiwan - the very picture of mass tourism destinations. If we were to press the issue I would say perhaps they are slightly more likely than other age groups to travel to the Middle East and Africa.

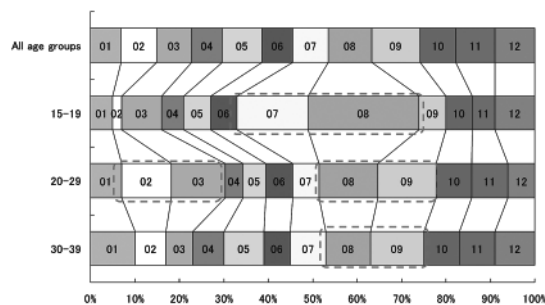
Travel Objectives of Youth Going Overseas



In terms of the purpose of travel, 60 percent of teenagers between 15 and 19 years old say their purpose is sightseeing, followed by visiting family or acquaintances. These respondents probably had previous experience living on other countries and have friends there, or their parent is on an expatriate assignment in another country. A sizable percentage of people also go abroad for "educational travel." Once into their 20s, more people say "sightseeing," but "visiting acquaintances" is still there to some degree. A

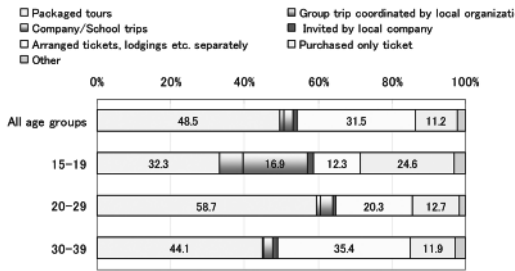
significant shift occurs with the thirtysomethings, whose most frequent answer, "sightseeing," is followed by "business." I am guessing that this age bracket is when people start being dispatched overseas on business travel.

Departure Month of Youth Departing from Japan (2007)

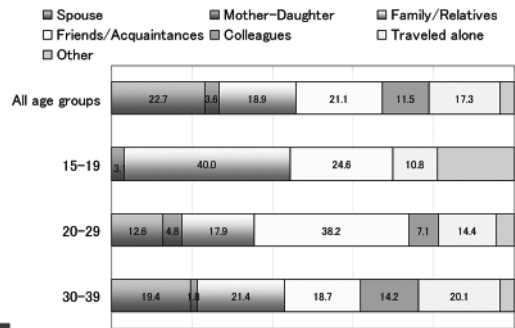


There are significant differences between age groups as to which months of the year they are leaving Japan in. Most teenagers travel in July and August, as visiting acquaintances, school excursion trips, language training programs, and so on are conducted during summer break. Twentysomethings also show the privileges of student life: After February and March, which is when graduation trips take place, and August, which is the summer break, this group has large numbers leaving in September. The reason for this is that, instead of going in August, when airline tickets and tours are expensive, they wait until prices go down in September and squeeze in their trip before the start of the second semester. While people in the workforce can take their summer vacation in August, many actually travel in September when prices are lower. People in their 30s still travel the most in August and September, but their departure dates are more evenly spread around the year.

Travel Style of Youth Going Abroad

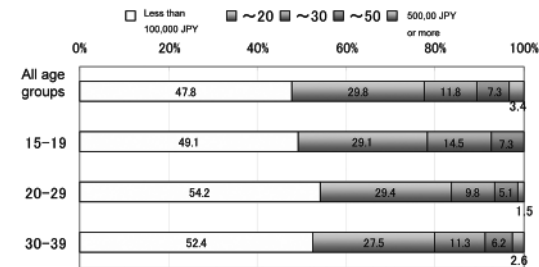


Travel Companions



In terms of the form of travel, young people tend to go for package tours. In term of who they travel with, teenagers tend to travel the most with their families, while twentysomethings go with friends and acquaintances, and thirtysomethings with a variety of different people.

Overseas Travel Expenditure

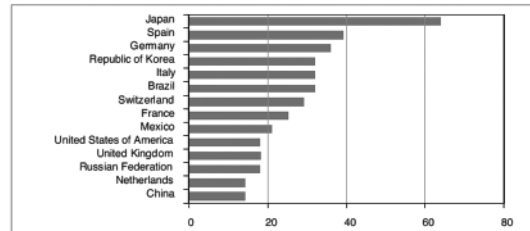


In the lecture this morning, there was a comment that youth travel is by no means cheap. Teenagers spend just about as much for travel as the average

person. Perhaps this is because their parents are paying for their travel. Twentysomethings tend to be more likely to spend less than 100,000 yen compared to other age groups, but the difference is not that significant, and the same goes for thirtysomethings. It does not appear to be the case that just because someone is young or in their 20s they are traveling on the cheap. I admit there are very few who spend more than 500,000 yen, although some spend more than 500,000 yen per person when it comes to their honeymoon.

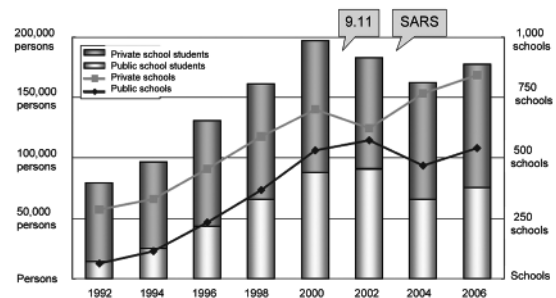
Are Japanese interested most in traveling overseas for language study? 2/3 language schools have Japanese students.

Figure 7.3 Main source markets for language students, 2005 (%)



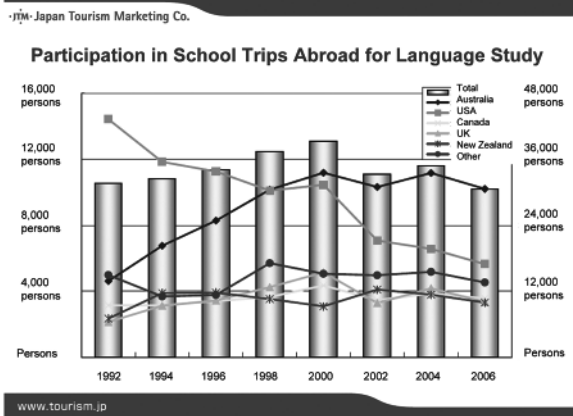
A UNWTO report on the nationalities of students enrolled in a number of language schools worldwide indicated that, surprisingly, Japanese students were the most numerous. Japanese nationals were enrolled in two-thirds of schools surveyed. We can see that a large number of Japanese young people go overseas for language study.

Number of students does not increase in proportion to increase in schools. Number of Students Traveling Abroad for Study

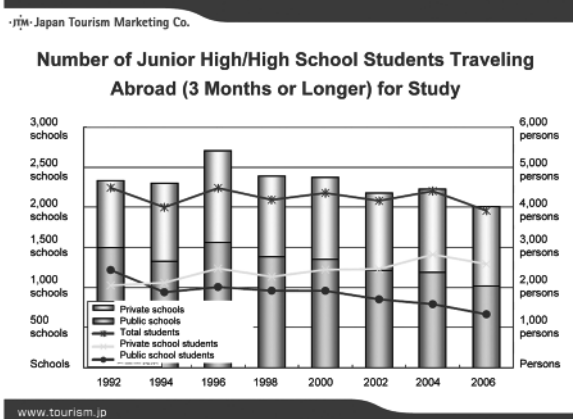


School excursion trips outside Japan decreased

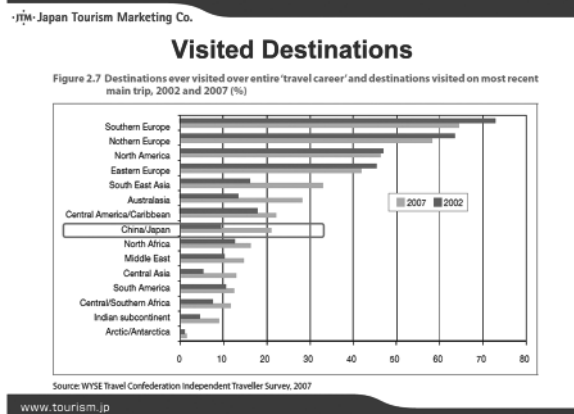
sharply in 2002, the year after 9/11, and in 2004, the year after SARS. Safety and security are paramount in educational trips, and it makes sense that they decrease when an incident occurs. In Japan, school excursion destinations are decided upon a year or two in advance, which means the effect of an incident continues for 2 or 3 years afterward. However, in 2006 we see an increase in overseas excursion trips, both by public and private schools. The line graph shows the number of schools. While the number of schools has gone up, the total number of students remains relatively flat overall because there are fewer and fewer students in each of the schools.



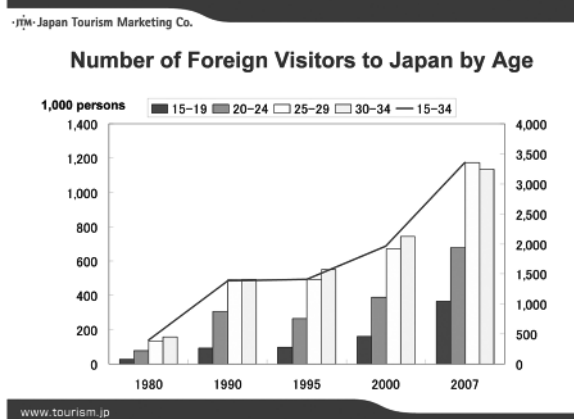
In addition to excursion trips, some schools organize overseas language trips (including short-term overseas study programs less than 3 months long). After reaching a peak at around 2000, the number of students remains stagnant. This may also be due to a structural problem.



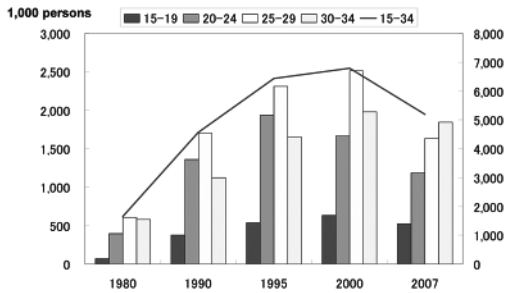
The number of students going overseas on long-term study programs over 3 months in duration has gone down more drastically than the decrease in population in this age group. Several study-abroad organizations have suggested that high school students are now less inclined to study overseas. The figures suggest, worryingly, that students may be putting off their studying abroad until they enter university so that they may focus entirely on passing the grueling entrance examination, or that the students' focus is turning inward, away from foreign countries.



This is also a piece of UNWTO data. When we compare 2002 and 2007, we see that many of the world's youth are visiting Europe. China and Japan are lumped together into one category, but we see here the numbers have more than doubled in these 5 years. We see that the youth of the world are looking toward China, Japan, and Asia.

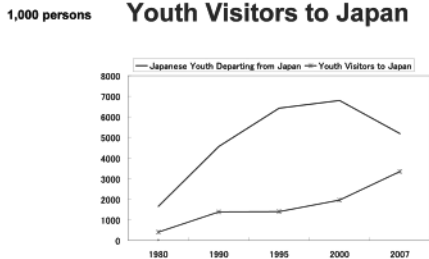


Number of Japanese Departing from Japan by Age



www.tourism.jp

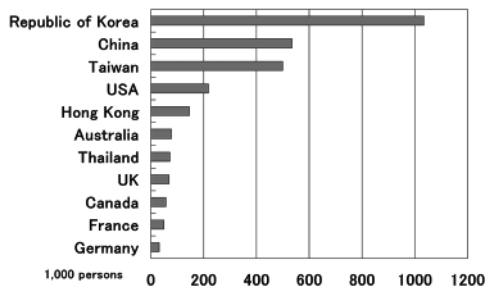
Japanese Youth Departing from Japan vs. Youth Visitors to Japan



www.tourism.jp

The number of people aged 15 to 35 who actually visit Japan is rising every year in every category. There is a particularly sharp rise from 2000 to 2007. By contrast, the departure statistics of Japanese people between 15 and 35 years old shows a completely different curve compared to the people coming to Japan. When we put these two charts together, I find myself wondering if these numbers will be reversed in another 3 years or so.

Number of Youth (Age 15 ~ 34) Visitors to Japan by Departing Country/Territory (2007)

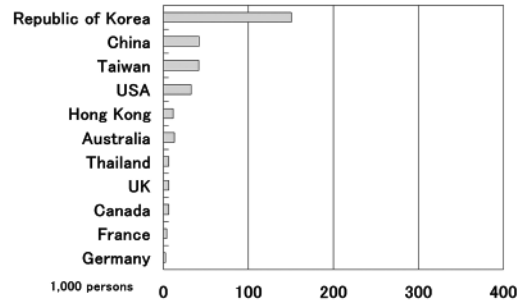


www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice

The largest numbers of foreign visitors to Japan come from South Korea, followed by China and Taiwan, with the USA a distant fourth, then Hong Kong, and Australia.

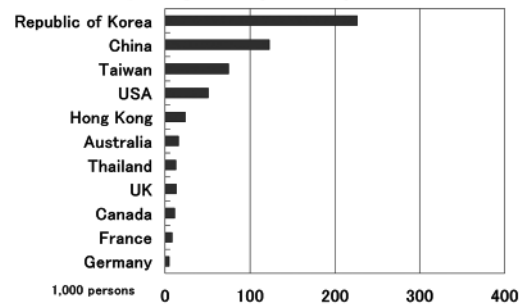
Number of Youth (Age 15 ~ 19) Visitors to Japan by Departing Country/Territory (2007)



www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice

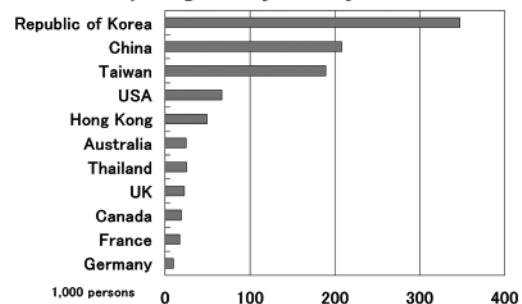
Number of Youth (Age 20 ~ 24) Visitors to Japan by Departing Country/Territory (2007)



www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice

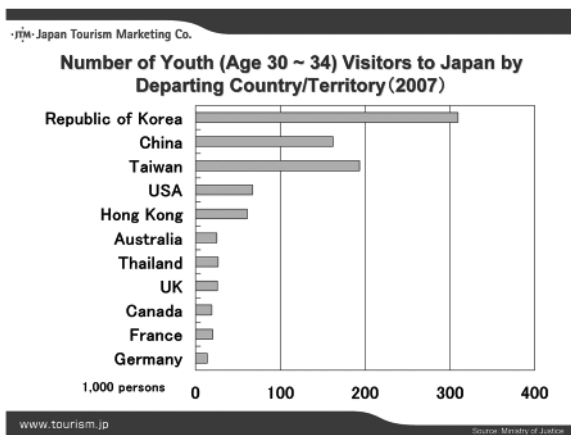
Number of Youth (Age 25 ~ 29) Visitors to Japan by Departing Country/Territory (2007)



www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice

This breakdown by age group shows we get a large number of South Korean visitors in their teens. These visitors are probably on school



excursions. There are two categories of school excursions. One type includes visits to schools in Japan and is included in official statistics. The other type, which more closely resembles Japanese school excursions, has no school visitation but includes sightseeing and other educational objectives such as touring a manufacturing plant etc. School excursions without school visitation are not included in the statistics compiled by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. However, even in the teenage segment alone I would fully expect there to be at least several hundred thousand students coming in on these kinds of trips. South Koreans also comprise a large segment of visitors in their 20s although Chinese and Taiwanese are also sizable groups. South Korean visitors, especially those in their 20s, tend to favor the Tokyo area and enjoy weekend shopping and entertainment. However, with the yen rising so much against the won this year, the cost of traveling in Japan has nearly doubled for South Koreans, so I think we will be getting far fewer visitors from South Korea this year. The late 20s group is made up of more Chinese and Taiwanese, as well as Europeans and Americans. Taiwanese are prominent in the 30s segment, with an increase in visitors from areas like Europe.

In any case, Japan appears to be a country which is attracting the attention of young people around the world.

Before we lead into the panel discussion to follow, I would like to give a brief summary of what we can do to stop the decrease in Japanese young people going overseas and accelerate the increase of foreign visitors to Japan.

First of all we must recognize that, although youth travel is increasing on a worldwide scale, it has been on a decreasing trend in Japan since it peaked in the 1990s. Notwithstanding the structural factor of the shrinking population in the youth segments, the major issue is the fall of the departure rate, that is, there is less interest and enthusiasm about going to foreign countries. On the other hand, we are getting more foreign visitors to Japan, especially young foreign visitors. Many are from other countries in Asia, and we are seeing more from Europe and the Americas, too. In the following panel discussion I would like to think about what we can do to identify and eliminate any barriers or inconveniences that foreign visitors might face when they visit Japan, as doing so may increase the number of people visiting our country.

Thank you very much.

Panel Discussion and Q & A

“What are the Optimum Conditions and Arrangements for Supporting the Tourism Exchange of Youth in Asia and the Pacific.”

Moderator

Mr. Masato Takamatsu

Director and Vice-President, Marketing,
Japan Tourism Marketing Co.

Panelists

4 students from HANNAN Univ.

Ms. Mika Sasada

Ms. Megumi Fukui

Ms. Sayaka Furuta

Ms. Tomoyo Yasue

4 students from APU

Mr. Padgett Timothy (United States of America)

Mr. Ansere N. George (Republic of Ghana)

Ms. Shin Natalya (Republic of Uzbekistan)

Mr. Ebong J. Ndoobe (Republic of Cameroon)

Commentators

Presenters

Panel Discussion

○ Takamatsu :

From the lectures, I believe that everyone has understood that youth tourism is expanding worldwide and, in recent years, the number of youths visiting Japan has greatly increased. So, what is it about Japan that attracts or interests youth around the world to come?

Let us first ask the people from APU. Is Japan a place where young people in your country would want to visit? What about Japan attracts youth around the world? Do you come wanting to see or experience something? Could we start from Timothy?

○ Timothy :

I personally came as an exchange student to APU. APU is very well known and more than 30% of the 5,000 students come from abroad. It's interesting because there is such a wide diversity of exchange students from different countries. In other words, the biggest draw is that you can get a truly international education.

The second point is that Japan is at turning point. Japan is opening up and the time has come for Japan to open her doors to the world. This is beyond the language.

Until now, language had been a very big barrier. It was a serious handicap to studying in Japan. For university students, it used to be hard to study in a language other than Japanese, but that area is what is truly interesting now.

○ Takamatsu :

Timothy has, speaking from his own personal experiences, pointed out the opportunity of international studies. Next will be George from

Ghana. What do young people in Ghana find interesting about Japan?

○ George :

To be honest, most students from Ghana and West Africa do not choose Japan. Language is an issue. You do not often hear about Ghana students coming to Japan. But, in Japan today, I can study all of my courses in English. For me personally, it was a great challenge to come to Japan. In other words, language was an issue. When I'd go shopping, I couldn't understand anything because it was difficult. For example, the kind of meat you want to buy. Sometimes, you do not want to eat pork. But, I don't know if it is pork or beef. That kind of situation was rough and, because there are rough times like that, students do not readily choose Japan. Therefore, most of the students go to America or Europe. Japan is usually the last option.

○ Takamatsu :

When you chose APU, did you choose it over schools in the West? Or, were you interested in studying at a Japanese school from the start?

○ George :

I actually had a chance to go to China. I had a chance to go to Asia. It is a new area and, therefore, offering new opportunities. In any case, the idea of studying in a completely new environment that was completely different from America and Europe where my colleagues and friends studied got me excited. So, when I was asked if I wanted to go to a place like that, I thought to myself that it would be good to study

in a completely new environment that I knew nothing about. In short, I went from knowing absolutely nothing to writing completely in Japanese. Of course, I was afraid at first. But, it was a lot easier than I thought. And, of course, I still have a long way to go. I think Japan is the best in the world in terms of security and safety. It is a very comfortable place to live. Then, there are the various signs and the languages. How to communicate and how to read the language is the starting point. This is very hard.

○ Takamatsu :

It seems that life in Japan wasn't as hard as you thought. Now, I would like to hear from Natalya from Uzbekistan.

○ Natalya :

First of all, being from Central Asia, our impression of Japan is much the same as everyone from Africa. That is to say, Japan seems like an extremely difficult place to live. For us in Central Asia, America or Europe is the place for travel and study. After that come the Asian countries like Korea and Japan.

The reason why I chose to study in Japan was because I wanted new experiences. That is to say, Japan is like a star in a completely different universe. We do not have a lot of information about Japan in the media and, just based on what I knew, Japan was the land of the samurai. I was very interested in these kinds of historical aspects. I was also interested in technology, like robots. So, in that sense, I had this mixed image of Japan: samurais in one hand and robots in the other. That was my impression of Japan and what brought me here. So, my biggest objective was to see what it was really like.

○ Takamatsu :

Natalya, what does this real Japan look like to you now? Is it very different from what you imagined before coming?

○ Natalya :

No, Japan was not a completely unknown universe. I discovered that it is a country on this earth like any other. What I like best is the very international society. Especially at APU, I have been able to expand my knowledge and experiences a great deal. In that sense, I have been lucky. In other words, it is great to study together with students from 87 different countries. I would like for Japanese students to have this same chance of an experience.

○ Takamatsu :

Let us now hear from Ebong from Cameroon.

○ Ebong :

Actually, Japan is not an option for most students in Cameroon. There is the language barrier and there is not very much information about Japan available to us. Most Cameroon students study in America or Europe, but I was personally very interested in Asian cultures. I also lived in China for many years. I learned their system and, while I was doing that, I was given the chance to come to Japan. I also had the chance to go elsewhere like Europe, but I chose Japan. Many students from Cameroon study in America and Europe, but I wanted to try something completely different. At APU, there were only two exchange students from Cameroon. So, in that sense, I like being special. I also find the program to be very good and APU is multicultural, so I felt that APU was my best

option. Therefore, I decided to come to Japan.

○ Takamatsu :

There have been employees from APU in my office and we have had several interns, and I have been to APU's campus many times. It has a completely different atmosphere than ordinary Japanese universities. I'd like my own children to study there.

Next, I want to hear from the Japanese students. Looking at Japan from the outside, what seems interesting about it as Japanese? What do you think is interesting about Japan to exchange students at Hannan University or your foreign friends? Sasada-san, would you please?

○ Sasada :

I am Japanese, so I think the temples and World Heritages in Kyoto are interesting to them, but I often hear from my foreign exchange friends at Hannan University that their country is better than Japan. For example, as we heard before, Japanese students are too cozy to their teachers and skirts of the Japanese students are so short and look commonly dressed. They can feel something different, which may be interesting to them.

○ Takamatsu :

They like something different.

○ Sasada :

Yes, I really sense that in them.

○ Takamatsu :

I see. Fukui-san, how about you?

○ Fukui :

I have lived in the countryside since long ago and it is very fresh air compared to Osaka. Moreover, the people are good, so the people are what attract visitors to Japan. I would like people from overseas to learn more about Japan's essence in how people get along, our ways of consideration, true Japanese women has Japanese spirit, and kimonos.

○ Takamatsu :

So, the people are what makes Japan interesting. According to a JNTO study, the biggest change in what foreigners residing in Japan recognize between before coming to Japan and after being here is their impression of the people. They were not expecting much before coming, but after staying here a few days and then returning home, they gave a lot more points to the people being interesting. I think Fukui-san was talking about that. Furuta-san, how about you?

○ Furuta :

I was born and raised in the countryside where trains don't even run, therefore I enrolled in Hannan University and I see trains are running. There are tall buildings everywhere, so, quite to the contrary, I feel like an exchange student. I think that exchange students have two images of Japan, one of Kyoto, Nara and temples, and the other of, as was mentioned before, cutting-edge technologies, tall buildings, robots and trains. Though there are no samurais, there are mountains like those where I am from where an "old Japan" stills exists in old men and women working the fields. I would like exchange students to understand that, though

Japan is small, there is still a lot about it that they do not know.

○ Takamatsu :

That was very truthfully put. That sounds like extreme community tourism. About three years ago, JNTO invited some consumers from Hong Kong to Japan and showed them around various places. After all of that, they asked them what impressed them the most, to which many responded the landscape of rice paddies on the way to Kusatsu Hot Springs. This “old Japan” that Furuta-san wants to show visitors should be very interesting to foreigners. Next, I would like to ask Yasue-san.

○ Yasue :

I got a new part-time job and it has recently given me a lot more opportunities to come in contact with foreigners. I don't speak any English whatsoever, but I try my hardest to send them in the right direction to tourist spots. Not just me but the other staff try their best to explain things in English, which is characteristic of Japanese kindness and hospitality, I think. If you go to various tourist spots, you can see even the old women trying their best to help foreigners. So, I'd like to see things other than the Japanese culture of temples and all as tourism targets, such as that kindness.

○ Takamatsu :

“People” and “hospitality” are the keywords here. Actually, foreigners highly rate Japanese hospitality amongst themselves. So, since we have heard from students of Hannan University about various interesting aspects of Japan, do you students from APU feel like that on a

regular basis? After hearing Yasue-san talk about the “old women,” I recalled how the old men and women of a Nakatsue village in Oita Prefecture where the Cameroon team was staying during the 2002 World Cup got along great with the players. Ebong, do you find the kindness and hospitality of the Japanese people something attractive about Japan?

○ Ebong :

Definitely so. When I meet lots of Japanese people and tell them that I'm from Cameroon, they are so kind that it reminds me of Cameroon. Both Japanese and Cameroonians are warm, so I feel good in the company of Japanese people.

○ Takamatsu :

Let's hear from Timothy. Do people from Hawaii and America see the warmth, kindness and, as we just heard from Ebong hospitality of the Japanese people an attractive aspect of Japan? Or, do you get the impression that the country is a mixture of technologies and advances, or new things and old things?

○ Timothy :

I was raised in the State of Georgia where the Olympic Games were held. I was also in Japan for the 2002 World Cup. So, I had the same experiences as everyone else, but we have a narrower view of things in mainland America than they do in Hawaii. Hawaii is 20% Japanese and people of Japanese descent. There are 3rd and 4th generation Japanese. Those are the people living in Hawaii. So, Japan is more familiar to them. From what I see, Japan has both an old culture and a new culture. As far

as history is concerned, there is the Meiji Era and traditions that go way back. But, at the same time, they lead Asia in developing new technology. Japan is a leader and, along with Costa Rica, one of the only two countries in the world with a constitution that totes peace. Hawaii can see that. Other parts of America cannot.

So, our problem is the marketing of “Yokoso, Japan!” We came to Japan and are experiencing just how peculiar it is. I have been a student in Japan since 1999, and Japan has been good to me. The same goes for other international students. Japan has a very closed society. But, for example, they had an immigration policy for people of Japanese descent. That was at the beginning of the 20th century, then later in the future, that same policy became an issue. Also, the shrinking population of the countryside is a problem.

○ Takamatsu :

Timothy pointed out in his comments that marketing Japan’s image is one of Japan’s problems. It sounds like Japan still hasn’t conveyed the good things, the interesting things and the attractiveness of Japan to the youth of the world.

Well, we have heard from both our Japanese students and exchange students in attendance, but I would like now to ask Professor Cooper of APU to add his comments.

○ Cooper :

I want to support both sets of students. Undeniably, Japan is a closed society in many ways, but when it comes to personal experiences, it can be argued that that is not

completely true. I feel it is a very humane society. And, it is safe, progressive and functional. I lived in Australia for 30 years, but I was born in New Zealand. I want you to believe me when I say this, but both of these countries are not functional like Japan. You could say that functionality is, in various ways, second rate.

What I think we can say here is that, first of all, the foreigner’s message has not been adequately delivered until now. The “Yokoso, Japan!” program has been developed and its message may reach the current generation and perhaps future generations of Japanese, but prior to that, it did not.

The second point I want to make is that Japan can show a unique side to the world. They can show their characteristic human side. Japan could show its kindness and tenderness. These students have had some good experiences and explained well what I feel. Both sets of students expressed themselves well.

○ Takamatsu :

I would like to hear comments now from Mr. Yamakawa who is Japanese but has lived overseas for an extended period of time and had many opportunities recently to view Japan from the outside.

○ Yamakawa :

I have lived in Thailand for more than 23 years. Twenty-three years ago, I knew nothing about Thailand. I felt that the Thai people looked like us. I was child then and always wanted to go there. I eventually did go and discovered many things, much of which were commonalities with Japan. For example, between Japan and Thailand, Buddhism is the

same. The Japanese are Buddhists. The Thai are as well. But, if you think about the true essence of Buddhism, there is a big difference between the two.

How many people in Japan go to temples to pray everyday? Of course, we go for funerals, but in Thailand, Buddhism is an integral part of daily life and deeply connected to their spirituality. Buddhism is the basis for understanding one another and showing consideration to others. They show sympathy and consideration to others. Buddhism manifests those feelings. So, at a glance, we are similar, our skin color is the same and we share Buddhism. But, 20 years ago, I learned that that was not true. I have learned a lot.

My country, Japan, just to describe it, is also a wonderful country. I am staying at the Nikko Hotel. It is a fabulous hotel. There are all kinds of people in the lobby and you might even catch a glimpse of someone in government, so everyone is extra cautious in all directions. They are watching and being truly considerate of others. However, I learned that they are simply looking straight ahead. Having lived in Thailand, I have opened my eyes to Japan. Naturally, I learned about Thailand, too, but I also learned a lot about my own country. This is what I feel.

○ Takamatsu :

Being physically in Thailand enables one to see various aspects about Thailand and, inversely, get a good view of Japan as well. This is precisely the point of international youth exchange. By having everyone speak, the discussion up to this point has indicated that Japan has various interesting features and stirred new interests as well. So, to the young

people of the world, is Japan an easy country to visit or a difficult country to visit and would they choose somewhere else over Japan? For example, does Japan distribute enough tourist information, including general information? Before, we heard that information on Japan does not get to Ghana, Cameroon, Uzbekistan and, except for Hawaii, the United States. As Mr. Yuasa pointed out, there are various problems that make it difficult to travel to and within Japan such as Japan's immigration policy, visas, physical access to Japan, transportation method and travel fee inside Japan, lodgings where youth can stay and so forth.

Is Japan an easy country to visit compared to other countries?

○ Natalya :

Because of the language barrier, there are difficulties for young people wanting to come here, but, at the same time, it is a safe country. Also, public transportation is very well developed. Anybody, even newcomers, can blend into Japan. That is to say, they can easily use public transportation. And, indications are provided in both English and Japanese, so it isn't decisively difficult. I think it is easy to travel within Japan.

○ Takamatsu :

What do you think, George?

○ George :

The distribution of information is definitely the biggest issue. In short, there was a lot I wanted to know before coming. After you get here, you learn a lot. That is how I felt. For example, you worry about whether the

Japanese are kind to foreigners or not, but you don't know until you actually go there and meet the people. But, then, that may not be the case. For example, there are police states where you constantly feel like you're being watched. But, when I got to Japan, I felt the people were completely different. They are kind, they are not cold and they do not turn their faces away. So, the problem was language, English. For example, there were times when I wondered whether I could get a proper response in English or not. Most of the people really seemed like perfectionists. If you start speaking English, the Japanese do not want to make a mistake. Not to feel humiliated, they do not want to talk and kind of run away. At first, I felt like they tried to run away. But, I misunderstood. So, properly conveying information is very important to them.

Regarding the way that Japan got involved with Ghana, I wonder how many Japanese know that, though Japan has an Embassy there. Even if they come to Ghana, they do not know where the Embassy is. I am betting that the Japanese people know that Ghana is a country somewhere in Africa, but not much more than that. So, two-way communications are important towards properly conveying information.

Of course, there are embassies in foreign countries and they fulfill the role of conveying policy, and I think the Japanese government is very conscious of this. For example, they provide scholarships. When thinking about going to Africa or somewhere, coming to Japan to study seems like a good idea. And, those who study in Japan on a scholarship might become good ambassadors or the best ambassador in the future. So, it may be like marketing. More

so than what is written in the newspapers, I believe my actual personal experiences. So, our future is on our shoulders. With international trade or whatnot, I am confident that I know the situation in Japan. My experiences are far more than anything you can learn from someone else. So, you cannot promote Japan with just money. To make a good investment, if you think about the various elements, you have to build an effective policy and then follow that policy.

China is seizing the opportunity. We are gaining knowledge. When following the media or when the news says China did this or that, I don't swallow it just as they tell it. For myself, seeing is believing. I rearrange the information myself. What is the actual situation like? The same applies to Japan. By doing that, we gain a lot more.

○ **Takamatsu :**

Have the students from Hannan University traveled abroad? Would you tell us in turn what countries have you been to?

○ **Sasada :**

Near to Japan, I have been to China, Hong Kong, Vietnam, Cambodia, Malaysia and Thailand.

○ **Takamatsu :**

Fantastic!

○ **Fukui :**

I have been little abroad. I have only been to Australia and Hong Kong.

○ **Takamatsu :**

You've been to two places, so I don't consider

that a little.

○ Furuta :

I have been to Guam and Korea three times.

○ Takamatsu :

Korea three times. You sure like it.

○ Furuta :

I do. I've made Korean friends and been to see them several times.

○ Takamatsu :

It sounds like a school exchange program.

○ Furuta :

Yes, it was.

○ Takamatsu :

Yasue-san, how about you?

○ Yasue :

I have been to Guam and Korea.

○ Takamatsu :

I imagine that, as foreign travelers in these various countries, you felt inconvenienced in diverse ways and even the Japanese, as foreigners, had easy traveling. Looking at Japan with that same eye, do you feel that there are things that would make traveling difficult for foreigners to Japan or inconvenience them? Yasue-san, what do you think?

○ Yasue :

First of all, public telephones. When I wanted to call Japan from Guam, I found a public phone right away. Struggling with a friend, we some

how figured out how to call and got connected with Japan. In Japan, when I was running around in Kyoto with friends, we were asked by a foreigner where a public telephone was, but with cell phones so widespread in Japan, I had no idea where a public phone might be in Kyoto. This person then asked to borrow my cell phone, but I didn't dare to, so we went our own way. I felt guilty for not doing anything to help. There are definitely others than this person who are looking for public telephones. Kyoto is putting so much effort into tourism, but they've only thought about the Japanese side. I didn't realize how hard it was for foreigners to travel around Japan until I myself went abroad.

○ Takamatsu :

You gave us a very real portrayal. This is a serious issue. Furuta-san, is there anything you have noticed?

○ Furuta :

My impression of traveling overseas is that you have to keep your money somewhere other than in your wallet, whereas, in contrast, Japan is safe.

Also, the Japanese people are affectionate and kind, but, if they feel like to speak to a foreigner in trouble, they first become embarrassed that they, as was mentioned earlier, won't say something right in English or will make a mistake, so they lose their courage to speak. If we could only be more courageous. When I went to Guam and Korea, there were signs in Japanese and bus drivers and, of course, hotel staff, spoke Japanese very well, so it was very easy for me to get around.

○ Takamatsu :

The Japanese don't want to speak English unless they can speak it right. Have the APU students felt like that before? Ebong, how about you?

○ Ebong :

Well, the way I see it is that, if you don't speak English, then you are not interested in learning it. For example, if we compare Japan and China, a Chinese person, upon seeing a foreigner, will go up to him and ask him questions. They explain that they want to be friendly and admit that they want to practice their English, but the Japanese do not make that kind of effort. They always say that they don't know anything. They may dislike talking, but I have tried really hard to strike up a conversation with some Japanese and their response is that they don't understand me and end up running away. Japan should do something about that through education. They need some kind of action so that students study English more.

○ Takamatsu :

That is an interesting point. Japanese study English for a relatively long time, but they are behind when it comes to using it. Timothy, do you feel the same way?

○ Timothy :

This is completely relative, nonetheless, for what regards communication barriers, it has to do with the desire and notion to speak English in particular, so, in my opinion, Japan is an interdependent culture. In other words, I sense that the Japanese do not feel very obligated to express themselves to people from

other countries. And, that has an effect on communication. The system for teaching English in Japan needs improving. By that, I mean things are fine as far as reading and writing English, but it is not adequate for speaking, which is the necessary component of communication.

○ Takamatsu :

We've taken this topic all the way back to English education in Japan, but let me just backtrack a bit. Fukui-san, could you tell us about anything you felt when traveling abroad or what you thought Japan should improve when looking at it from the outside?

○ Fukui :

In high school, I went to a sister-school in Australia on a home stay program. The host family was really great. They took me various places including to meet aborigines once on a holiday. I had no clue what the aborigines were saying, but they happily showed me their food, homes and even inside their homes. They taught me that being kind was their tradition.

But, in Japan, the people that uphold tradition are the elderly generation, which has never come in contact with foreigners. Though they want to introduce the culture to people who want to know about it, they probably do not speak English and do not know how to act with foreigners so it ends like that. Foreigners are good at using body language, but Japanese do not seem to have that power of expression. Conversely, when you go to a tourist area where they speak English, it seems like they only show the shallow areas of tradition as if Japanese traditions were watered down, so something needs to be done in that respect.

○ Takamatsu :

The point here is that it would be good if the ordinary Japanese could communicate on an ordinary basis, including body language. I find that a very good point. Sasada-san, having been to many different countries, what do you think?

○ Sasada :

I backpacked my way both in Japan and abroad, without relying on tours. I arranged everything myself including air flights and lodgings. In Japan, I went to various places in one week and spent ¥80,000 for everything. On the other hand, the trips to countries in Asia were about a month long and cost ¥170,000. Of that ¥170,000, about half went to airfare, so between one week in Japan and one month in Asia, if you look at just room and board, the price does not change much. During the one-week trip in Japan, I used about ¥10,000 per day and came home with about ¥200 in my pocket, so I pushed it to the limit. I went on the spur of the moment to Kusatsu Hot Spring and asked if there was a vacant room. After a few minutes, I was told there was a room for one person. That's how full they were. So, I felt that there were not enough lodgings. In contrast to that, on a one-month trip to Asia, there are inexpensive lodgings that cost ¥360 a night and there were plenty of hotels. If you go there, you instantly find a room. I sensed a big difference.

○ Takamatsu :

Can young people not find in Japan an inexpensive hotel that costs about ¥3,600 a night?

○ Sasada :

Not even in a tourist spot.

○ Takamatsu :

Several issues were just pointed out to us. To begin with, because there is not enough information on Japan abroad, one is left with the impression before coming to Japan that Japan is a difficult place to visit and, should one go, it will be tough, though this is not the case, as one learns, when one does come to Japan. Language seems to be a rather big issue. By that, I mean that, even though the Japanese should be able to communicate, they do not speak unless they can speak well. They can write fairly well, but are behind when it comes to speaking. Then, because Japan is a cell phone-oriented country, there is the problem of not being able to locate a public telephone when traveling within Japan. I myself have at times searched for public phones when abroad, so recently, since I need to stay in contact, I rent a cell phone that can be used in the destination country before departing. Foreigners visiting Japan may feel the same thing. Then, signage was also noted as an issue of language. Moreover, another issue that is related to language is the behavior that Japanese people show to foreigners. It's a shame that Japanese people want the foreigners to learn more about Japan and even body language would be acceptable, but the Japanese cannot express themselves. But, that unto itself may just be a part of Japanese culture and would not be easy to change across all of Japan. Then, the lodging issue that Sasada-san pointed out could definitely be a barrier to young people. Even in Japan, there are inexpensive lodgings. In Naha city of Okinawa prefecture, you can

stay, sleeping only, for ¥700 or ¥1500 a night and they will shuttle you back and forth to the airport. However, on Honshu, there are not many hotels with such inexpensive rates.

So, who must do what to get more young people to visit Japan with all of these problems? Natalya, what do you think?

○ Natalya :

This is a very tough problem, I think. With young people, the purpose of travel is often different. When traveling abroad, you obviously absorb a culture other than your own. In short, you sightsee, you enjoy yourself vis-à-vis entertainment and then return home. Amongst other young people, there are those who travel to learn about culture or to study language. So, young people differ by what they think and the responsibilities they take. For example, if a young exchange student wants to explore a new culture or go sightseeing, there are those who obtain information on the internet. As long as there is a network, anyone in any country can get information and the people in the host country can post information on home stay programs and so forth. This type of site and network would be best if it were official. A system is needed so that someone launches an official site and can check on who is offering home stays, etc. That would make things safer.

Another thing is that some young people come with the purpose of experiencing a culture or experiencing a language. Those people will do volunteer work, take part in internships or do seasonal jobs. Their objective is completely different from sightseeing. That kind of experience is much deeper. In short, you interact with local people while doing the work. So, you

completely become a part of the community. Governments should create systems so to speak. NGOS, NPOs and non-business entities would also be good for this. Places that offer internships also need to create a system. And, they must take responsibility for that.

Also, the media can also play an important role. Media can promote youth tourism by broadcasting lots more information to various countries. This should include information on volunteer activities and internships. Travel agencies could join in that in the future. Therefore, responsibilities would be divided amongst the roles played by government, the business world, media and then student organizations.

○ Takamatsu :

Natalya is saying that big results could be produced by having the private and public sectors and mass-media each shouldering a role. So, who would be organizing the whole thing?

○ Natalya :

The biggest role would be played none other than by the government. A department in government or a department within a department should be responsible for this kind of youth tourism.

○ Takamatsu :

So, the government should be taking the initiative. Mr. Jutakorn, in Thailand, what roles do the government and TAT play?

○ Jutakorn :

The Tourism Authority of Thailand (TAT) has shouldered the role of coordinator between

the public and private sectors since long ago. In short, when a private group wants to start up some kind of business, TAT asks opinions about obstacles and so forth and then conveys that information to the concerned agencies. For example, there is Phuket. When I was a teenager, there was only one B737 flight a day. And, there was just one road to the airport. There was just one road from Phuket City to Paton Beach, and it was extremely difficult to get to any other beaches. On that note, the people of Phuket complained to TAT, so TAT made a proposal to the Thai government. Then, through the cabinet and ministers, a special budget was obtained and a Phuket development project was started. Therefore, coordination between the public and private sectors is a very important role in tourism. We are fortunate that TAT was established half by the private sector and half by the public sector. As an organization, they do not make profits and budgets are secured from the government.

Once, some time ago, UNESCAP staged a seminar on coordination between the private and public sectors. We clearly identify what the responsibilities of government are and what the responsibilities of the private sector are, and then we specify who coordinates all of that. By doing that, the public and private sectors head in the same direction and, by following the same course, they can reach a common goal. Accordingly, in Japan, JNTO could, I think, fulfill this kind of responsibility.

When I was a teenager, all I knew about Japan was my hero Toshiro Mifune, samurai movies and the song “Ue Wo Muite Arukou (Sukiyaki song)”, which I loved. Now, there aren’t so many, but there used to be a lot of group tours

to Japan from Thailand back when the standard of living in Japan wasn’t so high. The economic growth that Japanese businesses attained worked like a kind of magnet; as they expanded operations in Thailand, the Thai people wanted their children to learn Japanese with the hope of working for a Japanese company. When I was in college, I learned of a scholarship program for Thai students from the Japanese government. With scholarship money provided via the Thai government, Deputy Prime Minister Dr. Sumkid of the Thaksin Administration sent students to learn in Japan.

Some 50 years ago, inbound movement to Thailand started. Japan has put efforts until now into sending Japanese abroad. Now, since inbound movement has been deemed necessary, most countries are promoting inbound traffic, therefore we all have to compete with each other. Nonetheless, something can be done somehow.

When I was younger, there wasn’t any internet, so if I wanted to learn about Japan, there were only movies and songs. A long time ago, there was a singer from Thailand who underwent five years of training in Japan. Though old now, he still sings Japanese songs, so I think he could be used to promote tourism in Japan. For example, as Dr. Kaye Chon said, Jackie Chan is a tourism ambassador for Hong Kong, so something similar could be done. Taiwan and Japan have been interacting for about 50 years through the work of the queen of music, Teresa Teng. She also got training in Japan. She is very famous in Taiwan and China, so I think her songs could be tactically used.

Before, many countries only thought about inbound movement. But, in this new age, this

age of a new generation, we see the importance of give-and-take. We need tourists from Japan and we are making efforts to send people from Thailand to Japan. Inside Japan, it should be recognized that something needs to be done as the welcoming party.

○ Cooper :

May I comment on something? This is just my opinion, but what Japan is lacking is a governmental agency. In 1983, Australia created a Ministry of Tourism. Until then, Australia had an organization like JNTO. But, what was missing was a link directly connected to the government. Therefore, I think it is necessary to raise the tourism bureau to the level of a ministry. And, it should be done soon.

Another point that what we understood in Australia is that 90% of the people who travel for business are managed by very small businesses. And, they cannot manage it well. Therefore, what is needed is to develop the management capabilities of the government and regional tourism bureaus. Then, small travel agencies need to improve their management as well. Training should be provided so that they know how to care for tourists coming in from abroad as well as those going out of the country. This will bring success to inbound tourism. There were times when Japan had a large number of inbound tourists. There were high numbers in the 1920s, 1940s and 1950s. This was inbound traffic. This should be looked at again.

○ Takamatsu :

Dr. Cooper just offered his comments, but let me point out that Japan established a

Tourism Agency in October. Though it is not on the ministry level, it is a big step in the right direction. Hopes are that Japan's Tourism Agency will provide the coordinator role that Mr. Jutakorn spoke about in reference to TAT.

At this juncture, I would like us to turn our sights 180° and focus our talk on the international exchange and overseas travel of Japanese youth. As I mentioned in my presentation earlier, though, over these past ten years, there has been an increase in foreign youth to Japan, the Japanese have been traveling less and less overseas. Three to five years from now, the numbers may flip in favor of inbound visitors. International exchange grows because of two-way traffic, so, if Japan's youth stop traveling overseas, there would be all the reason to worry about whether Japan was all right in the international community.

To our participants from Hannan University, have you seen a notable increase in persons amongst the people around you, your friends, other people at your school, upper classmen and lower classmen who are not interested in traveling abroad?

○ Sasada :

The other day when some friends and I were planning a graduation trip to Turkey, I suggested, because of my backpacking experiences, going on our own cause you meet more people and it is more interesting, but my friends hadn't been abroad much and were uncomfortable with the idea, so they argued that a packaged tour would be better. I didn't think it would be right to force anyone to do something they were uncomfortable with, so I consented to the packaged tour.

One personal experience I had backpacking in Asia was that a European who was traveling alone said that the Japanese often move in groups. He was probably referring to packaged tours. There are so few Japanese who travel alone that I have been called crazy to arrive by myself in some places. Moreover, I have heard that there are lots of people who speak three languages because there are other countries just beyond their borders. My honest opinion is that the reason why the Japanese don't speak English is because we're an island nation.

In the debate over packaged tours and traveling alone, I thought something in-between would be good. For example, I went with Yasue-san to Guam on an "open plan" that had just airfare and lodging, but I didn't find anything like that for Turkey. It was harder to travel to Turkey than Guam.

○ Takamatsu :

Fukui-san, how about you? What do the people around you and you yourself think about going abroad?

○ Fukui :

Well, basically, everyone is interested. I think, deep down inside, everyone wants to go places they have never been, see things they have never seen and meet people they have never met, but, in today's information world, too much information is getting to students like me.

○ Takamatsu :

What kind of information do you get?

○ Fukui :

With the internet and TV, you can see what

any country is like with just a click of a button. But, I sense something inversely bad about that. A dilemma occurs: though the desire to travel comes out, this also encourages one to stay put. In the days that many people traveled abroad, I think that many went with just their imagination. But, nowadays, because of the excessive amount of information, a gap has formed between idealities and reality. People resultantly stay put and you have the year-on-year decline in travelers. People today are interested but don't take a step.

○ Takamatsu :

You have made a very interesting point. There is too much information available and negative information gets in. As a result, people are interested but don't budge. This is a perfect picture of the market situation. Furuta-san, how about you?

○ Furuta :

I love to travel. I'll do some kind of part-time job just so I can travel. But, talking with friends the other day, I said that now is the only time one can travel, but they argued that there are other interesting things to do with the money they earn from part-time jobs than travel such as buying clothes and bags that they like. Their point is that there is not a rush to travel because, just because you get married, it doesn't mean you can't travel and you can travel all you want even when you're old. When I told that to my mother, she talked about how the times have changed. Her generation didn't travel once they got married, so she traveled a lot when she was young. The reason why young people do not travel today is because there are other

interesting things to do and they think that they can always take a trip later.

○ Takamatsu :

That is a very important point. Forgive my imprudence, but is your mother in her 40s or 50s?

○ Furuta :

She's in her 50s.

○ Takamatsu :

People in their 50s today abruptly stopped traveling when they hit their 30s. The national percentage of women in their 30s that went abroad in the 1990s was less than 10%. Once married and kids popped out, travel abroad was considered impossible. It was period in which you didn't travel even if you wanted to. In any case, people in their 20s or 30s do not travel abroad on the belief that "they can go anytime if not now." What about the people around you, Yasue-san?

○ Yasue :

I feel absolutely the same way as Sasada-san and Furuta-san, but I haven't the adventurer spirit or guts that Sasada-san has, so, if traveling alone, I want to take the safe, easy and inexpensive packaged tour to major tourist cities.

Like Furuta-san said, there is too much alternative entertainment to traveling. I was made an offer by a travel company and they gave me a task to "think of ways to get people who spend their money on other forms of entertainment to sign up for trips." I suggested that travel agencies should lure consumers

inside with tea or something, like a convenient store, so that even people who travel once every few years would drop in. The bottom-line is, between a brand bag and a trip, to be honest, I bought the brand bag. I think there are a lot of young people who think that way. So, I think that travel agencies should design a fun trip. I like trains and the Shinkansen in particular. I would, for example, definitely take a tour in which I can see inside the train depot and wear the uniform. If there were plans that combined hobbies with travel, I think a lot more young people would travel because then they could both travel and spend time with their hobbies.

○ Takamatsu :

We heard one proposal here. Yasue-san also pointed out that other forms of entertainment and other ways to spend money are competing with travel. This phenomenon is not limited to just young people. If you look at today's travel market, there are many cases where, for example, one couldn't go abroad during summer because he had purchased a plasma TV for 500,000 yen to watch the Olympics, or someone who went to a nearby hot spring that is close enough for a day trip because going to a hot spring overnight was too much trouble. As we just heard, there is competition between brand bags and trips. Today, because of the sharp rise in the yen, one can, like a decade ago, go to Singapore or Seoul to buy a brand bag, but when the yen was weak, buying it in Japan was cheaper than buying it abroad, so there is another reason for not traveling. What I would like to emphasize within this discussion is that no one even mentioned "where to go." Before taking a trip, people used to think of "where to

go” and “what to do” there, but nowadays, the process of selecting a destination has changed as the order is to first think of “what do I want to do” and then decide “where can I do that.” Therefore, to get young people to go abroad, it might be better to show them that there are more meaningful things to do there. For example, to get Yasue-san to go abroad, there might be a visit to the Taiwan Shinkansen train yard, which most Japanese people have not seen.

Well, let us now hear from the exchange students at APU. I believe that APU has about 60% Japanese amongst the student body, so what impressions do you have about them? Are they highly interested in going abroad compared to young people in your country, about the same as you or not really interested in overseas travel? Ebong, what are your thoughts?

○ Ebong :

Young people in Cameroon want to go abroad, but, in the case of Japan, for example, it is extremely hard to get a visa. Cameroon universities do not have those kinds of programs. So, many students must raise the money themselves or find a scholarship themselves. But, even if one gets accepted, who is lucky like me, there are still barriers. In short, you have to deposit a large amount of money in the bank. Most people do not have that kind of money laying around. In Australia, you can get a part-time job of some kind. But, in Japan, you can't, which is a problem. It's tough.

Then, if you compare it to China, China has a lot of hotels. And, there are youth hostels as well. So, students who travel as tourists can stay somewhere for a relatively low rate. It would

be good if Japan had the same kind of offering. Another good idea would be to have this kind of hostel on campus for young tourists from overseas.

○ Takamatsu :

You've told us about young people who come to Japan, but do your Japanese classmates want to travel abroad and do they travel abroad?

○ Ebong :

I think they want to go abroad. I think they would have fun. Amongst the Japanese students, there are those who truly want to travel abroad, but the problem with this is that, for many, it is purely to study English. They need to look at travel abroad from many more angles. So, in some cases, the travel does not adequately meet the demand of most university students, that being education. In that sense, they wouldn't enjoy themselves on a tour. If they were independent, they should be able to search for something compatible to their wishes. So, in that sense, they are probably only about half interested.

○ Takamatsu :

Natalya, I look like you have something to say.

○ Natalya :

Japanese students and especially those studying at APU want to go abroad very much. For me, I have become aware of so much by immersing myself in this international environment. In other words, I have done more than what any media or the internet offers; I have truly learned things. Just by talking with

someone, just by chatting with another student, I have become incredibly interested in so many countries. There are so many places I want to go. This kind of international environment is a very good base. Basically, Japanese students know certain things, they learn more things and they learn about various kinds of people and various different cultures. That makes them want to go abroad. Students and even students from local exchange programs in Osaka and elsewhere are very interested. They have shown great interest in my country, too.

○ Takamatsu :

With students from some 87 different countries, APU has a very unique environment, so the students must hear about many interesting countries. And, compared to a typical university, there are likely more students interested in overseas and who actually want to travel abroad. Prof. Todoroki, from what you have seen, do recent college students have the intention of traveling abroad?

○ Todoroki :

Our school definitely has many students who are interested in the Asian Pacific Region and have come specifically to study about it, which may not be the case with other universities. Nevertheless, there was a similar trend back in the early 1990s when I was student. Around that time, the yen shot up in value after the Plaza Accord and a kind of backpacking boom occurred in which any college student went abroad as a backpacker. Because of the boom, there were many that felt they had to go abroad almost like an obligation. Everyone carried a copy of "Chikyu no Arukikata" (Backpackers'

Guide) like a Bible. This was really a long time ago. Traveling alone was the new thing way back when and we were tickled by an adventurer spirit, but looking at students today, they seem sickened by all of that. That's the generation today. The trend among students today is that, though they are interested in abroad, they are much more interested in what you can do than where to do and whether it is a backpacking trip or packaged tour. Therefore, rather than a conventional trip, we have an international exchange program, which we call Active Learning, which we aggressively offer students. We manage it as a lecture and it has been so successful that we fill all openings as soon as we open registration.

There is strong demand for activities that stimulate the student's motivation such as experiences or activities that match one's major. It seems as though the student's interest has shifted to what can be done and how it can contribute to the student, rather than where one goes.

○ Takamatsu :

You spoke of students as though they were passive, so could be slightly more specific? And, if the APU students have any thoughts or opinions about Japanese students being more passive than before, please speak up.

○ Cooper :

Japanese students who attend APU are looking for a multicultural experience. There are students from 87 different countries and this includes Japanese students. About half the students are Japanese. So, you could say that the program is successful because there are

Japanese students. So, in that sense, there is not a big difference amongst students for what regards APU's case.

○ Takamatsu :

Are there any other comments? George, please.

○ George :

I have a class where half of the students are Japanese and the other half Chinese. And, when one of my classmates asked me where I am from, I say "Ghana," but he heard "Kenya." So, he asked me if "he can see lions and elephants from a window of his house in Kenya." I tell him that I live in a city and that we have houses just like anyone else in the world. So, this shows that there is too little information going around. And, there are no chances for going abroad. So, what is hard for young people is to go abroad even if they want to. Those that actually do are few and far between. I think most of them take packaged tours. When you go on a packaged tour, you do not get off the beaten track. Say, you want to go to Latin America. Do you have the chance? You may be able to, for example, study the language. Rather than go to a language school because, most Japanese, when it comes to language studies, can write other languages but they cannot speak them, because they haven't any opportunity to speak them. But, if you go to that local community and try living there, using me as an example, you have to remember the Japanese. Wherever you look, everyone is Japanese and speaking Japanese. I'm forced to learn. Rather than sit in a classroom and study, I pick up the language around town and learn. Given that, I think that packaged tours should be planned based on what interests

Japanese youth. If there is such an interesting packaged tour, even most backpackers will choose the packaged tour.

○ Takamatsu :

We have been discussing how to encourage young people in Japan to travel more abroad, but if there is anyone who would like to make a comment or ask our panel a question, please do.

○ Participant :

My name is Muramoto and I am a fourth year student of tourism at Nara Prefectural University's Faculty of Regional Promotion. To begin with, I wish to raise a point that was not mentioned in the discussion as to whether or not Japanese youth are interested in abroad.

I think more importance needs to be given to the rise in irregular employment of young people that was in Mr. Takamatsu's presentation. In the world around me, there is a considerable number of young people with money, but there are also many students and job-hoppers without any leeway to even dream about traveling abroad. In that kind of situation, it is very difficult to be interested in overseas. I think that, within today's globalization, the state of economy is going to affect whether Japan is interested in going abroad or not.

Another point is education. This was talked about quite a bit during the panel discussion. English education in Japan does not really motivate young people today to travel abroad. I think it is just the opposite; test-centric English education is making students and young people hate English and dampening their interest in the world abroad. That is happening in the course of education we are receiving. Japan needs

to rethink how it teaches English from the perspective of promoting interest into overseas. The same goes for the economic situation. They need to consider all of that when thinking both about inbound and outbound travel.

○ Takamatsu :

One part of the comment we just heard was about the very large problem of irregular employment. It was also pointed out that Japan's English education is not encouraging young people to look overseas. If anything, it is turning people away because it is positioned within the testing system. Would the Hannan University students who are studying English like to say anything about that?

○ Yasue :

I personally do not hate English. I took two classes, one on grammar and the other for conversation with foreigners. The grammar class was the "this is a pen" kind of stuff and, if going overseas means to endlessly repeat that, I do not want to go. On the other hand, studying about aborigines or tourism from middle school onward, I think, would implant curiosity that would make one want to go at one time or another, therefore, like Mr. Muramoto said, I would want to go abroad if English were not taught to test but instead were taught not so much as play but as if I were abroad.

○ Takamatsu :

Yasue-san mentioned middle school, but is there anyone here who came in contact with English in lower school?

○ Fukui :

At cram school, I did in fifth grade, higher elementary.

○ Takamatsu :

Did that influence you in any way?

○ Fukui :

It was mostly about pronouncing the ABCs, and did not incorporate grammar or anything like that in particular.

○ Takamatsu :

Did brushing up with English in fifth grade make you interested in it?

○ Fukui :

Yes, it did. But, not until I started liking my cram school teacher. The key here was that I had first started liking my teacher before I started liking English.

○ Takamatsu :

Timothy, please.

○ Timothy :

What I wanted to say is that the APU students are very fortunate. There are few students and some are economically blessed. However, looking at the situation in Japan, the buying power and income of families are the same as ten years ago. But, the cost of living has been steadily rising for the past thirty years, according to economists and people in the finance bureaucracy. Therefore, the fact that these students have the opportunity to go abroad, can work part-time and then go with their backpacks on their backs is because they

live in a capitalistic society.

My solution is for NGOs, organizations like JICA, other types of organizations and trade schools to develop cooperative programs for studying in various countries. For example, people involved in trade could go overseas, without going to higher level of schools, to work in the port, for example. This could be done for agriculture, as well. The individual could then learn the language by being there. The people of Japan are one of Japan's biggest assets. When I met Japanese abroad, they served as ambassadors to Japan. Seeing their warmth and kindness, foreign students want to come to Japan. Your biggest asset is your kindness.

○ Takamatsu :

Timothy has proposed that each and every individual fulfills the role of a goodwill ambassador during their international exchange. Does anyone else have any opinions or comments?

○ Participant :

My name is Nishimura and I work for a travel agency. I want to add a little to something said earlier, that being Japan's English education for passing exams and practical English. The term "language barrier" was used. I think that people would be more motivated to go overseas, that is, to see things with their own eyes, taste things with their own mouth and think with their own heads, if English were taught as a communication tool rather than a language. What needs to be understood is that the Japanese are overly reserved. Maybe, they can speak English, but they are not aggressive about communicating. Japan's diplomacy seems

the same. This is the bad side of insularity. Therefore, I would like the Japanese prime minister to promote tourism and interaction with overseas. I wish tourism would be undertaken not just by the Japan Tourism Agency but the entire country from the perspective that it will develop not only Japan's national power and promote peace but will also foster those who will shoulder the future in diplomatic matters as well.

Conclusion

Director and Vice President, Marketing,
Japan Tourism Marketing Co.

Masato Takamatsu



Whether young people in Japan today turn their attention to the world outside or not has ultimately very much to do with how Japan is recognized in the world and what position it has. Also, the notion of language as a communication tool that was pointed out applies not only to English but Chinese, Korean and Thai as well. My company has welcomed many an intern from APU, and many have spoken four languages. For example, about 20-year old Malaysian student speaks Malaysian, Mandarin, Cantonese, Japanese and, nowadays, learns Korean. Compared to that, Japanese students can not even only handle English. Something is different here.

In our discussion up to this point, one thing we determined is that is common amongst outbound young people from Japan is that they are interested in abroad. Not even once today was it said that that interest has been totally lost. But, they do not go abroad. They can not go. One reason why is, as was mentioned earlier, economical issues. However, the young people from other Asian countries that are out traveling the world are not necessarily from well-to-do families. They work, save up their money and use it to travel abroad rather than buy brand goods. Of course, it would be nice to be able to buy brand goods, live an affluent life and still travel, nevertheless there are still people in other countries as well that travel without buying the brand goods. To get Japanese to go, we need to think about the vectors that lead to that and the orientation schemes.

Then, we heard a lot about education.

Communication as opposed to just language, education that encourages students to look at the world: this is an area that may ultimately concern school teachers. For example, are middle and high school teachers telling students about their experiences?

Another point that we heard everyone mention often was traveling for a purpose, that is to say, the objective of traveling. It was suggested that, if travel with a purpose to do something could offered as a number of packages to choose from, young people might be more motivated to go overseas.

In thinking about specific ways to resolve issues raised in today's panel discussion, it was mentioned that effective cooperation between the public and private sectors has sufficient potential to promote both the inbound and outbound travel of young people. It was also said that, for Japan to live within, be an active part of and contribute to the international community, it is the responsibility of our generation to greatly increase the interaction of young people.

The constructive comments of our panelists have been truly helpful. I thank you one and all. I would also like to again thank our commentators for their cooperation in maintaining the flow in more ways than one.

With that, I would like to conclude this panel discussion. Thank you for your attention.

Closing Remarks

Chief of Tourism Unit, United Nations Economic and Social Commission for Asia and the Pacific (UNESCAP)

Ryuji Yamakawa



As a final word, I would like to express my appreciation to the organizers, but before I do that, let me just say how useful and how interesting this seminar was. It was extremely interesting and productive, and I personally learned a great number of things about youth tourism.

The first thing I learned is how difficult it is to understand youth tourism. That is because diverse factors are involved. For example, there is insufficient data, there is not enough information and research is still inadequate.

The second point was - and I imagine everyone feels the same - that more should be done to understand and focus on this important field we have called youth tourism. Moreover, we all should recognize that youth tourism carries merits for hosting local communities and serves as a useful tool for strengthening international ties and taking international understanding to greater depths. Of course, numerous issues were noted. But, then, we heard also several extremely good proposals.

Perhaps, the most important or - shall I say - practical proposal was the mechanism we heard about in Professor Maeda's discourse. That is to say, to systematically promote youth tourism, we need a promotional mechanism. I found this to be very important. And, as the other speakers pointed out, partnerships are very important. It was noted in the talks that, beyond the tourism industry unto itself, cooperation, collaboration, centralized consultation, partnerships and relations between the private and public sectors and communities are all important. Or, in other words, a consensus

is important.

I want to extend my appreciation to all of the organizers. First and foremost, I would like to recognize the efforts of the UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific. Could I get a round of applause, please?

And, of course, there were many other persons who contributed to the success of this seminar. This includes the guests from abroad, the students from Japan, the many people on the staff seated over here, who dealt with the plethora of technical issues, and the simultaneous interpreters. To all of you, I want to say thank you. You did a splendid job. Thank you very much.

With that, let me collectively thank all of you from the UNWTO and other organizations, and all of the individuals who took part, and wish you one and all a prosperous future. Thank you, everyone.

Student-Guided Tour of the City of History and Culture: Sakai City Walk Tour

Professor, HANNAN University Hiroshi Maeda

The student-guided tour planned as the excursion for this International Seminar was designed to have seminar participants (lecturers, APU panelists, etc.) participate in an actual tour and interact with each other and with the local people to think about the ideal content and methods of youth tourism in the future. This tour was unique in that it was planned and tour-guided by the students themselves, who were the seminar panelists. The planning and management of the tour was also backed up by the full support of Sakai City's municipal tourism agency, tourism volunteers, Buddhist temples, and residents engaged in local industries such as cutlery and incense.

The primary significance of this student-guided tour is that the tour itself became the "place of practice" of the youth tourism exchange which is the theme of this seminar. In the tour, the Japanese students who participated as panelists and audience members acted as the hosts to deepen communication, which resulted in an exchange that provided a degree of enjoyment and cordiality unattainable through panel discussions alone.

Another significance of this tour is that the tour provided participants an interacting opportunity with local community. This tour was a form of community tourism based on "real interaction" with the residents of Sakai City, the tour locale. That was why, more than the interaction between hosts and guests, the tour helped to deepen the participants' interest in the local community and left a deep impression in their memories. Likewise,

the local residents, who usually deal with ordinary tourists on package tours, were deeply moved by their interaction with young people studying tourism and cultural exchange, and now have a strong interest in, and high expectations for, youth tourism exchange.

In these ways, we can say the student-guided tour, which was made possible by a partnership between the participating students and the local community, was more than a forum for exchange; it also served as a "model case," so to speak, for youth tourism exchange. I hope that in upcoming days and years, more of these kinds of programs with diverse content will come out of our international seminar under the theme of youth tourism exchange.